
理想を胸に

春秋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理想を胸に

【コード】

N7938V

【作者名】

春秋

【あらすじ】

ネギま！の世界で代行者のレオナルドの活躍を書き記したものです。

プロローグ

村が燃えている。

炎で朱く染まった村。

村のあちらこちらに石像がたっている。

石像の顔は見覚えのある人ばかり。

いつも世話をしてくれていたお婆ちゃん。

魔法を教えてくださいましたお兄さん。

よくミルクをくれたマスター！

自分の子供のように相手をしてくれたおじさん。

他にも知っている顔の人がいて、みんな石になってしまっている。

そして石像はみんなそのままの形を残している物ばかりではなかった。

さっきの嵐に巻き込まれて粉々になった人もいるし体の一部が無くなっている人もいる。

目の前には大好きだったスタンおじちゃんがバラバラになって山になっている。

手にはおじいちゃんだった石をのっけてそれが僕の心に穴をあけていく。

心は虚ろで穴だらけ。

思い出がたくさん詰まっていた家はもう灰になっていてまたひとつ穴があく。

僕の一世界（心）は虫食いだらけだ。

目の前が真っ暗になって何も考えられなくなる。

「オ？」

音が聞こえてくる。

何の音だかわからない。

瞼の裏でモノクロでノイズの入った今日が映し出される。

いつも通りの朝。いつもよりちょっとだけ体調が良くてハシヤク僕。天気も良くて約束していた探検ができることが嬉しかった。

おじいちゃんが苦笑いしていたのもいつもどおり。

そう、いつも通りに暮らしていただけ。僕らに悪いところは無かったはずなのに。

なんでこんな事になったんだろう。

どうしてこんなことになったのかわからない、

これからどうしたらいいのかわからない、

誰がこんなことしたのかわからない、

父さんが無視したのもなぜだかわからない、

わからない、わからない、わからない、わからない、わからない、
ワカラナイ、ワカラナイ、ワカラナイ、ワカラナイ、ワカラナイ、
ワカラナイ、ワカラナイ、ワカラナイ、ワカラナイ、ワカラナイ、
ワカラナイ、ワカラナイ、ワカラナイ、ワカラナイ、ワカラナイ、
ワカラナイ、ワカラナイ　わからない。
わからないことだらけだった。

顔に硬い物があたる。なにがあたったか分からないけどどうでもいい。

さつきより大きな音が聞こえるけどこれもどうでもいい。

聞こえるのはバチバチという燃える音だけ。

相変わらず真っ暗な視界に三日月が見える。

おおきなおおきなお月様。

月に向かって手を伸ばす。

いつもより幾分白く見える僕の腕。

その腕は幾ら天へ伸ばしてもふれる物はない。

それが悲しかった。なせだか目から涙があふれてくる。

月に触れることなんて無理に決まってる。子供でも知ってること。

だからもしも月が掴めたならば今日の夜はすべて夢だったのだからとそう思ったから手を伸ばしたのに。

力の抜けた腕は落ちて、それを見た僕は目をつぶる。月は掴めなかったけどこの夜はすべて夢だったのだと願って。

次に目が覚めたときおじいちゃんと一緒に寝ていて、家にはネカネお姉ちゃんが朝ご飯を作っていて、ネギと喧嘩をするそんな日常を願う。

心の底からあの日が続くことを願う。

そうして、僕は闇に溶けていった。

結局、願いは叶わなかったけど
生き残った人とは仲違いになってしまったけど、
家族が居なくなってしまうけど、
大切なモノを失ったけど。

代わりに新しい物を手に入れて、
新しい願いが出来て、
新しい家族が出来て、
大切なことを知って、
大切なモノが出来た。

そうして古い自分僕は新しい自分俺へと生まれ変わった。

プロローグ（後書き）

はじめまして、春秋です。

ここでいろんな物語を読んで書いて書きたいと思ったので書いてみました。

処女作なので出来は良いとは言えないです。

みなさんの暇つぶしになればいいなと思います。

2012・1・2 加筆修正

1話

イギリスの山奥にあるメルディアナ魔法学校。その廊下でカソックを着た青年と魔法使いが着るようなローブを着た老人が歩いていた。

「で、用事とは何ですか？」

青年　レオナルドはにこにこしながら聞く。老人はそれを見て苦笑した。

「せっかちじゃのう。もう少し落ち着いて話をしようとは思わんのか？」

老人はそう言い立ち止まる。レオナルドも立ち止まり呆れたように肩をすくめた。

「なにを言ってるんですか、あなたは校長なんですから今は忙しいのでは？　ゆっくりする暇もないんでしょう？」

それにお孫さんの事もあるでしょうに、と付け加える。校長は少し眉が動いただけでポーカーフェイスを崩さない。

「その通りじゃな。」

では、単刀直入に言わせてもらおうがネギと一緒に麻帆良に行ってくれんか？」

「断る」

即答だった。返答の早さに校長も開いた口が閉じれない。

「では、用事は済んだようなので俺は失礼します」

「ちよっ、まっ、待つんじゃ！」

レオナルドは引き止める声を無視して早その場を去っていく。

校長が見えなくなった頃、内側のポケットに入れていた携帯が鳴った。買ったときのままの着信音を止め電話にでる。

「もしもし」

『私だ、レオナルド』

良く見知った声だった。名前を言わないところは昔からだ。

「電話かけてくるなんて珍しいですね、どうしたんですか？」

『用事があつてな、聞いてくれるか？』

前もって選択肢を選ばしてくれるらしい。大概命令形の言葉しか聞かないんだが。

「いいですよ、用事ってなんですか？」

『麻帆良に行つてきてほしんだが』

「は？」

時間が止まった。正確には時間が止まったように思ったではあるが。止まった思考は彼の声で再起動する。

『なんだ、その反応は。』

目上の人に対する言葉じゃないぞ』

「あ、はい。すいませんでした。 じゃなくて！」

もう一度言ってもらえますか？」

レオナルドは聞き間違いであることを願って聞き直す。が……………

『どうしたんだ、お前らしくない。まあいい。麻帆良に行つてほしい、だ』

現実は無情である。彼は行ってほしい、と言っているが十中八九命令だろう。

「……………理由を聞いても？」

『理由か？』

何でも15年前に消息を絶つた真祖が麻帆良にいるらしい。それを確かめてきてほしいんだ。

お前ならすぐに終わるだろう?」

「それは別に俺じゃ無くてもいいのでは？」

他の組織の麻帆良侵攻に合わせて数人送り込めばいい話です。

実際に行くことになるのはまだ先の話ですし」

即興で考えたにしてはいい出来だった。今の情報だけならばこれで回避できる。むしろ回避させてほしい。誰だって厄介事は引き受けたくない。

『確かに、それ一つだけだったならばそれでもよかつたんだが……』

「ほかに何かあるんですか？」

やはり真祖のことだけではないらしい。願いは神には通じなかった。神の仔に仕えてるのになあ。

『黄昏の姫御子がいる、という噂がある』

「……信憑性は？」

『かなり確かだ。』

それにコノエコノカと同室になっている。

あの狸爺が自分の孫娘と同室にするんだ。怪しいと思わないか？

名前は神楽坂明日菜だそうだ』

麻帆良の狸爺に関してはよく聞く話だった。
腹黒いロリコンだって。信憑性はかなり高い話だ。
今いるウェールズにも届いてきてるしな。
その狸の身内と同居する奴が普通なわけはないだろう。
十分にそれだけでも怪しいのに、名前がアスナなんて隠す気がある
のか気になるところだ。

『それに確かお前弟が麻帆良に行くはずだろう？ 丁度いいじゃないか。
警戒はされるだろうが居ても強制的に排除される可能性は零に近くなる』

あれの情報は魔法使いの中でも上の奴しか知らないはずなんだがどうやって知ったんだろ？

『前におまえが話していた彼女も雇われているらしいぞ』

どうやら沈黙を渋っているように思ったらしく次の餌をつるしてきた。
彼女に会えるなら別にいいかも、と考えてしまう。
随分と疲れている証だ。休みたくなる。

「……………これは命令ですか？」

『ああ、命令だ』

「どうしても？」

『ああ、どうしても、だ』

はあ、と溜息を吐く。

「了解しました。その任務やらさせていただきます」

『そうか、では報告を楽しみにしている。詳しくは後でPCへ送っておこう。』

しっかり計画考えておけよ『

「よろしく願います。あ、あと始めに名前はちゃんと言ってください。間違えたらどうするんですか。関係のある情報は全部くださいよ。予想外の事なんてよくあることですから」

『確かにそうだな、考えておこう。情報に関してもこちらが持っている情報は全部送っとく。では、またな』

「ええ、それでは」

ピ、という電子音がしたあと電話が切れた。携帯をしまい先ほど断った話を受けるために来た道に戻る。道中初めの選択をした私を呪う。きつと断っていてもやらされただろうが、自分への言い訳にはなったと思う。一つ目の角を曲がったとき先ほどの話を受けられるか心配になり、校長のもとへ駆け足で向かっていった。

……でもやっぱり気が早いと思うんだけどね。

こうして青年は舞台上上がり物語は始まりを告げた。

2話

駅を降りて改札を通り過ぎる。

天気は快晴。雪があること以外はいい天気だ。

ラッシュの時間にははずれているせいか人影は少ない。はあ、と息を吐き出し歩き出す。吐く息は白かった。

流石に何時間も乗り物に乗っているのは疲れた。

荷物も重いし。寒い所為で体が動きにくいし。

ゆっくりしたいなあ、と呟く。今の俺の状態を知り合いが見たら目を疑うだろう。

だがここにいる知り合いなんて一人しかいないし、その知り合いも今は授業中だろう。

「えーと、あなたがレオナルド君ですか？」

いきなり声をかけられる。俺は声をかけられるまで気づかなかったことに驚き勢いよく振りかえった。振り向いた先には女性がいた。寒さ対策の為か、服をしつかり着込んでいる。

「どうも、案内役のシャークティと申します。……レオナルド君で合ってますよね？」

女性はどうやらシャークティと言らしい。

シャークティは俺から返事が無いことに不安になったようで再度本

人が確認してくる。

「はい、確かに私がレオナルドです。すみません、ちょっと目を離れた間に目の前に美しい女性が居たものですから」

顔をいつも通りに直しお世辞も混ぜて返事をする。昔、知り合いに女性と会ったらとりあえず誉めとけ、と言われたことを実践してみた。

「ふふ、美しいなんてありがとうございます。お世辞でも嬉しいです」

「いえいえ、本音ですよ。お世辞な訳がないじゃないですか」

シャークティはくすくすと笑い、俺ははははと笑う。

実にのどかだ。癒やしを感じる。

ここ数ヶ月で溜まった疲れが癒される。

「では、案内させてもらいますのでついてきてください」

シャークティはニコニコしたまま先行してくれる。俺もそれについて行く。道中にはここに来るまでとか、俺も同じ宗教を信じていることが分かって神の仔について話をしたりしながら道を歩いていく。街はほぼ全て西洋風にしてあって覚えやすかった。

話をしていると直に話のネタも無くなっていく。
俺は気になっていたりした事を聞くことにした。

「ねえ、シャークテイさん。

どうしてキリスト教徒になったんですか？」

なぜキリスト教を信じたか。

それは一番興味が沸く物だった。

魔法使いと教会は争っている。犬猿の仲といっても良い。

教会にとっては『奇跡』を起こすことが出来るのは聖人だけであり魔法使いは許される物ではなかった。

魔法使いにとっては少し関わっただけでも一般人でも殺す教会はゆるせなかった。

どちらも相手を認める事は出来なかったし、認めようともしていなかった。

魔法協会と教会よりも魔術協会と教会の方がまだ仲がよかったりする。

「……………そうですね。」

何でだったんでしょう？ もう忘れてしまいました」

「え？」

今までいろんな人に聞いてきたが一番意外な言葉だった。同じ事を言う人も居たけれどそんなに数いなかったし。

そんな俺を見てなのか、シャークテイはまた笑っていた。

それが気に入らなくて口をとがらせる。

「何か可笑しかったですか？」

「ええ、驚いた顔が可笑しくて。

でもさっきの言葉は本当ですよ。本当に忘れてしまったんです」

……嘘ではないようだ。そのくらい簡単にわかる。

「じゃあ、私も聞きますがなぜキリスト教を？」

いやなことを聞いてくる。恥ずかしくて話したくないんだが……

「どうしても話さなきゃいけませんか？」

「私にも聞いたじゃないですか」

わからない、って言ったただじゃないか。

「養父おやふに憧れたんですよ。

以前危ないところを救われまして、そのときの養父の姿が格好良かったんです。

養父のように、養父のように、って頑張ってたらくここまで来ました。

キリスト教に入ったのも養父が居たからなんですよ」

「へえ……素晴らしい父親なんですね」

「ええ、最高の父親です」

それからはなにも話さず学園長室へ向かう。
学校へ着く。

冬休みなのだろう。校舎は静かで寒かった。
ぼんやりしながら進んでいると思いついたことがあった。

「いきなりなんですけど、なんで学園長室は女子中等部に有るんです
ようか？」

ピクツ、とシャークティが反応する。

「もしかして学園長先生はロリコンなんでしょうか？」

「さ、さあ私には何とも。人が考えることなんて分かりませんので」

シャークティの移動が速くなる。

彼女も俺と同じように思っていたようだ。それに前に違うところに
学園長室を移動させる計画を学園長が即行で却下したらしいし。

「着きました。ここが学園長室です」

学園長室についたらしい。高そうな扉だ。実際に高いだろう。

「私はこれで失礼します」

シャークティは入らないらしい。さっきの話の後では入りにくいだろう。

また会いましょう、と言って別れる。去っていくときの速さ以上だった。

今回の話はとても楽しかった。

同じシスターでも毒舌シスターなんか比べものにならないくらいだった。むしろ比べたくない。

何というか、こう、母親的な感覚があった。

いや、母親居なかったからどんな感じか知らないけどね。

暖かい感じ。また会いたいな。

2話（後書き）

調子に乗ってもう一話投稿。

意外と人が読んでくれることにびっくりです。

うちではシャークティさんがちょっと性格が違っています。

そこらへんわかっていただけるとうれしいです。

他数人も性格が変わっている可能性があります。

3話（前書き）

作者は頭が悪いです。

ですので上手い話し合いは作れません。

ご注意ください。

3話

扉の方へ向き深呼吸する。

さっきまでの俺で居るとだめだと思う。

話によると学園長は人間離れしているらしい。上司の話では狸だ、
と言っていた。どんな存在なんだろうか。

比喩だっというのもわかってるけど。

腹黒いってどのくらいなんだろう。機関長並みでなければいい。
緊張しながらもノックしようとしたらノックする前に扉が開く。

「あ……………」
「ぶっ!」

「……………」

「……………」
「!」

運が悪かったとしか言いようがない。

扉を開けたのは三十代の筈なのに四十代半ばのおっさんにしか見え
ない高畑・T・タカミチだった。彼が扉を開けた所為で俺のノック
しようとした拳が彼の顔に当たってしまったのである。今彼は、顔
を押さえてひざを突いていた。

「……………」

「……………」
「あー、入らないかい？」

痛みが引いて余裕ができたようで頬がひきつりながらも笑顔で対応してくれる。実に痛々しい。

「じゃあ、失礼させてもらいます」

まだ痛いのか顔を押しさえている高畑を見ながら部屋へ入る。部屋に入ると可笑しな生物（？）がいた。高畑の方を見て問う。

「What is this?」

「This is Nurarihyon」

「ひょっ!」

英語の教師をやってるだけはあるすばらしい発音だった。いや、そんなこと話には一切関係ないけれども。返答に感謝しつつひざを突く。

「なんと言うことだ。日本では妖怪が人の上に立てるなんて!」

確かに人間離れしている。

だがこれは人間離れではなく人間とは種族の違う生き物だ。狸どころの話ではないぞ。

「儂はぬらりひょんじゃあないぞい！」

化物が何か言っているが気にしない。

肩に手がおかれる。振り向くと笑顔の高畑がいる。

その目は共感をふくんできた。

「……………大変ですね」

「ああ……………この頃胃に穴が空きそうだね……………休みたいんだけど……………
ね」

言葉から大変さが感じ取れた。

可哀想だ……………でも同情だけで手伝う気はさらさらない。

「本人の前でそれはどうなんじゃろうか。

終わりの近い爺をいたわろうとは思わんのか」

「あれ、まだ居たんですか。別にいなくてよかったのに」

「（泣）」

「気持ち悪いからやめてください。後頭部切り落としますよ」

「（号泣）」

俺と高畑先生のコンボが効いたらしい。
机に顔を伏せてマジ泣きしていた。

「……ホントにあれで大丈夫なんですか？ この学園」

「うーん、どうだろう。今のところは問題は見えてこないよ」

「ずいぶんこの学園はしっかり作ってあるんですね。驚きました」

「うん、僕もそう思うよ」

俺と高畑先生の爺いじめは続く。

「ウェールズまで聞こえてくるんですよ。狸爺のロリコンだって」

「確かに。反論はできないなあ」

「それによくこんな頭で人前に出れますよね」

「本国の一部の研究所ではこの人の遺伝子調べてるらしいよ」

「是非説明していただきたいですね」

「確かに頑張っしてほしいね」

「じゃあ、遊びはここまでにして本題に入りましょうか。いい加減飽きましたし」

「えっ、遊びだったのかい？」

「え？」

修正……高畑先生は本気だったようだ。

「……」

「……」

沈黙は続く。

「……」

「……」

「本題に入りましょうか」

「そうだね、それがいい！」

何事もなかったように本題に入ろうとする。だが、肝心の妖怪爺が泣いたままだった。

地味に心にきたらしい。
部屋の隅に体育座りしていた。
うっとうしい爺だ。

「学園長先生いい加減にしてください。組織の長なんでしょう。この程度で落ち込まないでください」

「儂なんて……儂なんて……」

「めんどくさいなあ。……オラアツ！」

「グフツ!？」

妖怪爺はぐったりしている。

流石に準英雄の拳は堪えたらしい。

実行した高畑先生はいい仕事をした、と言わんばかりの良い笑顔だった。

……いい加減暑くなってきた。

着ていたコートを脱ぐ。

「……はっ、儂はなにをしていたのじゃ」

意外と回復が早かった。

一応学園一の魔法使いと言ったところだろうか、回復力が凄い。
いや、妖怪だからだろうか、やはり妖怪は地力が違う。

「どうしたんだい？ 話をするんだらう？」

少々おかしいのかもしれない。考え事に集中しすぎだった。

……休まないとな。

「そうですね。この頃疲れているようで」

「大丈夫か？ 体には気をつけないといけないよ」

ありがとうございます、と返事をしてソファアへ座る。鞆とコートはソファアの横に置く。

……お、柔らかい。良い物使ってるな。

高畑先生は学園長の横へ。

「なぜじゃらうか。腹が痛いのが」

「気のせいですよ。ほっとけば治りますって」

爺に対しての高畑先生の対応が冷たい。気のせいではないはず。日頃から鬱憤が溜まってるとららう。

「では、仕切り直して。」

儂が麻帆良学園学園長近衛近右衛門じゃ。

よろしくのじ

「メルディアナ魔法学校卒業生レオナルド・アンデルセンです。よろしく願います」

「レオナルド・アンデルセン……?」

二人の顔が歪む。話に聞いていた名前と違っていたからだろう。それに俺の姓は魔法使いにとっては敵の名前だからな。

「失礼じゃがレオ・スプリングフィールド、ではないのかのう?」

「それは旧名ですよ。今では何の意味もないものです。今の俺はレオナルド・アンデルセンです」

ここで二人の顔に違いが出てくる。

高畑先生の顔はさらに歪み、学園長は納得といった顔になった。

「そうか、そうか。わかったぞい。」

では、レオナルド君。君の修業は教師をやることじゃったな。じゃがネギ君と来る予定と聞いていたんじゃないが」

……きつと、学園を探りにきたと思われたんだろう。任務もあるが正直真面目にやる気がない。

それに、早くきたのは他のもっともな理由がある。

「早く学園になれたいな、と思ったんですよ。あいつはまだ準備中ですよ。予定通りに行けばいいと思ってるのでしよう。」

教師なんて初めてやりますし人に物をおしえるんですから。自分はやることはしっかりやりたいので中途半端にやるなんて嫌ですから」

「ほう、真面目なんじゃな。良い判断じゃ」

理由がまともで学園長も困っているらしい。言葉も乱さなかったし、俺の性格も記されてるからだろう。嘘か真が分かりづらいと。

「で、俺の担当するのはどこなんでしょう？ こちらについてから教えられると言われたんでまだ知らないんですが」

「おう、君たちには教育実習生としてこの学校の2 - Aを頼もうと思ってる」

「この2年ですか……………」

女子中なのは微妙なところだが二年なのはいただけない。生徒を何だと思ってるのだろうか。受験生だぞ。たとえエレベーター式だとしても教育実習生に任せるなんて事普通ならばしない。

「ん？ どうしたのじゃ？」

「いえいえ、何でもありませんよ。」

ところで君たち、と言いましたが他の先生が補佐につくなどはないのですか？」

「他の先生は忙しくての。誰も補佐につけられないんじゃ。もともと2-Aはそこにいる高畑先生の担当での。じゃがその高畑先生は出張が多いのじゃ。じゃからちよつど来た君たちに2-Aは任せて高畑先生には他の仕事に集中してもらおうと思ったんじゃ」

何言ってるんだろう、この爺。

それは理由になってないだろ。

もっとちゃんとした理由付けしろよ。

普通は他の先生つけるだろ。本職の人間ではない奴らに一つクラス任せるなよ。

本当にこの学校大丈夫なんだろうか。心配だ。

「わかりました。で、役目の話なんですが。」

俺たちのどつちが担任で副担任なんですか？」

「それは担任をね」

「はあ?!」

本当に学校を何だと思ってるんだらうか。

お前らの箱庭じゃねえんだぞ！

……つと、ふざけた回答過ぎてキレてしまったな。気をつけよう。

「学園長先生、続けてください」

「……わ、わかったぞい。」

担任をネギく　じゃなくてレオナルド君。
副担任をネギ君にしてもらおうと思つとる」

「そうですね。それはよかった。」

さっきネギと聞こえましたが聞き間違えだったようです」

ちよつとばかり手に気を集めたら言い直した。

脅しには少なかつたと思うけどきつと自分でもおかしいと思つていたんだらう。

「あいつが来るまでは高畑先生はどうするんですか？」

「高畑先生はときどきはでてくるじゃろうが出張を頑張つてもらつことになつとる」

「そうですね、承知しました。修業を頑張らせていただきます」

「ふおふおふお……」

では、住むところ何じゃが……」

「ああ、それなら既に当てがありますので。」

気にしなくても大丈夫です」

「えっ？……それならいいんじゃないが」

爺が残念そうにしている。気持ち悪いだけだ。さっさとでたい。そして新居を見に行きたい。橙子さん設計だからセンスはいいからな。ハズレではないと思う。とここで言うべき事を思い出す。

「あの学園長先生」

「なんじゃ？」

「俺は警備には参加しませんので」

「「　　っ！」」

二人して驚いている。

どうせ何でそれを知っているのか、と言ったところだろう。

高畑先生からは殺気が漏れ出している。

俺が裏に属している事なんて分かりきったことだろうに。裏にいれば麻帆良の事だって耳に入ってくる。知っているのは当たり前のことなのだ。

むしろどうしてその程度思いつかなかったのだろう。

「どつという意味か聞いても？」

「詳しく言うと魔法教師ではなく一般人の教師と同じ事しかしません、ということですね」

「それは困るのう。うちは万年人不足なんじゃ。やってくれんかのう？」

何的外れなこと言ってるんだらう。
俺のやる気はどんどん下がっていく。

「なんでやらなきゃいけないんですか？」

「なっ！」

今度は驚いたのは高畑先生だけだった。

「立派な魔法使いを目指すのならば当たり前のことだ！ 人を助けマギステル・マギることが我々の本懐なのだから！」

徐々に眠くなってきた。何を熱くなっているんだらう。もうすでに話すのさえ億劫だ。

「もういいですか？」

俺早く新居見たいんでこれで失礼させてもらいます」

置いていた鞆二つとコートを持って扉の方へ歩き出す。

「最後をお願いしたいんじゃないか」

出て行く前に今まで黙っていた学園長が話しかけてくる。

「なんででしょうか？」

「せめて、2 - Aの子たちは守ってもらいたい」

確かに俺たちが関わるのだ、危険が伴うだろう。

2 - Aの生徒を俺たちへの餌にしたりとか。

「良いですよ。一般人の生徒は守りましょう。

ではこれで。」

そう言っただけで扉を閉める。

中にいた二人は予想以上にダメだった。

こんな事予測し得たことなのに。

話にも穴があつたし。

これなら学園に頼る事はやめといた方が良くかもしれない。

麻帆良についてはそれっきりにして家のことを考えることにした。

家を設計する際にしたお願いをしっかりと守ってある事を祈りながら家へ向かった。

僕は先ほどレオナルドが出て行った扉を見つめる。
隣ではタカミチ君が拳を握りしめていた。

「……………学園長先生。
なぜ最後にあんなことを？」

タカミチ君は問う。
なぜ生徒たちを守るようお願いしたのか、
あいつを信用するのか、と。

「いいんじゃないよ、あれで」

後悔する様子もなく答える。

「儂等はなめすぎておったのかもしれない。」

今まで集めてきた情報を聞いていても年相応以上の能力を持っていることは明白じゃった。

儂も脅しをかけてくるとは思わなんだ」

そう言っただけの量で担任の話の時を思い出さず。

あれだけの量を苦もなく集められるのなら聞こえていた武勇伝も嘘ではないかもしれない。

レオナルドの武勇伝は二人の耳にも届いていた。

テロリスト百名を殺さず倒し、それを自身は無傷でこなした。

立てこもった凶悪犯を説得した。

森で暴れていた竜種をたおした。

召喚された爵位持ち悪魔を倒した。

など嘘としか思えない物ばかりだった。

儂等はそれらを嘘と決めつけていたのだ。

「予定よりも外れすぎていて穴ができていた事もわかっていたようじゃし。」

流石は『アンデルセン』と言ったところじゃな。名乗るだけはある」

ふおっふおっふおっ、と笑う。

だが笑っていられるほど余裕はなく心の中では計画の修正案を考えていた。

元老院からの情報より実物はできる人間だった。

戦だけではなく政もできるタイプ。

理性で自分を律することができる人間。

もっとも厄介なタイプだ。

計画で一番の障害になるかも知れない。

「……もしかしたら殺すことも考えんといかんのか……
タカミチ君そのときはやってくれるか」

「！ ええ、そのときが来れば」

唇を噛みしめていたタカミチ君が顔を上げる。

その顔に悔しさはなく決意と覚悟があった。

それを見て机から紙を取り出す。

「では、修正案を考えることにしようかの。

……頭が痛いわい。こんな老人にやらせることではあるまい」

「はははっ、頑張ってください」

そうして真っさらな紙に文字を書き始めた。

3話（後書き）

か……感想が欲しい。

感想や評価は作者のエネルギーとなります。

書いていただけたら嬉しいです。

むしろ積極的にお願いします。

感想、書き方に関してなどの注意をお待ちしております。

4話

俺が新しく住むことになる屋敷は悪いところはなかった。

敷地内に落とし穴があったり、

突然壁から槍が突き出てきたり、

天井から大量の剣が落ちてきたり、

屋敷の下に地下帝国が有るなんて事もなかった。

何かしら有るんじゃないか、とびくびく過ごす必要がなくなったおかげで漸く休息がとれそうだ。

……百以上罾があった。ふざけすぎだと思う。でもこれだけ探したのだ、もう無いだろう。

だが設計の時子供連れた切嗣もいたし……

子供の要望も叶えたりしてるかも……。

やめとこう。

もっと不安になるような事を思い出さないように思考を停止させる。

もう無いと信じたい。

屋敷の『表』の安全が確認できたところで持ってきた大きな方の鞆を持ち地下へ向かう。

屋敷の端にある隠し扉が入り口になっている。

扉を開けると人が数人入れるような空間があった。

床の埃を足で端へ集める。埃がなくなったことで見えた魔法陣に血を垂らす。

血は即座に吸収され血に含まれている魔力を動力に魔法陣は動き出す。

うつすら光り出した陣の上に立つ。

陣を踏んだ瞬間、真っ暗に変わる。

いつも通りに右手の壁にあるスイッチをいれた。

カチツと言う音と共に空間が光で満たされる。

明かりに慣れて目を開くと目の前には人形が立っていた。

……目に光がなくて地味に怖い。
しかも人間に近づけてあるせいで死体が立ってるみたいになっ
てるし。

「……相変わらず趣味が悪い」

人形にはメイド服が着せてあってその胸あたりに紙が張ってあった。

『これはお前にやる。』

今できているなかで一番の出来だ。

見本にでも、何にでも使うといい。

お礼は十億で勘弁してやろう。』

お礼が十億ってぼったくりだろ。

あの守銭奴め、知り合いの傭兵ですら知り合い価格で割り引いてく
れるのに。

これなら自分でやった方がマシだった。

はぁ、と溜め息をつく。

今日はため息つきすぎな気もする。

人生で一番多い日だろうな、なんてくだらない想像もしてみても
うほど今日は疲れている。

張ってあった紙を細かく破いて燃やす。

空間の中央まで歩いていく。

いろいろな機材があるがそれだけは毛色が違った。

乳白色の床や壁と違ってすべてがガラスで作ってあるのだ。

六角形の柱が床から突き出ている形になっている。

柱の窪みにあらかじめ受け取っていたダイヤモンドをはめ込む。

そしてこれにも血を付ける。

唸りをあげて柱が起動し始めた。
ダイヤモンドに籠められた魔力で敷地と外を区切る結果が出来上がる。

後は勝手にエネルギーを地脈から吸い取って起動し続ける。
問題が無いかしっかり確認する。

工房作ったときに持っていた全てのものを費やして作り上げた自信作なのだ。

壊れたりしたら引きこもる自信がある。

転移の影響は馬鹿に出来ないし、地脈に合っているかとか問題が起こる理由はたくさんある。

問題無いことを見届けた後鞆を開けて中から人形を取り出す。

失敗作ではあるが完成品なので使っている。

問題点は機械と同じで命令通りにしか出来ないところだろう。命令出来る事も少ないし。

まあ、まだ複数のことが出来るだけいい方だ。

一つのことしかできないものもあるし。

人形達を仕事に就かせ外へ出る準備をする。

出る前に陣の近くに置いてある机の引き出しから自作の煙草を数本取り出す。

一本残して残りはスーツの内ポケットに入れて外に出る。

残していた一本に火をつけ紫煙漂わせる。

ここで注意だがこの煙草にはニコチンなど有害物質は一切含まれておりません。

育てている薬草や自作の薬を使い作った煙草です。身体への影響はほとんどありません。

未成年者でも安心してお使いいただけます。

「……………って誰に言ってるんだろ……………ぼけたかな？」

そう言って空を見上げる。
見上げた空は曇り空で雪が降っていた。

時間は飛びまして夕方。

スーパーからの帰り道。

警察に注意されかねない煙草はやめ、片手に食材の入った袋を持っている。

スーツの上にコートを着て道を歩く。

俺以外の人は早足で歩いていく。俺にはどうという事無いが寒いらしい。

地面には雪が少し積もっていて走れば滑りそうだ。

寒くも辛くもないが腹だけは空いていて何か食べたかった。

けれどたい焼きとか買ってないから食うものなくて、食うとしたら食材になるけれど野菜とか生で食う物はなかった。

こんな事なら店でたい焼きも買っとけば良かった。

そんなくだらない理由だけど機嫌は悪かった。

「楽しい事しようぜ」

「結構です。離してください」

「よきち、断られてやんの、カツコ悪！」

「うつせえよ！」

クスクスと気持ち悪い声が聞こえる。

いつもなら見逃すのだが、今の俺は機嫌が悪かった。

……運が悪かったな、男ども。

「だから、少しだけだつ　へぶうう！」

「よきち!?!」

女の子に声かけていた男が吹っ飛ぶ。

ぶっ飛んだ男はそのまま壁に埋まった。

男と女の子はなにが起こったのか理解できないようだ。

「中学生ナンパなんかしてんじゃねえよ。ぶっ飛ばすぞ」

この際既にぶっ飛ばしてるとか理不尽とかそんな話は無しにしておく方向で。

実際ナンパはされていたから行動に矛盾は無いし。

「てめえ！　よくもよき　あがつ！」

ぶちゅっ、と音がした後殴りかかろうとしていた男が倒れる。

手は股間に置いていて白目を剥いていた。

男の大事な物を潰されて気絶したようだ。

男どもを一瞥してまた歩き出す。

張り合いのない。もう少し頑張つて欲しいものだ。

今日は寒いだろうけどきつと大丈夫だろう。

死にはしない……………死ななかつたらいいな。

片方男としては死んでるけど。

「えっ、ちよっ、ちよっと待ってください！」

慌てたような声を聞いて振り返る。

女の子は結構な長身でポニーテールだった。

「ありがとうございます！」

女の子は勢い良く頭を下げる。

それに俺は手を振っただけでそのまま帰って行った。

余談だが

その後女の子は男たちの扱いに困り

電話した同級生の言葉に従って男たちを置いて逃げた。

すでに通報された後だったので警察はすぐに来て男たちを連れて行った。

その時点では関係者が居ないこと以外問題はなかったが男たちについて調べてみると強盗犯であることが判明。

見事男たちは御用になりました。

めでたし、めでたし。

4話（後書き）

今回は住居と工房の説明。ちょっとしたフラグたてになりました。

ここでお願いがあります。

今のところ作者が考えているヒロインは

神楽坂明日菜、龍宮真名、近衛木乃香、桜咲刹那、絡繰茶々丸、大河内アキラ、となっています。

このうち絡繰茶々丸、大河内アキラのアーティファクトを考えて欲しいです。

どうかお願いします。

待ってまーす。

5話(前書き)

すみません。遅れたくせに量は少ないです。

5話

どうも、レオナルドです。
俺はいま学校に来ています。
えっ？ 前回までとテンションが違う？
気にすんな。作者のノリで書かれてんだから。
今はとっても気分が良いそうだ。

閑話休題

俺は三学期から教えることになる学校の下見に来ております。
たしか2-Aだったかな？
昨日家に送られてきたクラス名簿を見て思った事があるんだよね。
学園長なにがやりたいの？ってとこかな。
1940年からいるってそれって幽霊じゃん。
クラスの中に何人も魔法関係者がいるのはわざとしか思えないし。
なんで魔族いるの？ 騒動は起こさないだろうけど。
学年の癖のある奴らを集めた感じだよね。
もしくは英雄の息子のために集めたのかな。
本当に学園長あれふざけてるよね。

……ふう。言いたいこと言ったら落ち着いた。
気をつけないとな。俺もまだまだだ。
落ち着いたところで職員室へ向かう。
学期が始まってからでは遅いからな。何事も早めにやるべきだ。
職員室はかなり広かった。
学校に来ている先生もいて挨拶してくれる。
一般人のようで魔法先生はいなかった。
机はまだ置かれてないようで今日は職員室の場所を覚えるだけで終

わる。

次に2 - Aの教室へ。

野菜ネギがこの学校に来ることを考えて結界を張らなければならない。内容は魔力吸収。これに魔力が集中したとき、と条件を付ける。

これならば魔法サギタ・マジカの射手とかランクの低い魔法は発動できないはず。障壁とかは流石に消せないけれど戦場でもないのに発動してる馬鹿はいないだろう。

このために学園長爺のいない間に来たんだ。

考えてる間に2 - Aに着いた。扉を開ける。

誰も居ないはずの教室に誰か居てその人はペン回しをしていた。

「は？」

「えっ？」

俺の声に反応してこちらを向く。ペン回しは止めない。

居たのは少女で制服っぽいものを着ていた。

……ペン回しうまいな。なかなかのものだ。

「……………」

「……………」

どちらも動かない。

この間に観察しておく。

少女は可愛い顔をしていて見覚えがあった。

……あつ、クラス名簿だ。一番がこんな顔をしていた気がする。観察を続けると重要なことに気がついた。足がない。少女の膝あたりから下がなかった。幽霊なんだろう。70超えた女性がこんなに若い容貌だったらおかしい。とりあえず話しかけることにする。

「……えつと、相坂さん？」

ビクッ、と過剰な反応を示した。回していたペンが落ちる。

「み…私が見えるんですか？」

「ええ、見えますけど」

少し間が空けて相坂さんの目から涙がこぼれ出す。それから相坂さんを落ち着かせようとしたりしていた。なんでも自分が見える人が居て嬉しかったらしい。自己紹介をした後二人で席に座って話している。

「へえ。60年間ここにいるんですか」

「はい。でも誰も気づいてくれなくて……うう」

「ああ、もう泣かないでくださいよ。」

俺が居るでしょう」

「だっていままで誰も気づいてくれなかったんですよ。霊能力者とかお払い師も来たけど気づかなかったですもん」

「それはプロじゃなかったから気づかなかったんですよ」

「そうなんですか？」

「そうですよ」

「そう、ですか。……ですよ。私だって気づいてもらえますよね」

相坂さんはすごい燃えていた。

自信がついたのだろうか。勢いがある。

というか六十年間よく悪霊にならなかったな。普通ならなるものなんだが。

……今日のうちに結界はれるかな。

もうすでに一時間とちよつと時間がかかっている。もう14時だ。

まだ時間はあるけど早めに張っておきたい。

爺が戻ってくるかもしれない。

少し焦る。どうやって話を止めようか。

………良いこと思いついた。

都合のいいときに閃く頭だと思つ。

「ねえ、相坂さん」

「？ なんですか？」

「自分の体欲しくありませんか？」

「え？ えええええ！？」

「欲しくないんですか？」

「も、貰えるんですか？」

「ええ」

俺は笑顔で答えた。

相坂さんも笑顔になっていく。

俺が結界を使うときはよく使う種類の結界は符で作ってある。

今回のようなあまり使わない種類の結界はまず魔法陣を書くことから始まる。

常備している墨で天井に描き始める。

描き終えたら陣に魔力を流し起動させる。

魔法式でやったらバレるのでこれは魔術式である。

効果を試すことは出来ないが問題はなさそうなので、認識阻害の札を貼って魔法陣を隠す。

簡単だがこれは学園長に解除されないようにダミーの術式を混ぜてあるのでよっぽど魔術をわかってないと解除は出来ない。

……手段を問わないなら天井ごと取ってしまえば良いだけの話だけでも。

魔法使いは魔術師のこと馬鹿にしてるしな。

力を持っているのに人助けに使わず自分のためにのみ使う引きこもりだってさ。笑ってしまふ。

話がそれたな。魔法使いは魔術師を馬鹿にしてるから魔術を習わない。だから魔術を使われると大概の奴らは気づけない。

最後に移動させた机を元の場所に戻す。

「よし。これで終わり、と。じゃあ行きましようか」

「はい！」

相坂さんの返事はとても元気が良かった。

うん、笑顔もかわいい。

5話（後書き）

前回応募していたヒロインに関してですが
少し考えてみたところ入れようとするとネギのパーティーが
少なくなりすぎるので取り消しました。
安易に応募してしまい申し訳ないです。
瑠璃さんは応募していただきありがとうございました。

あと作者は学校が始まったので遅い執筆速度がさらに遅くなります。
いろんな人に読んでいただき嬉しい限りです。
途中で逃げるような事はせず完結目指して頑張ろうと思っています。
これからもよろしくお願いします。

6話（前書き）

頭が働かない。

遅くなった上短くてすいません。

6話

「すごいですねえ」

俺は相坂さんといっしょに工房へ来ていた。

先ほど話したことを実現するためである。

トンネルを抜けると……のような反応と同じだと思う。

入ってからずつと俺の失敗作やら機械とかを見て凄い、凄いと言っ
てくれている。

美少女に喜んでもらえるのは嬉しいことだ。

関係者以外で入れた女性は相坂さんが初めてだったりする。

でもこのままでは話が進まない。

「相坂さん。こっちですよ」

あっちに行ったりこっちに行ったりしている相坂さんの手を引っ張
る。

え、幽霊なのに触れるのか、だって？

……そう。俺も驚いたのだが触れた。

人間としての感触もあったからほんとに驚いた。肌は冷たかったけ
ど。

「あっ……………」

残念そうな声を上げるが聞こえなかった振りをする。だっていつまで経っても同じ事してそうだし。

「また後で見れますから我慢してください。初めにちょっと調べなきやいけないことがあるんですよ。それにもっとすごい物もありますから」

「えっ！ 本当ですか！」

「本当ですよ」

俺からするとここにある物はそこまで目立つ物はないと思う。

出来上がった銃剣とかをしまつところだしな。

相坂さんを連れて奥の方へ歩いていく。

魔法を使って空間を広げてるから端から端まで行くのにも一苦労だ。

いつも瞬動で移動するからか、距離は分からない。

転移符を使ってもいいが勿体無い。

結局瞬動を使っただけど何事もなく目的の物の前へ着く。

「えっとー、これは何ですか？」

「地味だけど凄い物体です」

目的の物とはダイオラマ魔法球だった。

魔法球という名前だが目の前の物はガラスの箱である。

それが数個繋がっている形になっている。
正方形になっているのは彼と師匠である女性の趣味である。

「ちゃんと手を握っててくださいね」

「あ、はい」

手をしっかりと握り魔法球に触れる。

二人の足下に魔法陣が浮かび二人は転移した。

「わあ、凄い！　すごいです！」

相坂さんはかなり喜んでいました。

具体的に言つと子供のように目をキラキラさせ凄い、としか言わないほど喜んでいました。

予想以上に喜ばれて苦笑してしまいました。

バチカンの孤児院にいた頃のようにだ。

つまり、子供を相手にしている感じ。

相坂さんを横目に見ながら進んでいく。

「相坂さん！ 着いてきてくださいね。
着いてこないと迷うかもしれせんから」

「はいっ！」

本当に礼儀正しい子供のようだ。

着いてきているのを確認して倉庫へ向かう。

倉庫は地下にあり主に人形系の作品が入っている。

この屋敷の管理を任せている人形とすれ違う。

魔法球の中は初期の作品ばかりなので同じような顔ばかりだ。もっ
たいなかったので使っている。

倉庫の入り口の前の階段で立ち止まる。

「ここですね」

「この下にいくんですか……？」

「はい」

一人で階段を降りていく。

相坂さんがすぐく嫌がったので一人で降りることになった。

……幽霊なのに幽霊が怖いのだろうか。

やっぱりしっかり意識があるからか？

倉庫から素体と小さな人形を取り出して上へ上がる。

「？ なんですかそれ？」

手に持った人形が気になつたらしい。
理由は顔がなかったりするからだろう。

「これは相坂さんの仮の体ですね。
使えるはずですから入ってみてください」

「え？ 入るってどういう事ですか？」

「わかりやすく言うと『憑依』してください」

「憑依……ですか。やったことないんですけど」

「そこらへんは気合いで何とかしてください。きっと出来ると思います」

「気合いですか」

うん、と悩みながらいろいろ試している。
このうちに術式を書き込むことにする。

「あつ、出来た」

……早いな。適当に言っただけなのに。
きっと素質があるんだろう。

今日は驚きの連続でした。

いつも通りにしていたら私のことを見える人が来た事。

その人が体をあげると言った事。

糸もないのに動いている人形。

人のようにしか見えなかったけどレオナルドさんは人形って言うていた。

種も仕掛けも有るらしい。

広い部屋みたいなのところに居たはずなのに一瞬で大きな湖の見えるところに来た事。

なんでも魔法らしい。時々学園で大きな杖を持って歩いていた人が使っていたものかな。

最後に私が入ることの出来た人形の事。

本当に今日は驚くばかりでした。

レオナルドさんは遊んでいてくれて言うていたから遊ぶことにしました。

感触も有るから楽しいです。

でもこの体は仮の物らしいです。

私を使うことになる体はもっといろんな事が出来るそうです。早く体が欲しいなあ。

6話（後書き）

質問ですが、俺は毎回二千文字程度で出してるんですけど短いですかね？

このままで良いでしょうか？

アーティファクトの募集はまだしています。
感想もください。作者が喜びます。

7話（前書き）

ここでの魔術、魔法は作者の考えたものです。
当てにはなりません。

7話

素体に術式を書き込んでいく。

この作業が一番辛い。

今まで書き込んできた術式と書き込む術式が干渉しないように考えながら進めていく。

この素体は相坂さんの入れ物のため入れる必要はないが、他の人形を造るときは人形の行動についての術式も入れる必要があるためさらに難易度は上がる。

そう考えると今やっている物は簡単なものだと思うから人間の思考回路はおかしいと思う。

まあ、今やっている根幹となる部分はいつもやる作業だからすららいけちゃうんだけど。

それに、この頃数体つくったからな。でもやっぱり辛いのは変わらない。

「……よし、出来た」

後は試運転だがこれは相坂さんがいないと始まらない。

かかった時間は大体四時間。

前にやったときよりも短くなっている。

こういう作業の時はダイオラマ魔法球はとても便利だ。

「相坂さん。出来ましたよー」

「本当ですかっ！ やったー！」

70cm程度の高さの相坂さんが歩いてくる。
ちよこちよこ歩く姿は微笑ましい。

顔とか簡略化されている事が微笑ましさを増幅させる。
衝動に任せてしまわないように手の甲を抓る。

「ははは、まだ完成した訳じゃないですから。
後は試運転して問題がなければ微調整して完成です」

「わかりました！ 私、頑張りますっ！」

「はい、頑張ってください。
では、その人形から出てきてもらえます？」

「はい……よっと……えっと……えい！ 出れました！」

何事もなく出れたようだ。

憑依出来たけど出れませんでした。

って言うのが一番予想できたんだが無事出れてよかった。

……えい！って無理矢理出た訳じゃないよな。

「じゃあ、今度はこっちに入ってください」

「……コレに入るんですか？」

「はい」

素体を差し出す。

相坂さんは少しためらった。

今はまだ凹凸も少ないからコレでいいのか心配になるのもわかるけどね。

「……わかりました。……とう！」

相坂さんが人形で飛び込んだ。

結果。

無事に動かせました。

入ったり出たりも問題ないようです。

「わぁ、すごいですね！ レオナルドさん！」

感動してくれたようだ。

そりゃ、のっぺらぼうが人の形に変形したら驚くかもしれない。俺は相坂さんの純粹さに驚く。

今は動きが悪かった膝と指の微調整をしている。

あとは髪を黒に変換するようになりたり。

黒の方が大和撫子っぽいよね。外人の偏見だけどさ。

「よしっ。これで完成です。入ってもいいですよ」

「ありがとうございます！」

すっ、と中に染み込む感じで入っていく。

初めは飛び込んだからかなりの進歩だと思う。

いらぬ話だけど憑依って着ぐるみ着る感じらしいよ。さっき話を聞いた。

「わーい。楽しいですー。嬉しいですよー」

はしゃいで腕回したり走り回ったりしている。

「にゃっ！」

あっ、転んだ。

「はしゃがないでくださいねー。
壊れないでしょうけど壊れたら大変ですから」

「はい！」

…… 本当に子供じゃないかと思ってしまっ

これで70幾らのばあさんなんだぜ。

あり得ないけど。若すぎるけど。勿論精神的、肉体的にね。
ふう、と息を吐き出す。

懐から煙草を取り出して火をつける。

息を吸うと紫煙が肺を満たした。

前に注意したように健康には問題ないからな。

ただ肺が黒くなっていくのはどうにもならなかった。煙草の形では
灰ばかりはどうにもならない。

俺のような人間そっくりの人形作れる人限定で肺を作った肺に取り
換えるという方法もある。荒技だけだな。

俺は一週間に一度取り替えてるぜ。

こんな時にも使える便利な技能だと思う。

義手も作れるし。式さんは橙子さん製よりも俺の作った物を愛用し
てくれている。

コンセプトが丈夫で、でも出来る限り人間に近い物だったしな。

あの時は橙子さんは機嫌が悪くなって修行が大変だった。

おっと話がずれた。

閑話休題。

相坂さんはまだ走り回っているが、見る限り問題はなさそうだ。

後は幽霊時代の感覚を抜く必要があるだろう。
足の動きが遅すぎる。幽霊は足無いしな。
今後の予定を組み立てながら立ち上がった。

7話（後書き）

本日2話目。

感想が欲しい。

8話(前書き)

シャークティと美空がらしくない

8話

レオナルドです。

今日は教会にきています。

昨日は来れませんでしたから。

一応キリスト教徒なので来ないとね。

「おはようございます。レオナルド君」

「シャークテイさんじゃないですか。

おはようございます。シャークテイさんも祈祷に？」

「ええ。それに明日はミサがあるのでその準備に」

この教会でもミサはやるらしい。

魔法使いの本拠地でよくやる物だと思う。

その前に信者はいるのか？

「いますよ。60人程度ですね。ミサにはよく来てくれますよ」

「そうなんですか？ ここにもいるんですね。

って、あれ？」

俺言葉に出したか？

「いえ、言葉には出してなかったですよ」

「ただ。魔法を受けてないと思うんだけど。」

「なにがおきたんだ。読心術対策はしてあるんだけど。」

「ふふふ。女性には秘密がたくさんあるんです」

「そうなのか。聞いてみたいけど聞いたらいけない気がする。」

「とりあえず場所使わせてもらっても良いですか？」

「「ゆっくりどうぞ。寒いですから体には気をつけてください」

「そういつて奥に入っていく。」

「邪魔になるなら家でも良いかなと思ったけど、」

「良いなら使わせてもらおう。」

「磔にされたキリストの前に膝を突きを祈祷を始める。」

十数年間ずっとやり続けてきた行動なので体に染み着いていた。ここ数日祈ってなかったからな。立ち上がり服装の乱れを直す。祈祷の間ずっと緩めていた意識を元に戻す。そこで後ろで椅子に座っていたシャークティさんたちを見つける。

「素晴らしい集中力ですね。話の通りでした」

「どんな話だったんですか？」

「最も純粹に祈りを捧げる信者、と聞いています」

「それは嬉しい噂です。でも噂ですから。嘘ばかりです」

「そうですね？ 私には噂通りだと思いましたが。ねえ美空。そう思いませんか？」

「え、ええ。そうだと思いますけど」「…すごかった」

「だそうですね」

「ははっ。まあいいんですけどね」

シャークティさんはニコニコしたままだった。その噂なら親父の方が相応しいと思うけどな。世界中探してもあれほどまでに神に仕えている人はいないだろう。長引いても面白くない話なので誤魔化しに入る。

「ところでその二人は？」

「うちの教会で修道女見習いをしている子たちです。美空、挨拶を」

「春日美空です」「…ココネ」

「レオナルド・アンデルセンです。これからもたびたび来ると思うのでよろしくお願いします。」

特に春日さんはよく会うことになるでしょうから」

「え……なんでですか」

「それは私が新学期からあなたのクラスを担当するからですよ」

「え”……マジですか？」

「ええ、マジです」

「良かったですね、美空。良い担任が就いて」

なにがショックだったのか、春日さんは orz の格好をしていました。

そんなに嫌なのか。まあいいんだが。

「シャークテイさん、いやシスターシャークテイ。私はこれで失礼させてもらいます。では」

「はい。また会いましょう」

挨拶をして教会から出る。

まだ冬の空気は冷たくて頬が痛かった。

「シスターシャークテイ。さっきのって……」

「ええ、あなたの想像通りだと思いますよ」

「……『断罪者』」

「すげー。『天使』^{Angel}が担任とか、すげー」

美空は相棒であるココネの言葉も聞こえてないようですげー、とばかり呟く。目は暗かった。

「有り得ないとか言いようがないっすね。学園は分かかって許可したんす？」

「そのようですよ。この前魔法先生を集めて彼が来ることを言っていましたから。……まあ学園長も学園長ですが魔法先生たちも同じようなものですね彼の噂を全否定してましたから」

「うわっ、そりゃないっすね。シスターシャークティはどうするんですか？」

おそらく噂は本当のことなのだ、と教えるか、否か。と言ったところでしょっね。

「なにもしませんよ。どうせ信じません。それに法皇さまからも黙っていてくれ、とわざわざ手紙が届きましたし」

「えっ！ それも驚くっすね。あとで見せて欲しいっす」

「いいですよ。それにいざとなれば教会へ寄ればいいのですから」

「……どちらのキョウカイからも文句言われませんか？ 呪われたくないっす」

「呪われたらいい神社教えますからそこへ行きなさい。ここには本当の友達は少ないですから別に気にしません」

「そんなんだから偉くなれないのでは？」

「それは望むところです。13課のマクスウェル副機関長を見てみなさい。中途半端に偉くなったものだから執務室から出てこれなくなっただけですよ」

それは嫌っすね、と美空は乾いた笑いをする。

…かわいそう、とココネも続く。

ココネは優しい子ですね。

頭をなでておく。するとぼんやりとした目でこちらを見つめてくる。

……可愛い。持ち帰りたいぐらい。

気持ちが和む。だけど今日は和んではいけない。

「さて、ミサの準備をしますよ美空、ココネ。しっかり働いてもらいますからね」

えー、と美空が嫌そうに返事をした。

……いらっ、ときたので叩いておく。

頭を抱えて泣いている美空を引きずって礼拝堂の奥へ歩いていった。

8話（後書き）

今日は教会内のお話です。

あんまり面白くなかったかも知れません。

作者はセリフか地の文のどちらかにしか集中できない人間だったり。

感想お待ちしております。

9話(前書き)

ときどきおかしいところがあるかもしれません。
おかしいところを見つけたら感想に書いてほしいです。

9話

教会から家までの帰り道。

途中で買った缶コーヒーを飲みながら歩いていた。

缶コーヒーも時々飲むには良いよね。

後は急いでいる時とか。

ちびちび飲んでいると無くなってしまった。

満足そうにしながらゴミ箱を探す。

ゴミ箱は近くの公園の中にあつた。

距離は22、3メートル。短いけれどまあいいだろう。

空き缶を持った右腕を振りかぶり狙いを定めて……投げる！

空き缶は一直線にゴミ箱にはいった。

……なにやってんだらう。

少し冷静な俺がいたが気にしない。

遊んだところでまた帰り始める。

飲む物もなく、暇をつぶせる物がなくなった。

暇をつぶそうと先ほどの教会を思い出す。

「あの教会結構良い空気だったな。

さすがにバチカンにある教会と比べるとは馬鹿のやることだけど」

おそらく神父の人がまだ居るのだろう。

奥で寝ていたか、作業をしていたか。もしくは眠らされていたか。どれでも良いけどね。いなくては良かったのは事実だし。

神父に会うと何故か毎回声をかけられる。正直言つて面倒くさい。でも笑顔で話して帰る。関係を悪くしたくないからね。

おそらくあの教会の頂点にいるのはシスターシャークティだろう。

本人は否定するだろうけどね。

「まあ、そんな事はどうでもいいかな。関わりはほとんどないし」

口に出して言う。すると少ししてから今まで見られていた気配があったのが消えた。

学園長め。こんなガキに大人げない事するなよ。

魔法で見張るとか、どうせ家の中が見えなかったから外出たとき狙ったんだろうけど。

魔法程度で俺の結界を抜けるものか。

特にあれは技術の塊だしな。たとえどんな熟練の魔法使いがやろうと結界を抜くことも壊すことも出来ないだろう。

そういう風につつたんだから。さすがにミス・ブルーとか宝石翁など『魔法使い』にはきかないかも知れない。

宝石翁は抜く方向で。壊せるだろうけど。

ミス・ブルーは壊す方向で。あれ相手に壊されないだけの結界作るなら魔法使いにでもならないと無理。

と、そんなことを考えているうちに家に着いた。

そのまま魔法球まで入る。

たしか出る前に相坂さんには動き回つとくよう言つたけどどうなってるかな。

「ひゃふ〜、たのしーです〜」

とっても楽しんでいました。

別の魔法球にいたはずのユニコーンに乗って走り回ってました。
……あの駄馬俺は乗せなかつたくせに。良い度胸してんじゃねえか。
まあいらぬからいいんだけど。

「あつ、レオナルドさん。帰って来たんですか。見てください！
私馬に乗れてるんですよ！」

「そうですね。そんなに気に入ったんならあげましょうか？ 俺は
乗せなかつたんでいらぬんですよ」

「いいんですか！？ ありがとうございます！ 大事にします」

「それはよかつた。だけどこの魔法球の中だけにしてくださいね。
外に出したら捕獲されますよ」

「えっ、そんなんですか？」

「いや、こんな角の生えた馬なんて見たことがないでしょう？ 角
が無くて外見が良いですから捕まえられて好事家に売られますよ。
もしくは研究所ですね」

「そ、そうだったんだ」

知らなかったのかよ。間違いなく少し常識がずれてる。

「なので遊ぶならこの中で遊んでください。良いですか？」

「はい……」

残念そうだ。まあどうしようもないけど。

でも、幻想種はまとめて入れてあつたはずだからそう簡単に入ろうとは思えないんだけどなあ。

たしか生きてでれる確率が17%なんだよね。よく生きて出てこれたよな。

……聞いてみるか。

「相坂さん。その馬がいた所って危ない生き物がいたはず何ですけど大丈夫でした？」

「はい、大丈夫でしたよ。黒い大きなトカゲさんが運んでくれました」

「え？ もう一回言ってもらえます？」

「黒くて大きなトカゲさんが運んでくれたんで大丈夫でした」

ドラゴンエ……。

なんでそんな簡単に懐いちゃってるの？

幻想種でも上位の生き物がそんな懐いちゃったらダメでしょう。それなら簡単について来るわ。

黒いドラゴンなんて一匹しかない。

この頃生態系の頂点に立った突然変異種。

俺ですらギリギリ勝てる相手だし。

「それは良かったですね」

「はい！」

うん、元気があるのは良いことだ。でも行動が凄すぎるよね。僕もう疲れちゃったよ。パトラッシュはどこだ？

「僕は少し疲れたので寝させてもらいますね。この中で好きにじといてください」

「はい。よし行きますよー。Go！」

相坂さんは猛スピードで駆けていった。

……さて、寢室行くか。

数時間ほど眠り魔法球を出す。
相坂さんはさらに周りの動物を増やしていた。
どうでもいいかな。諦めよう。
たとえペガサスがいたとしても。
狼とウサギと一緒に寝ていたとしても。
黒龍が周りを囲んでいても。
気にしない。というかあいつら俺より懐いてるし。

「なんか、朝無くしたストレスが今まで以上にたまってる気がする」
独り言を呟くくらい疲れていても大丈夫だ……と思いたい。いや、
思わせて。

……性格が崩れてきてるなあ。
今俺はストレス解消のため朝、空き缶を捨てた公園で煙草を吸って
いた。この際寒いのは我慢できる。というか感じない。
……とりあえずストレスは少しずつ無くなっている気がする。
……この頃『…』と『気がする』を使いすぎてる『気がする』。ま
た使ってしまった。気にしないけど。
そんなくだらない事考えていると子供に囲まれた女の子？を見つけ
た。
買い物袋を持って子供数人に囲まれていた。
なんとなく追いかけてみる。

数十分後。

良い子だね。この数十分間に

- ・道に迷っていた老人に道を教える。
 - ・滑って尻餅ついた人に手をさしのべる。
 - ・陣痛の始まった妊婦を病院まで一緒に行く。
 - ・ブレイクダンスを始めた爺を諭す。
- などやっていた。

え？一つ変なの混じってるし、妊婦の件は手伝わなかったのか、だって？

妊婦は手伝ったよ。タクシー呼んだだけけど。

一緒に病院までついていったし、その妊婦の親御さん呼んだのも俺だし。

なんでも夫となる男は事故で死んでしまったんだって。空気が一気に重くなったよ。

俺と女の子？は親御さんに礼を言われて戻って行ったんだ。

その後自己紹介して話したらブレイクダンス爺を見つけたんだよ。

俺が抑えて女の子が諭したんだ。

元に戻ったら良い爺さんだった。

で、今。

女の子と教会の近くで猫に餌をやっています。

何でだろうね。

「どうかしましたか？」

「いや、何でもありませんよ。気にしないでください」

「？わかりました。そう言われるのであれば気にしません」

「ありがとうございます」

女の子　絡繰さんは猫たちを撫でる行動に戻る。

こうしているとさつきガイノイドと言っていたが人間と変わらないと思う。

無表情の状態が多い女の子。そう考えれば当てはまる。

しかも、今は少し笑っていた。

「可愛いですね」

「？　ああ、猫のことですね。一般常識で言えばかわいいのだと思われませう」

「違いますよ。絡繰さんのことです」

「私が……ですか？」

「ええ、絡繰さんが、です」

「そんなこと無いと思われませうが」

「それは自分のことがわかってないだけです。絡繰さんの言う一般常識では貴女も十二分に可愛いですよ」

「はあ……」

「まあ、じっくり考えてみれば良いと思いますよ。時間はあるんですから。」

では私は帰らせてもらいます。もうそろそろ夕食の準備をしなければ」

「そうですね。さようならです」

「さようなら。　　そうだ。明日もここにいますか？」

「はい。その予定ですが」

「では、また明日もここに来ても？」

「私がかまいません」

「そうですね。ではまた明日」

確認をして歩き出す。あと、数時間で夜になるだろう。相坂さんは別に食事は取らなくても良いからな。取ろうと思えば取れるけど。

「レオナルドさん!」

「はい？」

後ろから絡繰さんの声がする。振り向いて彼女を見る。

「私のことは茶々丸と呼んでもらってかまいません」

……驚いた。会ったばかりの女の子にそんなことを言われるとは。
クスツと笑う。

「また明日会いましょう。茶々丸さん」

「ええ、また明日」

また歩き出す。今日は良い気分で帰れそうだった。

「……どうしたんだ、茶々丸。いつもよりも豪華じゃないか。今日
はなにかあったか？」

マスターが驚きの声を上げる。
そんなにいつもとちがうでしょうか？

「いえ、今日は何の記念日でもありませんが」

「ちがう。なにが良いことがあったのか、と聞いているんだよ」

なにが良いことがあったか、ですか。

今日はレオナルドさんと会った以外いつも通りでしたが。

「……まあいい。美味しい料理が食えるのは良いことだ。詳しいことは聞かん」

マスターはいつも通りいただきますと言って食べ始める。
私は食べられないので座っているだけです。
ふと、レオナルドさんに言われたことが気になった。

「マスター」

「ん？ なんだ」

「私は可愛いのでしょうか？」

「は？」

マスターは驚いていた。

……珍しい顔です。保存しておきましょう。

「茶々丸、それは誰に言われたんだ？」

「今日知り合った方ですが」

「そいつは男か？」

「はい」

「ふーん……」

「どうかされましたか？」

「いや、なんでもない。可愛いかどうか、だったな。可愛い、というよりは綺麗だな」

「綺麗ですか？」

「ああ。外見としては綺麗だよ。……可愛いと言われたのはどんなときなのだ？」

マスターに可愛いと言われるまでを大まかに説明する。

「猫を撫でているとき……なあ」

「はい」

「うーん……なにが可愛いのか……うーん」

「どつでしゅつか？」

「全くわからん。普通なら綺麗だ、と言っただろうが……その男の感覚がずれてるんじゃないか？」

「そうですね」

結局、答えはわからぬままでした。

でも、明日また会えるので気にしなくても良いかもしれせん。また明日聞いてみましょう。

9 話（後書き）

茶々丸ですね。茶々丸かわいい。

春秋は感想を待っています。

くがいいとか、くが悪いとか書いてください。
直す努力をします。

なかなか評価があげられない。俺がだめなのか。
嗚呼、文才がほしい。

10話

どうも、今日の朝は教会へ行かなかったレオナルドです。

何で行かないのか？それは場違いだからね。

行くわけには行かないのさ。

それに昔機関長と一緒に外で布教してたら機関長に一般人と一緒に祈るな！って怒られたからなんだよね。

というわけでミサのある今日は行かず外を歩き回ることにしました。相坂さんの調整も終わったしちょうど暇だったんだ。相坂さんは魔法球で幻獣たちと遊んでるよ。

この頃は魔法球の幻獣すべてが相坂さんの言うこと聞いてたよ。

俺よりも上位にされてたし。

いらぬ話だったね。忘れてくれよ。

服装は全身真っ黒。その上からいつものコートを着ている。

今まで無茶してきたせいか温度についていまいち感覚が鈍い。

戦闘に使える他の感覚については鈍くなってない。むしろ鋭くなっている。

犬には負けるが嗅覚は人が相手にならないくらいすごい。

他の視覚、聴覚は人並みはずれている。

温度以外の触覚と味覚が普通より上程度だ。

と何でこんな話をしたか、なんだが。

これらのおかげで人捜しとかはとでも得意なんだ。それが望む、望まぬに関わらずね。

「やあ、久しぶりだな。レオ」

「直接会うのは何年ぶりだったかな？ 元気そうで良かったよ。マナ」

彼女と会うのは戦場が良いかなと思ってただけだな。

俺から見えるということはマナからも見えると言っただけだからね。視力については彼女の方が上手だ。

「私も会えて嬉しい。なら何で逃げたんだ？ 教えてくれないか？」

とっつてもイイ笑顔で聞いてくる。答えたくないなあ。

「それは君が美しくなっていて驚いてしまったからさ。まさかそんなに成長してるとは思わなかったんだ。絶世の美女と呼ぼうか？ それとも傾国の美女のほうが良いかい？」

「どちらの言葉も褒め言葉だろうけど私は美しさで国を傾けるようなことをする気はないかな。

絶世の美女の方でお願いするよ」

「すごいね。自分から絶世の美女と呼ぶように言う女性は君が初めてね」

そして二人で笑いあう。こんな戯言にもしっかり反応してくれる人は少ないからありがたい。

話しながら近くにあったベンチへ座る。

マナも

「で、なんで逃げたのか教えてくれないかな」

マナは俺に体を近づける。そして俺のわき腹に銃口をあてる。

顔は笑顔のままだが目が真剣^{マツ}だった。

顔がひきつるのがわかる。

「だからマナが美しくなっていたからだって「嘘だな」……」

女性はなんでこんなに鋭いのだろう。

嘘なわけでもないんだけどな。言われなれてるから嘘だと思ってるのだろうか。

「綺麗になつたと思ってるのは本当なんだよ。それは真実さ」

予想以上に綺麗になりすぎていたから驚いて見つかってしまったんだから。

「む……」

「それでね見たとき顔が真っ赤になってしまったんだ。そんな顔を見せるのは恥ずかしかったからね。逃げてしまったわけだ」

「嘘……ではないな。綺麗、か。嬉しいこと言ってくれる」

マナは顔を赤くしていた。最後の方小声で聞こえにくかったな。なにいつてたんだろ。

聞かないけど。藪を探つて竜を出す気はない。

「こんなところで話すのも何だから家に来ないか？ 外は寒いだろう？」

「家があるのか？ 来たばかりと聞いていたんだが」

あの爺、やっぱり事前に知ってたな。

まあ、どうでもいいことだ。

「有るよ。そこそこ広い洋館なんだけどね。お茶とクッキーぐらいなら出せるよ」

「杏仁豆腐はあるかな？」

「無いけど作るよ」

「じゃあ行かせてもらおうかな。レオの作る物はどれも逸品だからね」

「そんなに褒めてもらえると嬉しいね」

そうして家へ行くことになりました。

前をいくマナが嬉しそうにしていっていいなっと思っ。

家の一室。

主に客をもてなす為にある部屋。

今回が初めて使うけどね。客なんてこないし。

そもそもこの洋館自体あんまり使ってない。

魔法球があるから休みの間は使う必要がない。

客人はあらかじめ電話してくるように言ってるしね。

話は戻って今俺とマナは部屋にいる。

俺は紅茶を飲んでいて、マナは俺が作った杏仁豆腐を食べていた。杏仁豆腐は三杯目である。

「……ふう。腕が上がったね。店で出せばすぐに人気商品になると思うよ」

「そんな気はないな。本職が忙しいし。それに俺には異端殺ししての方がお似合いだよ」

「そんなこともないとは思っただけど……まあレオの自由だな。私が決めることではない」

「ありがたいね。俺としても今の仕事の方がなにも考えなくて済むからね。」

そう言って紅茶を一口。冷め始めてるけど合格点だと思う。紅茶に拘りはない。ミルクティーもレモンティーもそのままでも飲む。抹茶、珈琲、緑茶などどんな飲み物でも飲む。珈琲は眠気覚ましに良いし。

拘りすぎるのは馬鹿がやることだ。英国人はまずい料理ばかりなのに紅茶には拘る。

そんな拘るなら料理もうまいもの作れよと思う。

そこで残念なのは俺も元英国人である事だろうか。村の料理は美味かったのにロンドンで食った飯は不味かったしな。

ここで終わっとうとう。

しかし、俺の考えはすぐに横道にそれるな。

何でなんだろうか。

「レオ。あの後どうしてた？」

「えっ？ もう一回言ってくれるか？」

「別れた後はどうしてた？」

「別れた後か……主に仕事かな。詳しくは話せないけどなかなか充実した毎日だった。

マナの方はどうだった？」

「私は……」

いままで手紙だから書けなかったことなどを話していく。

話は夕方まで続いた。数年ぶりに会ったのだしこういう時間は悪くなかった。

途中俺がマナを残して教会に行ったりしたけど問題はなかった。茶々丸さんとはまた来ることを約束して帰ってきた。前回可愛いと言ったことについて聞かれたが可愛かったから可愛いと言っただけなんだけど、なにか問題でもあっただろうか？

帰ってきたときマナに女の子と会ってきただろう、と聞かれてびっくりした。女性は男にはないなにかを持っているのだろうか。

話しているうちにマナの門限が近づきマナが帰る事になった。夕飯もご馳走したかったのだが……残念だ。

二人で道を歩く。冬は空気が澄んでいて夕陽が綺麗だ。

よし、ここまですべて母音をaで終わらせているぜ。

「で、次は学校で会うことになるのか？」

「さあ？　もしかしたら戦場かもしれないし今回みたいに町中で会うのかもしれない。運命はわからないよ。でも一番確実なのは学校で会うことだと思うけどね」

「そうだな。ではレオはどこで会いたい？」

「教会でシスター服着てる君に」

「あり得ないな。バイトとはいえ私は巫女をやってるんだ。巫女にそんなお願いしないで欲しい」

「シスターも巫女も同じ神に仕えるものじゃないか。変わらないよ」

「神道が良くてもキリスト教が駄目なんじゃないか？」

「ははっ。その通りだ。……今日は楽しかったな。」

「私もだよ。相変わらずレオが作る料理は美味しい」

「それは良かった。頑張ってる甲斐がある」

しばらくの沈黙が続く。嫌いじゃない静かさだった。

「もうそろそろ帰っても良いぞ。寮もすぐそこだ。」

「そうか。じゃあ、また」

「ああ、またな」

そう言って別れた。俺もマナも笑顔で別れる。

別れるときは笑顔で別れるのが二人の中での約束だ。

前はマナは泣きながらだったが今回はちゃんとした笑顔だった。

俺は来た道に戻っていく。太陽も半分沈んだ。

「しかしなあ……」

さっきの笑顔を思い出して顔が赤くなる。

何度も言うのが綺麗だった。昔も綺麗だと思ったがここまでなるとは思わなかった。

……顔を洗おう。そうすればもとに戻るはず。

そう考えて足を速めた。

10話（後書き）

作者の勉強がヤバいので今度から投稿が不定期になります。
それでも一週間に一回は投稿するつもりです。
身勝手ですいません。

11話

マナと会ってから三日後。

少し面倒なことがありましたが無事過ごしています。
なにがあつたのか？

相坂さんの戸籍作つたり、相坂さんが学校通えるように学園長に話に行つたり、女子寮に結界はつたり。

学園長が相坂さんの登校に関して煩かつたからマクスウェル直伝の交渉術でおはなしをしておいた。

住所はもちろん俺の家。

話の間中高畑先生が睨んでたのが気になつたね。

なにか？俺のことを教会から改心して立派な魔法使いを目指してるとでも思つてたのかな？

あり得ないね。そんなご都合主義、マンガやアニメでしかやってないよ。

俺マキステル・マキつて立派な魔法使い代表のナギ・スプリングフィールド大嫌いだし。

人殺しを素晴らしい事にするなよ。

元老院つてあの混乱に紛れて魔法使つて帝国民の洗脳やってたみたいだし。第2皇女も洗脳済みなんだよね。

自国民を殺した奴を英雄扱い。笑えるよね。

人型の生き物は都合があつたとしても仲間が殺されたら都合があつたから仕方がないなんて考えられないよ。この場合は戦争を止めるためだつたから仕方がない、かな。

帝国の国境付近の住民と奥の方に住む住民は考え方が違つらしいよ。あつちのキリスト教徒が頑張つたらしい。

つと横道にそれた話をストップしよう。

いま俺は教会から帰つてからの二度寝から起きたところです。

昨日は徹夜してしまつたからね。

この頃は1日三時間睡眠が当たり前になってきた。

七つの大罪に『怠惰』があるけど気にしない。もともとちゃんとしたキリスト教信者ではないしな。

俺なんかを真面目なキリスト教信者としてしまつたら真面目な信者に殺されちゃうよ。

それはさておき魔法球は便利ですよ。一時間で24時間睡眠とれるんだから。

この頃は相坂さんとは話もしていない。

相坂さんは見るもの全てが珍しく見えるみたい。

今は全ての魔法球を回つてたはず。

最近気付いたらしいけどポルターガイスト現象が起こせないらしい。霊的な物は相変わらず見えるようだけど。

殻があるからやりにくいだろうね。

あれは幽霊の魂から出る魔力が伝わって動かせるらしいから。ぼんやりとした意識の中そんなことを考える。

寝起きは意識がはつきりしない。

かなり強力な殺気を当てたら意識はすぐに覚醒するけど、それができる人はいない。

ある程度目が覚めたところでベッドの横にある机に置いていた眼鏡を取る。細工済みの眼鏡だ。

橙子さんと一緒にテンションで作つた作品だったりする。

くだらない機能もあるが長年使つてる物。用途は意識の切り替え。眼鏡かけると意識は大体起きるけど少し寝てたりする。

麻帆良にきてから表面の性格が変わってきた。何でだろう。これも麻帆良に来たせいかな。

後は顔洗つたりすると完全に目は覚める。いろいろやつた後に魔法球から出る。

一日たたないと出れないのが多いが俺のはそんな欠点は無くしてある。

今日は麻帆良を歩いてみることにした。
いままで三日前も同じことをやるつもりでいたけどマナと会ったか
ら無くなったし。

「すごいなあ。流石は世界樹って言われるだけはある」

今俺は世界樹の前に来ています。

他のところ？作者が怠けたんだよ。

知りたかったら原作の13時間目を見てね。

この作品の主人公はメタ発言なんか気にしないよ！

気とかいるんな物を使って駆け上がる。目指すは天辺。

浮遊術なんて使わないよ。風情がないじゃないか。ところで風情っ

てこの使い方でもいいのか？

10分程度で到着。意外と時間がかかったよ。

真上にある太陽がきつい。

頂上からは地平線まで見渡せる。西洋の町並みをした麻帆良は良かった。

用事もなくなつたので下に降りてまた当てもなく歩き回らうと思つ。

今は麻帆良から出てきています。

一日中認識障害を抵抗^{レジスト}したり、外に出てる間中監視されるのは気が滅入る。

それで大本の結界消したり、爺消したりすると殺そうとしてくるだろうから面倒。

だから外に出てきてるんだけどね。

久々に気にする物もないから楽だね。

人ごみも結構好きだったりする。人が生きてるって感じがするからね。

「誰かそいつ捕まえて！」

後ろから大きな声がした。

何かなって思つて振り返ってみる。

何かを抱えて走つてるような男とそれを追いかけているオレンジ色の髪をした少女。人ごみが裂けるように道ができていた。

スリかな？まあ状況からして少女の鞆を男が盗んだ、ってところだろう。

とりあえず男を足を払って倒す。弁慶の泣き所蹴っておいたから走れないだろう。……やりすぎたか？なんか呻き声人間ばくない。

「はあはあ。……ありがとうございます！」

「ははは。気にしなくて良いよ。人助けは気分が良くなるからね」

なかなか良い性格のようだ。この頃は挨拶も言わない奴が多いから。

「明日菜。捕まえたん？」

黒髪の少女と人の良さそうな女性が走ってきた。

息切れしている。結構走ったんだろな。

どうやらこの少女はアスナと言らしい。

……アスナ？ まさか神楽坂じゃないよな？

あの後男を警察に引き渡し、少女たちとお茶をする事になっていた。さらに彼女たちの奢りになっていた。

男としてはあまり嬉しくない。男性が女性に送るべきだと思う。

しかもそれらは勝手に決められていた。
まあ、終わったこと言っても仕方ないんだけどね。

「本当にありがとうございます。人ごみでなかなか追いつけなくて」

「別にいいですよ。それに紅茶まで奢って貰ってるんですからこっちもありがとうと言いたいくらいです」

「ほんによかったわー。レオナルドさん良い人やね」

二人とは自己紹介をした。

オレンジの髪のほうが神楽坂明日菜。

黒髪が近衛木乃香。

マジでターゲットだったね。せつかく仕事のことなんか忘れていたのに。さっき小さな気弾を飛ばしてみたけど途中で消えたんだよね。十中八九アスナ姫だよ。でも報告やめとこうかな。面倒だし。

2人は注文したチーズケーキで話が盛り上がっている。
若いっていいね。元気が溢れているようだ。

ホント若いってすごいよね。俺でも自分からストーカーなんてなれないよ。

「レオナルドさんはなにやってるんですか？」

「俺？ 俺は……教師予定ですかね。麻帆良で教師やるんですよ。教育実習生としてですが」

「へえ、奇遇やな。うちたちも麻帆良通つとるんや。どこの担当になるん？」

「確か女子中で二年生のAクラス担当ですね」

「えっ？ 私たちのクラスじゃない！ じゃあ高畑先生はどうなるのよ！………んですか？」

「無理に敬語使わなくていいですよ。年も近いですし。高畑先生は出張が多いからそつちに集中してもらって学園長が言っていました。でも俺はどうかと思っんですけどね」

「なんでなん？」

「だって、教育実習生に一クラス担任させるなんて正気の沙汰じゃないからですよ。二年でこの時期ならもっとちゃんとした先生がやるべきです。来年は受験生なんですから」

「でもうちの学校はエレベーター式よ？ そんなこと気にする必要はないと思っただけど」

「エレベーター式でも受験生は受験生です。高校入ってから勉強に困るなんて事になったら大変じゃないですか。勉強は人生に関わりますから」

「そうなんやー。考えたことなかったわ」

「今から考える必要はないですが基礎が出来てない人なんて社会では不要です。」

君たちはまだ時間が有りますからしっかり考えて自分で選んだ道を

行けばいいと思いますよ。

……面倒な話しましたね。御馳走様。これで俺は帰らせてもらいます。奢ってくれてありがとうございました」

財布から五千円札を取り出し机において早口で逃げるように去る。

何で逃げてしまったんだろう。逃げる必要なんて無いのに。

頭がチクリと痛む。

ああ、そうだ。いらぬこと言っただけだ。でも必要なことでもあるんだけどね。

あの子たちは知らないうちに魔法に巻き込まれている。

知らせて選ばせるのも一つの手だけど知らないままで生きさせるのもいいと思う。

俺には出来なかったけど彼女たちならばできる可能性もあるだろうから。

……だめだな。こっち来てから感情が大きくなって。

気を緩めすぎたかもしれない。子供の頃のようにだ。

昔の自分はもう無くなったと思うたのに。

昔に戻るはずもないのに。

11話(後書き)

一つ目です。

12話

彼女たちと別れた後家へは向かわず麻帆良の中にある森へ向かった。考えてみたが報告するのはまだしないことにした。

せつかく何ヶ月も観察できるのだ。やつといて損はない。

移動には瞬動を使って行く。もちろん人には見つからないように。たとえ麻帆良全体に常識が変わるほどの認識障害がかかっているとはいえ見つかるでもないわけではない。

森の中へどんどん進んでいく。進むごとに雪が厚くなっていく。今は誰とも会いたくなかった。

進んでいると水の音がした。周りを見渡すと小川を発見した。

小川をたどっていくと水の音が大きくなっていく。

岩が増え木の数が減っていった。

木が無くなったときそこには滝があった。

「滝か……精神統一にはちょうど良いな。川の流れもそんなに強くないし」

岩には何かの動物の足跡や草鞋のような足跡があったが気にしない。足跡は昨日雪が降ってなかったから残っていたのだろう。

まだ12月だからかなり冷たいかもしれない。

けどそんなこと気にせずコートの脱ぎ川へ飛び込む。

鈍いはずの感覚でも冷たく感じるのだからそうとう冷たいに違いない。

息を吸い込み水の中へと潜る。

水中に生き物は少なかった。雑魚ばかりだ。

川底になる程水の勢いは増していった。

深いところや浅いところいろんなところがあって泳ぐのにも一苦労だ。

息継ぎのために顔を出す。水に濡れた髪をオールバックにする。少し後に髪の一部がたつ。

どんな髪型にしてもアホ毛ができるので髪型の選択肢が減る。

ポマードやつてもなるから諦めている。

少し時間がたつたころ岸へ向かって歩き出す。

水は鳩尾あたりまでだから歩くのに問題はない。

岸へ上がり魔法で服を乾かす。ついでに体も暖める。

魔法はホントに便利だ。魔術だと準備も面倒くさいから。

辺りに結界を張り川辺に寝転がる。目を閉じても水の流れる音、風で木の葉が擦れて鳴る音。

いまここは外から切り離されている。

空間遮断ができるわけではない。ただ音を遮っているだけだ。

だから外の音は聞こえず内で鳴る音しか聞こえない。

そのまま目を閉じていると睡魔が襲ってくる。俺はそれに抵抗しなかった。

目を開けると空は少し朱くなっている。

腕時計を見ると四時頃。今から帰れば五時頃だろうか。急いで帰れば完全に暗くなる前に帰れるだろう。

起き上がりコートを着ようとする。

すると森の中から何か大きな物が歩いてくる音がした。

さくさく、と雪を踏む音がする。

影の倉庫から銃剣を取り出す。

一本ずつ両手に持ち戦闘準備は完了した。

森の中から現れたのは大きな熊だった。冬なのに起きているなんて珍しい。

ならば来たときに見つけた足跡はこいつのだろうか。餓えているのか大きさに対して少し細かった。

俺が観察していると熊は吠えた。よく聞く犬の鳴き声など比ではない。これは威嚇しているのだろう。

野生にしてはなかなか知恵がある。大概の動物なら襲いかかってくるのに。

熊は様子身をしていたがどうにもならないことをわかっているのか逃げようもしない。

もちろん逃げたら後ろから銃剣で殺すつもりだった。

熊は溜めを作り始める。俺も銃剣を構える。

両方とも動き出さない。先手ではなく後手を狙っていた。

だがその静寂は長く続かず熊が先に動いた。

勝負は一瞬だった。

俺を銃剣ごと押し潰そうとするように両腕を前に出して飛びかかった熊。

それに対し俺は少ししゃがみ右手の銃剣で熊の左腕をはじき残った左の銃剣で熊の頭を突き刺しただけ。

俺は突き刺した銃剣を離し前へ駆ける。

熊の下を通り抜け怪我也も負わず血も浴びずに勝負に勝った。

右の銃剣を見る。また頭が痛くなった、がすぐに治る。そしてまた

銃剣を見る。

「…………ふう。駄目だな」

銃剣には真ん中からひびが走り折れそうになっていた。それを地面の岩に投げつける。

銃剣は刺さることなく当たった瞬間折れた。

たった数日でこんなにも錆び付いてしまった。

鍛錬は欠かしたことはない。なのにこんなにまで腕が衰えた。

「鍛え直さなければ…………」

実戦で鍛えられたのだ。実戦が一番良い。なるべく殺し合いに近いものを。

いや、実戦でなくても良い。あるレベル以上の戦いでも良かった。殺した熊を影の倉庫に入れる。その際二本の銃剣も回収しておく。戦うのならば全力で出来なければいけない。

鍛える方法と戦う方法を考えながら山を下りた。

もう辺りは暗かった。既に六時は越えている。結局だれかを13課から呼ぶのがうまい方法かもしれない。時々頭が痛くなるせいで思考が止まる。そのせいで歩きながらも考え事は止まらない。

「レオナルド・アンデルセンか？」

人通りもなく、暗くなった通りで声が響く。拙いが結界も張られていて一般人は絶対来ない。まるで闇討ちのようだ。

「ええ、確かに。私はレオナルドと言います。で、こんな暗い中何の用件で？」

いつも通りを装って返事を返す。だがその声には感情がこもってなかった。

通りの先に一本だけ灯りのついていない街灯があった。その下に大きな刀を持った少女がいた。顔はわからない。刀はあの大きさから

して野太刀だろうか？

「……なぜ木乃香お嬢様に近づいた？ 返答次第では……」

「なにをするので？ まさかその立派な得物で斬る、とても？ 怖いなあ」

ふざけて返事を返す。やっぱり感情はこもっていない。

「ふざけるな！ 何の目的があったか聞いているだろう！」

「目的などありませんよ。偶然です。運命で必然だったりするかも知れませんが」

目的など無い。人助けをしたら会ってしまっただけの仲なのだから。でも、そんなこと言っても信じてはくれないだろう。

「……まあいい。斬ればわかる」

「問答無用ですか……」

「はっ！」

少女は猛スピードで突撃してきた。

俺は焦ることなく情報をまとめる。

武器はおそらく野太刀。身長は低め。攻撃方法は野太刀に気を纏わせて戦うと思われる。

俺の攻撃範囲外だと思っっているのだろう。

少女は俺の2m手前で止まり突撃の勢いのみ刀を抜刀した。

勿論この程度の攻撃ならば軽く避けることができる。

十分殺せる隙だが見逃す。少し遅れて銃剣を一本取り出し投げつけた。鉄甲作用は使わない。

「ふんっ！」

銃剣はたたき落とされる。

少女は速度を上げ斬りかかってくる。

袈裟、唐竹、刺突、薙ぎ、逆風、切り上げ

いろんな角度から野太刀が俺を襲う。

俺はすべて紙一重で避け一定の距離をたもつ。

いままでに隙は結構あった。でもその隙をつけない。

女子中等部の校舎の方を見る。

さつきからずっと監視されていた。それは今も変わらない。

なるべくこちらの手を見せたくない。

理想は話し合いで解決、だが無理だろう。

ならばすでにばれているだろう方法で戦う。

今度は一本黒鍵を取り出す。

少女はそれを見て笑った。

「無駄なことを！ そんな剣で打ち合えるものか！」

「打ち合う気なんてありませんよ」

黒鍵を指で挟みこんどは鉄甲作用は使って投擲する。

「はっ、だから効かな　　いつ!？」

黒鍵も銃剣と同じように落とそうとしたものだから力負けして派手にぶっ飛んだ。

やっぱり黒鍵の方が鉄甲作用がよく効くな。バランスの問題だろう。頭痛がひどい。そのせいでさっきも少し投げる場所がずれた。頭が上手く働かない。

また隙ができる。一際強く頭が痛くなった。だが気にしない。すぐに止む。今回は隙を見逃すつもりはなかった。

銃剣を倉庫から取り出す。

取り出したそれを少女に向かって投げる。

銃剣は少女の頭と心臓を狙って投げた。心臓のほうは二本だ。

これで少女が死ぬことを幻視した。なにか想定外なことがない限りの確定事項。

そのことに不満がわいてくる。

本来ならばこの程度の監視など気にしないだろう。なのに監視を気にしすぎてしまった。それに何故俺は未だに殺そうと思えない？頭痛はさらにひどくなる。頭が割れそうだ。

勢い良く飛んでいく銃剣は動けない少女の急所へ刺さる。　　前に

三発の銃弾が邪魔をした。

「戦闘中失礼するよ」

邪魔をしたのはマナだった。少女の体を貫くはずだった銃剣は悉く撃ち落とされていた。

マナは俺と少女の間に入った。

……やめるか。止めてくれるなら断る必要もないし。むしろありがたかった。爺どもの計画にはまるところだった。頭に血が上りすぎた。そんなことも忘れてしまっなんて俺らしくない。

「た、龍宮！ なぜ止める！」

少女はなにかに言っている。……まあいい。もう殺る気がわかない。

「刹那、落ち着くんだ。彼は敵ではない。私が保証する。だから今は剣を引け」

「だがっ……！」

「後でしっかりと話すから、な？ 今は止めるんだ。」

「なあ、マナ。俺は帰っても良いか？ まだ夕食を食べてないんだ。腹が減っている」

「……帰るなら部屋を貸してくれないか？ 少し話がしたい。お前にも、こいつにも」

どうやらなにか話があったらしい。別に良いけどな。今はテンションが低いし頭が痛いからやる気がなくて途中で飽きることは確かだ。

……ところであの少女はなんで話しかけたときからこっちを睨んでくるのだろうか？

「いいよ。俺は早く飯が食いたい。腹が減って死にそうなんだ」

「そうか、ありがとう。飯なら私が作ってやるうか？」

「熊捌ける？」

「無理だ」

「ならいい」

そう言って家へ向かって歩き出した。
まだ頭痛はやんでなかった。

12話（後書き）

今日はこれで終了。

本作品初めての戦闘シーン。

戦闘表現苦手です。どうでしょうか？

今日は明日菜、木乃香、刹那との出逢いですね。

プラスから始まる出逢いとマイナスから始まる出逢い。

二種類です。少々順調に行き過ぎですかね？

感想待ってます。意見の方もね。

13話

家についた頃には頭痛も和らぎ最悪だった機嫌は少しは良くなっていた。

熊を捌いたり料理の準備をしている間にも機嫌はほんの少しずつなおっていく。

そして食事。

「……つまりこの子 刹那は近衛木乃香嬢の護衛で教会所属の俺が麻帆良に来たことに不信感を抱いていたら、愛する木乃香嬢と俺が接触していたから勘違いしたと」

「誠に申し訳ありませんでした！」

「はっはっはっ。まあ怪我も少なかったし良いじゃないか。レオもそこまで狭量じゃないだろう」

家の食卓で三人で話していた。

前には料理が置かれている。森で狩った熊で熊鍋だ。

位置はマナと刹那が並んでいて俺がその前に座っている。

怪我は刹那の頬に切り傷があっただけ。

本来なら頬の肉根刮ぎ持って行くぐらいの勢いはあるんだけどなあ。

「もうそろそろいいかな？ まあ俺も普通にすぎていたし悪いのかな？ 今更だけど」

「いいんじゃないか？ 十分火は通ってると思うが」

「本当に申し訳ありませんでした！」

「もういいよ。気にしてないから。」

「ちょうど戦う相手が欲しかったし。才能はあるから後は良い師匠と日々鍛錬を続けていけば一流になるでしょ。あとマナ。お前は鍋に集中しすぎだろ」

「……本当ですか？」

「うん。ホントホント。嘘言う意味ないし。」

おい、マナ。肉ばかり取るんじゃないやありません。野菜も取りなさい」

「熊の肉は初めて食べたんだが美味しいな。刹那も食べてみると良い」

「えーと、じゃあいただきます」

「好きなだけ食ってね。でも太ったからって俺に文句言わないでね」

「嫌なこと言わないでください！ 食べづらくなるじゃないですか
！……っっ」

「はっはっはっ」

「お前は笑ってんじゃないやねーよ」

「あ、美味しい」

「不味いもの食わせてどうする」

「レオ、もうすぐ無くなるんだが」

「あー、はいはい。新しいやつ持ってくる」

「もぐもぐ」

「刹那、そんな焦らなくても次があるよ」

「はっ！ あう」

「……かわいいな」

鍋はみんなですつつくのが美味しいよね。

一緒に食事していると仲良くなりやすいけど何でだろうね

食後。三人の前には空の鍋が五つ置いてあった。

「食った、食った。美味しかったなあ」

「確かに美味しかったです」

「さすがはレオだよ」

「適当にやったのに美味しかったことにびっくりだ」

「「適当だったの!?!」」

「うん、適当」

「……適当で何でこんなに美味く……」

「刹那しっかりしろ。これがレオだ」

「ひどいこと言うねえ」

お前が言うな、である。

「文句あんのか?」

地の文まで読むなよ。

「なにに反応してるんですか?」

「気にしなくて良い。よくあることだ」

「やっぱり君たち酷いよな」

「えっと、ごめんなさい？」

「私はいつも通りだろう？」

「泣くよ！ 俺泣いちゃうよー！」

「泣けばいいんじゃないか？」

「えーと、あはは」

「絶望した！ 料理喰っておきながら俺に冷たい二人に絶望した！」

世界は甘くなかった。泣かないけど。でも慰める振りだけでも欲しかった。

「えーと、大丈夫ですか？」

「全然大丈夫じゃない」

「面倒くさいな」

「どうしたら機嫌よくなってくれますか？」

「……じゃあこれから時々練習相手になってよ。ひとりじゃ出来ないことがあるんだよね」

「それぐらいだったら私程度でよければ良いですよ」

「じゃあ、機嫌直すわ」

「ガキと大人の話し合いみたいになってるな」

「これから杏仁豆腐つくらねえぞ」

「一回だけ半額で仕事を聞お願いこう」

「やっぱりけちな」

「あはははは……」

ほのぼのとした時間が続く。

練習の時間を決めたり、みんなでトランプやったりね。まるで修学旅行のようだぜ。行ったこと無いけど。

話したりして楽しんでいるとマナが真剣な目で話しかけてきた。

「なあ、レオ」

「どうかしたか？マナ」

「お前今日何かおかしくないか？」

「？ どころか？ いつも通りだと思っただが」

「……そうか」

「俺そんなにおかしいか？」

「いや、何でもないんだ。私の勘違いだろうさ」

マナはそう言って黙ってしまふ。

そんな風に言われると気になるんだが。俺がおかしい、ねえ。

「私は帰らせてもらっつよ」

「あ、じゃあねー」

「では私も失礼して」

「それ却下」

「何ですか！」

「はっはっはっ。本当にコントになってきたな」

「龍宮もそんなこと言わなくても良い！」

「「はっはっはっ」

そうしてマナは帰った。最後に冷蔵庫にあった杏仁豆腐取っていったけど。

なんでもそこまでこだわられるのか不思議だよ。

いつの間に杏仁豆腐があることを知ったのだろうか？ 教えた覚えはないよ。

「して、私に何か用事が？」

「あー、うん。いろいろ聞きたいことがあってね」

「なんですか？」

今まで緩めていた顔を引き締める。頬杖もやめ正座する。俺にっられて刹那も正座する。

「君、木乃香嬢の護衛なんだよね？」

「はい」

「何でそばにいないの？」

「っ！」

「一般人にはわからないだろうけど、随分と拙い追跡だったよ。剣使うんでしょ？ だったらその方法は向いてないかな」

今日、昼のとき思ったことだった。見られているのがわかるうえ居場所まで分かるくらいだった。一番の目印になったのはあの野太刀の入った竹刀袋だった。あれはずいぶんと目立つ。制服姿だったしね。

「それは……」

「父親が娘には知られたくないと思っているんだよね」

「な！　なんでそれを!？」

「すぐにわかる情報だよ。矛盾はしてるけど」

「矛盾？」

「うん。だってさ、魔法がバレたくないのになんで魔法協会の敷地内に送るの？」

「あ……」

そうなのだ。しかも数ヶ月後には英雄の子供までくる。そんな状態ではいけない方が有り得ない。

「まあそれだけじゃないんだろうね。詳しくは聞かないけどね。次の質問させてもらおうよ。」

では……あんな風に影から見守るのはお前に問題があるからだろ？」

「……なぜそれを？」

刹那は動かない。だがその小さな体からは殺気が漏れていた。

「やっぱりなにかあるんだな？」

「は？」

「嘘だよ、嘘」

「う、そ？」

「そう、嘘。こんなにも引つかかるなら交渉事はやらない方がいいな」

「……………」

刹那は両手をついて落ち込んでいた。

こんなものにも引つかかるなんて、刀を使う者は嘘がつけないのだからうか。

「まあ、反応からしてこれがお前の中でかなり重要な秘密だとわかる。だから詳しくは聞かないし誰にも話さない。それでいいか？」

「……………助かります」

落ち込んだ状態から復帰する。復帰したがまだ顔は暗い。

「……帰っても良いですか？」

「いいよ。じゃまた明日家に来てね」

「……わかりました。……では」

「バイバイ」

刹那はそれから暗いままで帰って行った。

精神的に弱すぎるだろ。あの程度に引つかかったからって自己嫌悪激しすぎ。

「……帰り大丈夫かな？」

少し不安になってきた。送ってやればよかったかな？

家に俺以外居なくなつたところで仮面を止める。

家に帰ってから……いや、刹那と戦っている途中から思っていたことがある。

それを確信したのはマナが聞いてきたからだった。その時点でおかしいのだが。

今日の俺は今までから考えて明らかに異常だった。

有り得ないほど落ちた技術、いつもならば後悔しないであろう言葉、

選択肢を与えない考え、襲いかかられたとはいえ殺すことに疑問を持たない思考、容易く他人を受け入れてしまったこと、いつもなら考えられないほど幼稚になっていた先程、そしてそれらに疑問を持たない自分自身。

何かが働いているとしか思えない。絶対に何かから邪魔されている。だが自分にはどうしようもない。そのことに苛立った。

このことに気づけたのはカソックを来てから。つまりこの妨害は対処できるのだ。方法はわからないがいろいろ試す必要がある。

だが明日には忘れていくかもしれない。

遠距離で俺の思考を操作できたのだ、記憶を操ることも出来るかもしれない。

ならば思い何かにこのことを書き残しておこうとペンと紙を取り出す。

今まとめたことを書くとした瞬間。

刃物でも突き刺されたかのような痛みと共に暗転した。

13話(後書き)

今日一日です。

セリフ多めで地の文少なめの今回

14話(前書き)

8 / 26 学園長との電話 追加

14話

部屋には人影が4つ。一人は笑顔、一人は無表情、一人は不安げ、一人はわかっていなさそうな顔で。

「……………」

「……………」

「……………」

「コールです」

不思議そうな顔だった一人がカードを晒す。
カードはスペードの10、J、Q、K、A。
ロイヤルストレートフラッシュだ。

「…………ふう」

笑顔の人は息を吐き出す。そしてにっこりと笑い口を開いた。

「負けました」

「…………あははは、また勝っちゃいました」

両手をつき悔しそうにするなか、隣にいた無表情の子が笑顔の人のところから全てのコインを勝った少女のもとへと動かす。笑顔の人の前に落ちたカードはスペードのストレートフラッシュが揃っていた。

「これでさよさんは8連勝ですね」

「……なんで私勝てないんでしょうか」

「すごい楽しいですねっ！」

「それはさよさんだけだと思われませう。ああ、レオナルドさんもでしょうが」

「ははは。負けて楽しいわけ無いじゃないですか」

「そうですね。でもさよさんは強すぎです。神様が応援でもしてるのでしょうか」

「ですかねえ。刹那さんは何回で終了しましたっけ？」

「3戦目で終わったかと」

「絡繰さんそれ以上言わないでください。すごい傷つきます」

四人はレオナルドの提案で始まったポーカーで遊んでいたのだった。

結果はさよ以外の全員が全て取られて終了した。

「ばばぬき、大富豪、七並べ、ダウト、ポーカー。頭を使うゲームではレオナルドさんが。運のゲームではさよさんが全て勝ちましたね」

「いや、初めにやった大富豪は無いですよ。あれはさよさんがルールわかってなかったからです。ルールわかったとたんさよさんが勝ち始めたじゃないですか」

「ポーカーは運の方が強かったんですか？」

「一回目でロイヤルストレートフラッシュ揃ってたら勝てませんか。運のゲームでしょう」

「よくわかりませんが楽しかったです」

「そうですね、それはよかったです」

こうなるまでの説明。回想へ。

「これなんですか？」

魔法球で休憩中の相坂さんのこの言葉から始まったと思う。

「これはトランプですね」

「トランプ？」

相坂さんは知らないようだった。戦時にあったのかわからないしな。

「見たこと無いですか？」

「いえ、学級で見たことあるんですけど名前は知らなくて……」

「じゃあ今から説明しますよ」

ばばぬきのルールを説明中。

「……………という感じですかね」

「へえ、面白そうですね」

「まあ面白いでしょうけどやるには人がいないんですね」

「そうですか……………残念です」

「……………なら人集めて来ましょうか？」

「できるんですか？」

「外は……………だいたい朝の10時ごろかな。うん、大丈夫です。でも相坂さんの知らない人になるでしょうけど……………どうしますか？」

「ぜひ、お願いします!」

「わかりました」

そう言って立ち上がった。

その後二人を呼んでゲームを始めた。

勿論さよさんの事も説明したぜ。

その時なぜか知らんが名前で呼び合うようになったけど。

「しかし、レオナルドさんが敬語なのは不気味ですね」

「なにを言ってるんですか、私は敬語が基本ですよ」

「私は敬語しか聞いたことはないのですが」

「私입니다」

じい、と見つめられる。

どうやら二人は敬語じゃない状態の俺がみたいらしい。

「そんなに真剣に見ないでください。恥ずかしいです」

「だめですか？」

「何の話ですか？」

「……どうやら無理のようです」

「諦めた方が良いと思います」

諦めてくれたようだ。タメ口なんて親しい人にしかしないことを決めているんだよね。

三人が集まって話しているのを少し離れたところから眺める。

タイプの違う三人は仲が良くなったようだ。

計画通り進んでくれて助かる。新学期知り合いがない状態で始ま

るのは可哀想だからな。

「レオナルドさん！」

さよさんが話しかけてきた。

何か話し合っていたようだから三人で俺に何かするつもりなんだろう。

面白い。受けて立とうじゃないか。

「なんですか？ さよさん」

そう言って宣戦布告を聞く。

P r r r r r

P r r r r r

P i

「もしもし、アンデルセンですが」

『レオナルド君か？ わしじゃ、わし』

「俺に鳥類の知り合いは居ないはずだ」

『……近右衛門じゃ』

「で、なにかようですか？」

『今度の日曜日の夜、世界樹前広場に来て欲しいのじゃ』

「断ります。では」

『ま、待つんじゃ！ 刹那君がどうなってもいいのか！？』

「……あの子に何の関係がありますか？」

『刹那君は先日君を攻撃したじゃろう。だから罰せなければ他への示しがつかん』

「つまり、俺が行かなければ刹那は罰を受け、俺が行けば罰はなくなる。そういうわけですね」

『そつじゃな』

「行かなかった場合の罰は？」

『木乃香の護衛をやめてもらおうかと思つとる。周りに喧嘩を売るようじゃ護衛としてはだめじゃからな』

「そうですか」

『うむ、それで来てくれるかの？』

「……………行きましよう」

『そうか、そうか。良かったわい。あ、あと自己紹介もしていってくれ』

「わかりました。代わりに刹那の行動については他言無用で」

『あい、わかった。今度の日曜日世界樹前広場じゃぞ』

「ええ、わかりました。ああ、すみません。もう一度刹那の事は誰にも言わない、と言って貰えませんか？」

『疑つておるのか？ わしは言ったことを守るわい』

「なら、ちゃんともう一回言ってください。守るならこの程度簡単でしょっ…」

『むう……………わかった。“わしは刹那君の今回のことは誰にも話さん”……………これでいいじゃる』

「ええ、ありがとっございました。では日曜日」

P
i

14話（後書き）

二つ目です。

口常回。

手抜きじゃないよ。

さよさんすごい。運強すぎですよね。

ときどき俺がなにしたいのかわからなくなってくる。

15話

今日は麻帆良の細かい道を把握しに散歩へ行こうと思う。

今日は珍しくカソック姿です。この前シスター・シャークティがカソックで歩いてたからね。

自分も着てみることにした。これからよく着るつもりだからね。

街の路地を通っていく。所々に魔法陣を書き込みつつ進む。

全部を線で繋ぐとさらに魔法陣が出来るように書き込む。

薄暗い行き止まり。そこに最後の魔法陣を書き込む。

これで完成。街の造りが魔法陣に向いていたから他の町でやるより簡単にできた。

チヨークを倉庫にしまっ。

「……後は時が来るのを待つだけか」

踵を返し行き止まりから出て行く。

通りに出ると休みなだけあって人通りも激しかった。

バチカンも毎日人が訪れていた。バチカンでは案内をしたこともある。近頃行っていないから今年には行きたい。

バチカンの幻覚を見たところで現実へ意識を戻す。

この頃よく行っている世界樹へ向かうことにした。

世界樹はいつも通りそびえ立っていた。

天へ枝を伸ばし、葉は日の光を喰らい下の影を暗くしていた。

今日は快晴で雪は殆ど溶かされていた。

広葉樹のようなのに葉を落とさないのは何故だろう。気にはなるが

深く考えない。だってそういうものなのだから。両世界合わせても10本も無い植物なのだ。そして人工的に新しく育てようとしても枯れてしまう。そんなものを調べられるものか。わからないならわからないでいいのだ。人間に理解できるものではない。

そう結論づけて煙草を取り出す。赤いラインが入ったものだ。この頃は会う人が多かったから吸うことが少なくなっていた。人に迷惑をかけない、それが俺の喫煙者としての矜持だ。

世界樹の根に座る。歩きながら煙草を吸うのは好きじゃない。煙草を吸っているうちにぼんやりしてくる。

カチツと音が頭に響く。

この特別な煙草も俺のスイッチの一つである。

精神的なりセットのスイッチ。ストレスとか苛つきを30分かけてリセットする。そんな機能を作り出した。

リセットが始まると意識もぼんやりして来るから歩きながらも吸うことはできない。

世界樹の下で煙草を吸っていると黒髪が上ってきたのが見えた。

「あれ？ 近衛さん。急いでますね、どうかしました？」

「あ、レオナルドさんやん。いやちょっといろいろあってな」

「そうなんですか。でもその着物は素晴らしいですね。振袖でしたっけ？」

「あはは。うちにもわからんわ」

「ははは。わからないならしょうがないですね」

「そやなあ。ってこんなことしとる場合や無かった。どないしよ、このままじゃ捕まる……そや！ レオナルドさん、レオナルドさん」

「なんですか？ いろいろ悩んでたんですけど」

「レオナルドさん運動できる？」

「人並み以上には」

「なら、助けてーな。うち実は追いかけれとるんや」

「木乃香さまー!？」

「あかん。来てもーた。なあなあレオナルドさん」

「追いかけてるのには本当のようですね……良いですよ。手伝います。でも後でしっかり理由を聞きますからね」

「ほんま？ ありがとうー。理由は後で言うから今はどこかに逃がして欲しいんや」

「わかりました。……逃げるなら良いとこがあります」

そう言って木乃香をお姫さまだっこして空を跳んだ。

「すごかったわー。まさか空を跳べるとは思わなかった」

「ジャンプして着地してるだけです。難しいことじゃ無いですよ」

「そうなんか？」

「そうです、そうです」

俺と木乃香は逃げた後俺の家に来ていた。

衰えていたかと思っていたから強めに跳んだら予想以上に跳んでしまつてそのことを誤魔化している途中。

「でも、レオナルドさんけつこー大きな家持つてるんやな」

「一年程度居るつもりでしたから奮発してしまつて」

「うっかりさんなんやな。でもその神父さまみたいな格好似合つと

るな」

「こっちは副職なんですよ。あとこれはカソックっていうんです
「よ」

「そうなんや。初めて知った」

「知識が増えて良かったですね」

「そつやね」

「「……あははは！」「」

向かい合って座っているのだけど視線が合うことがない。……そう
言えば日本は目を合わせないんだっけ？

「うちの顔になんかついとる？」

「付いてませんよ」

「なら顔を見つめてたのはなんでなん？ 見つめられて恥ずかしい
わー」

「外国だと逆に顔見てないと怒られるんですけどね。土地が違つと
大変です」

二人で冗談を言い合う。意外と楽しい。

話しやすく話が弾む。

相手の話も聞いてるし此方の話も聞かせる。なんてことをやっている。

話の途中で説明してもらったのだがなんでも今日はお見合いだったらしい。

爺が勝手に決めたお見合いらしく自分はやりたくないとも言っていた。

「つまり、お見合いをしたくないんですね」

「あはは、レオナルドさん随分簡単にしてもうたな。まあその通りや」

「なら学園長に直談判しに行つては？ それでだめなら親に相談してみるとか。親に相談するならしっかりお見合いをしたくない、と伝えるんですよ」

「……うん。わかった。やってみるわ」

「頑張ってください。あと、直談判するとき断られたら『おじいちゃんなんか大っ嫌い！』って言ったらダメーシ食らうと思います」

「それはいいな。機会があったら試してみる」

そのあとも話は続いた。

ふと、時計を見る。

「もうすぐ4時ですが、ここにいてもいいんですか？」

「そつやな、寮の門限もあるしもう帰るわ」

「送り返りましょうか？」

「うん、お願いします」

……移動中……

「着きましたね。ではさようなら」

「ほな、またな。今日はありがとうな」

「いえいえ。この程度ならいくらでも良いですよ。では」

木乃香は手を振って見送ってくれた。

大和撫子って感じの美しさだった。似合ってるしね。新学期始まったら会えるでしょう。

木乃香は今日はお出かけたと思えば帰ってくると機嫌が良かった。

「木乃香ー、どうしたの？　すごい機嫌いいじゃない」

「今日はええことがあってな。アスナ聞いてくれる？」

「私で良いならいくらでも聞くわよ」

そう言うと木乃香は話し出した。

無理矢理やらされるところだったお見合いから助けしてくれた上対処方法まで教えてくれたらしい。

本当に良い人よね。前回もお金置いていつてくれたし。

「良かったじゃない、木乃香」

「うん。これからは休みが増やせるんや」

結局、夜まで話をしてくれた。

大変だったけど迷惑じゃなかった。

だって新しく担任になる人の性格ぐらい把握しておきたいじゃない。それになんとか懐かしい感じがするのよね。会ったこと無いはず何
だけど……。

まあ、いいわ！考えてもわからないし。

木乃香は新学期が楽しみそうだった。

15話（後書き）

最後です。

これで原作のあのシーンが無くなったぜ。
原作入りたいな。

これで書きだめ無くなりました。
次からは皆さんの意見などをもとに作り上げていこうと思います。
出来上がり次第投稿したいと思います。
一週間は投稿する事ないと思います。
意見を纏めるのにも時間がかかるしね。

16話

「ここが北端大絶壁か。……ふむふむ、毎年秋にはフリークライミング部が大会を開く。……それでいいのか、麻帆良」

俺はとつても心配だよ。

やれることは大概終わり暇になっていた俺はパンフレット片手に図書館島を歩いていた。

一応敵対組織の俺がここに来て騒がれるのも嫌だったから来なかったけど

「良いところだね。珍しい本もあるし」

近くの本棚から一冊取り出す。

『不忍忍法 教本』

アウトか？一応セーフだな。
表紙をめくる。

『左右田 右衛門左衛門』

「アウトオ！」

全然セーフではなかった。

元の場所へ戻す。

「読まなかった方が良かったか？……ん？」

戦闘教本の横に古そうな本があった。

興味を持ち手に取る。表紙にはなにも書かれていない。表紙の次のページを見る。

そこには……

『虚刀流 四季崎記紀』

「もっとアウトじゃねえか！」

今度は地面にたたきつけた後悔はしていない。でも拾う。

「どうしよう……」

ここに置いておくには惜しかった。

なので懐へ入れる。こんど誰かに渡してみよう。

見られてないか見回す。……よし、誰もいないな。

ついでに不忍家の本も借りる。盗みじゃないぜ？無断で死ぬまで借りるだけだ。

死んだ後家族が返しに来るがわからないけど。

入り込んだ時と変わらない動きで歩く。
カソックの中は術式で影の倉庫に繋がってるから借りた本が見つかることはない。

「深部まで行ってみようかな。ここにこんなものあるならもっとい本あるかも」

言葉にしてから少し迷うが止めとくことにした。
いちいち何してたか、なんて聞かれたくない。
今も監視がされてるし。感覚的に魔法だと思う。学園長だな。

「……鬱陶しいな」

対魔障壁を強くする。千里眼の魔法（仮）は耐えきれなくなって消えた。

「これでいいかな？」

立ち止まり五秒ほど待つが動きはない。
監視は千里眼の魔法（仮）だけだったようだ。

「さて、どこに行こうか」

このまま、図書館島で探検するのも良いかもしれない。
下におり無くても面白い本も有るだろう。

「とりあえずここを一周して本を探すか」

夜にも用事があるが間に合うだろう。

障壁を弱め次のエリアへ向かった。

独り言ばかりだけど気にしてくれるなよ。

「まさか魔導書が置いてあるとは……麻帆良恐るべし」

学生でも来れる場所に魔導書があった。

魔力を発生させてる物だからびっくりした。

結構上級の魔導書で原典のようだ。かなり狂気が染み込んでいる。

魔法使いは価値がわかってないな。世の中の魔術師がどれだけ金出

すかわからないほどの本なのに。
これを書いた魔術師は隠蔽が得意だったようだ。
俺でも解析するのに時間がかかった。

……解析の結果、どうやら魔力を吸収し本に書かれた術式を発動させるものらしい。

中は初めの三十頁以降は白紙になっているから不良品と思われるでしょうがないかもしれない。

この本に魔力を与え術式を書き込まなければ発動しないので魔術師でも気づかないかも。

もちろんこれは頂いていく。一生返さない。死んでも返さない。
顔に笑みが浮かぶ。俺にちょうどいい本だな。

影の倉庫にしまう。帰ったら術式を書き込んでしまおう。五百頁はあつたから十分だ。

さらに奥の方へ歩いていく。

下へは行かない。造物主を封印している魔法使い《ロリコン》には会いたくない。

本棚の間をすり抜けていくと広い空間へ出てしまった。

どうやら一周したようだ。あれ以外に目新しい本はなかった。どれももうすでに持っている物の写本だった。詳しくは写本の写本の写本。神秘なんてかなり薄くなってしまっている。そんなもの実用に向かない。

本棚の間から出ようとすると横の梯子がギシギシと鳴った。

「えーと……これはこっでー……これはこっちでー」

少女が梯子のかなり上の方で本の返却をしていた。すぐに目をそらす。他の人が来る可能性を考えないのだろうか。見えそうだった。

手には本を数冊持つていて非常に危ない。バランスを崩して倒れたらどうするつもりだろうか。

今考えるとそんなことを考えたのがフラグだったのだと思ってしまう。

「あっ」

少女はバランスを崩して落ちてきた。

落ちるとき本を掴んだのか一緒に本も落ちてきている。

避けられないよな……。本だけなら避けたのに。

受け止めるために膝を曲げ衝撃にそなえる。

「ふんっ！」「きゃっ……」

少女を受け止めると対物障壁を軽く発動する。

完全に発動して体に当たる前に弾く方法もあるが、怪我が無いのはおかしいだろう。

いまさら？ 気にするなよ。

本棚が傾いたのか落ちてくる本も予想以上に多かった。

少女に当たらないように体で壁を作る。

後頭部に当たることもあるが痛くなかった。

物が落ちる音が止まった。埃が舞って息が辛い。ゆっくり目を開ける。辺りは本が散乱していた。

少女の無事を確認する。怪我はしていないが目を閉じ体を丸めていて、まるで小動物のようだった。

「大丈夫ですか？」

声をかける。……前髪長いな。邪魔じゃないのか？
今は辛うじて目が見えているが立ったら見えなくなるだろう。
可愛いのかな。もったいない。

「？ ……………？」

少女は少し動き出す。目を開け、丸めていた体を伸ばした。

「え？」

少女は俺を見て驚いていた。まあ俺のこと気づいてなかったみたいだし、しょうがないかな。

「あ、え？」

顔が赤くなったり青くなったりしていく。どうした？なんかしたか？

「どうかしましたか？」

「あ、う きゅう」

意味のある言葉を話す前に気を失ってしまった。

……マジどうしろと？経験無いから困るよ？

気を失った少女の扱いに困ってっていると横の本による壁が壊された。

「ねえ、木乃香？ 私ついてきても良かったの？」

麻帆良にある図書館島の下のところから上がってくるときにそう聞いた。

木乃香は部活をここでやっているから良いかもしれないが部外者の私がここの奥に入ってもいいのかしら。

「ええんよ。何らやましいことはないんや。堂々としよ」

木乃香は即答でそう答えた。

手伝うと言った手前途中で逃げる訳にはいかない。

「良いつて言うけどさ……まあ怒られたら謝ればいいか」

うん、怒られるのはイヤだけどわかってくれるわよね。

「次はここを右やな」

「ちょっと、木乃香速いってば」

足取り軽い木乃香の後を追いかける。

が、すぐにぶつかる。

木乃香は立ち止まってまっすぐどこかを見ていた。

「どづしたの？ なにかあった？」

「……明日菜、あれ、レオナルドさんやない？」

「え？ どづどづ？」

木乃香の横に立ち木乃香の指差す方を見る。

そこにはなんだか黒いコートみたいな服装をしたレオナルドさんがいた？

あの黒いの見たことあるような……

「ほんとね。なにしてるんだろ。ん？ ……本屋ちゃんがレオナルドさんの向かう先にいない？」

「ほんまやね。本屋ちゃんは借りてた本返しとるんやろ」

レオナルドさんはどんどん進んでいく。

「どづする？ 話しかけに行く？ そこまで遠くないし」

「うーん……行ってみよか。昨日のお礼もしたいんや」

「じゃあ行きますか。道わかる？ いっそ本棚の上走ってもいいんだけど」

「わかるからそれやらんといてな」

「わ、わかったわ」

本棚の上を走ると言ったとき木乃香の雰囲気は怖くなった。なんでだろ、後ずさつてしまう。

あ、思い出した。美空ちゃんがいた教会の神父さんがあんな格好してた。じゃあレオナルドさんも神父？いまいちよくわからないなあ。

レオナルドさんの素性を考えながら階段を下りる。下に到着したとき何かが連続で落ちる音がした。なんだか悪いことが起きた気がした。

「木乃香！」

木乃香を呼ぶ。木乃香は頷き走り出した。私も後を追う。

音は本屋ちゃんが居た方から聞こえた。

もしも本屋ちゃんの居たところだったら本屋ちゃんが危ない。

全力で走る。そして本屋ちゃんが居たあたりに来たら本で壁が出来ていた。

「……………これはどうしたらいいのかしら」

「そつやなあ……」

困ってしまった。山となっている本は二人でどけれるほど少ないのだ。

「困ったわね……」

「明日菜。これ蹴り飛ばせる？」

「え？ 蹴ってもいいの？」

「まあ、非常事態なんやから許してくれる……といいなあ」

「その希望が入った答え方は不安になるからやめて。……でも非常事態なんだから」

「やつちやえ」

「うん、やるわ」

覚悟を決め距離をとる。そこから助走し跳んだ。

「ライダーア……キック！」

壁になっていた本はぶっ飛ぶ。

壁後崩れるとそこには本屋ちゃんと本屋ちゃんを抱きしめたレオナルドさんがいた。

「あれ？ 明日菜さん？」

「あ」

「あ？」

「あ、あ、あなたは……あなたはなにしてるのよ！」

思いっきりレオナルドさんの顔をぶん殴った。

本屋ちゃんをだっこしたまま飛んでいく。

……ふう。あれ？私なにしてるんだろ？

「うう……あたしなにしてるんだろ」

「明日菜、もういいやん。レオナルドさんも許してくれたやろ」

「で、でも私殴っちゃったのよ？ そんな簡単に許してくれる訳ないじゃない。きっと本当はまだ怒ってるのよ」

あの後我に戻ってレオナルドさんと本屋ちゃんを救護室につれていった。

本屋ちゃんは問題なかったけどレオナルドさんは私のせいで頭を打っていた。

頭を打っただけで問題はなかったらしい。

「明日から新学期なのよ？毎日レオナルドさんと会うじゃない。…不登校になろうかしら」

「明日菜。休んじゃめっ！やで。また明日話しかけてみれば良いやん」

「……どうしよう」

明日、学校行きづらいなあ。

16話（後書き）

久しぶりに投稿した春秋です。

結局意見は一つしかいたただけませんでしたか
頑張りました。

主人公の性格に関してはどうしようも無いのでご了承ください。

感想、意見、評価お待ちしております。

閑話巻（前書き）

未来の出来事です。

詳細は気にしないでください。

閑話巻

そこは魔法世界のどこかにある小さな研究所の一室。

「くそっ！　なぜだ！　なぜなんだ！」

部屋にいた男の一人が拳を机にたたきつける。

周りにいた複数の研究者たちも絶望感を露わにしていた。

「なんで……なんで……」

ここでは一際おかしな物の研究をしていた。

世界樹について、ゲートの仕組みや誰が作ったのか、ケルベラス・クロス・イーターについて、気や魔力の効率化、竜種の魔力障壁の展開方法、土地ごとの犯罪数、などなど。

役に立つ研究もあつたし、役に立たない研究もあつた。

だが、今回は今までと違っていた。

ここでは研究者がそれぞれに意見を出しその中から研究する物を決めるのだが、今回はほかの物についての研究途中に一人の研究者が呟いたことから始まった。

これが今までと違うところ一つ目

二つ目は研究が全く進まないのだ。今までは完全に解き明かせなかった物もあるが、ある程度までは進めていた。

だが今回ははじめの段階でつまづいたのだ。
どの種類の生物なのか、それがわからなかった。

研究者たちは頑張った。

とある筋から対象のDNAを買い取ったり（途中からは匿名で毎月髪の手などが送られてきた）、周囲の人間に話を聞いてみたり（比較的積極的に話を聞かせてくれた）、だがそれでもまだわからない。

「なんでコノエコノエモンの種類がわからないのだっ！」

そう、ここでは麻帆良学園学園長及び関東魔法協会理事、近衛近右衛門の研究をしていた。

「わからない、わからない、なぜ人のようなDNAなのにあのよう
な頭になるのだ」

そこが一番の不思議だった。

旧世界で手に入れた近右衛門の娘とされる女性の頭は普通だった。

英雄『青山詠春』と近右衛門の娘との間に出来た子供も頭は普通だった。

そのほかの近衛家の一族の者の写真を見ても頭は普通だった。
なのになぜ近右衛門はあんな頭なのだ？

さらに不可解なことがあった。

近右衛門は麻帆良学園創立時にも居た、と記録にはある。
だが麻帆良学園創立は明治維新後すぐに有ったはずなのだ。

二百年生きられる人間は居ない。

上の理由から魔法世界の生き物かとも考えたが魔法世界の生き物は旧世界へは行けない。

いろんな想定をし、いろんな研究をしたが『突然変異種』とするのが今のところ研究者たちの共通の意見となっていた。

「くそっ……このまま研究を終えてもいいのか？」

「主任！ 主任！」

「ん？ なんだ新入り」

「新しい可能性をみつけました！」

「なんだと！ それはいったい何なのだ！」

「これです！」

走ってやってきた新入りが見せたのは二つの文献。

「『ぬらりひよん』に『仙人』？ なんだこれは？」

「これらは二つとも旧世界の極東と呼ばれる地域に生息していたと言われる生物です」

新入りが持つてきたのはどちらも頭の長い老人が描かれた文献だった。

「『ぬらりひよん』は誰にも不自然に思われないまま人の家で好き勝手する妖怪と呼ばれる種類の生物です。『仙人』は詳しくは文献に書いてありますが霞を食べ、何千年生きる元人間です。どちらも人のようなものでありながら何百年と生きます」

「それはすごい！ この生物と考えればその正体がわかるかもしれない！

……だがなぜ我らはこれを発見できなかったのだろうか」

「それはこれ自体倉庫の奥深くにありましたし、旧世界の生き物だったからでは？」

「確かにその可能性が高いな。よし、お前ら今からこれら二つの情報を集める！ すぐにだ！ これでこの研究も解明出来るかも知れん！」

うなだれていた研究者たちは元気を取り戻し情報を集め始める。

一部の旧世界出身者は旧世界で情報集めをするために研究所を飛び出した。

「さて、わしも頑張るか。新入りも頑張ったのだ年長者が頑張らなくってどうする」

「えっ？　なんでバレて……？」

「目のところに隈ができてくる。わしの目は誤魔化せんよ」

新入りの目の下には凄い隈が出来ていた。
体もふらふらしている。

「眠つとれ。あとはわしらが頑張るわい」

「……はい」

新入りは近くにあったソファへ倒れ込んだ。
すでに意識は無いようだ。
主任は着ていた白衣をかける。

「全く、こんなになるまで頑張るよって……」

その時の主任の顔はとても優しかった。

五年後、メガロメセンブリアで結婚式が開かれた。

小さな教会で開かれた結婚式には英雄である近衛詠春も訪れ、神父役には時の有名人、レオナルド・アンデルセンがやっていた。

その時のことを研究所の副主任出会った男性はこう話す。

『二十年も付き合いがあるが、あそこまで幸せそうな主任は初めて見たよ。まさかあの新入りと結婚式するとは思ってもみなかった。

まあ長命種だったから相手も長命種でよかったと思うよ。外見的に言えば五歳くらいしか違わなかったからね。

自分から言えることなんてこの程度さ。あとは本人達に聞いてくれ。二人に末永き幸せがありますように』

研究所ラブストーリー

『あなたに恋して』

絶対に公開されない！

閑話巻（後書き）

題名とかについてはなにも言わないでください。
センス無いことはわかっています。

皆さん読んでくれてありがとうございます。

17話（前書き）

すみません。遅れました。

少々おかしな点があるかも知れませんが
学園結界とご都合主義のせいだと思ってください。

17話

静かに夜道を一人で歩く。向かうは世界樹前広場。そこで俺を待っているらしい。

今は午前0時頃。本来なら家でゆったりしている時間だった。階段を上がる。既に人払いの結界がしてあった。

「ふおっふおっふお。時間ぴったりじゃのう」

「約束は守りますよ。約束はね」

爺の細長い頭が見えて苛立つ。

爺の横にはいろんな年の魔法使いが揃っていた。

「今日は自己紹介すればいいんですけどっけ？」

「うむ、では早速自己紹介してくれんかの？」

爺が俺に促す。

……苛つく顔だ。全て自分の思い通りになるとでも思ってるそうだ。

「では、初めまして麻帆良の魔法先生、魔法生徒の皆さん。

私は法王庁所属のレオナルド・アンデルセンと言います。
ウァチカン

ここへは卒業課題として教師をするために来ました。

いつまでいるかわかりませんがよろしく願います」

笑顔で丁寧にお辞儀をする。

面倒くさい。ここに来て一番面倒くさい。

これならどっかの魔術師の家を襲撃する方が楽だ。

周りの奴らはなにを慌てているのかうるさかった。

…… ああ、^{ヴァチカン}法王庁所属と言いつつたところか？

周りの奴らも高畑と同じか？

「ふむ、少し問題があるが……まあいいわい。次にレオナルド君には模擬戦を」「断ります」「ふお!？」

「なんでそんなことしなければいけないんですか？ 約束は時間と場所、あとは自己紹介するだけでしたよね？」

「わしはちゃんと話したぞい」

「聞いてません。ふざけないでください」

「じゃが、ここまで来たんじゃ。模擬戦してもあいと思わんか？」

「思いませんね。だいたい普段から武器を持ち歩いているとでも？ 私はそのままで物騒な人間ではありませんよ」

「じゃがのう……」

爺はまだごねてくる。本当に面倒くさい。

いい加減にしてくれ、と言いたい。

刹那たちの方を盗み見る。

マナは笑っているし、刹那は不満そうな顔をしていた。

嘘つきとでも言いたいのかな？ 私の時は取り出してたじゃないか、みたいな感じか。

「すみません、学園長先生。発言しても？」

「む、ガンドルフィーニ君。なんじゃ？」

「私は新しい警備員のメンバー紹介と聞いていたのですが……どういふことが聞いてもよろしいですか？」

おいおい。初めに俺は断ったはずなんだが。外堀から埋めよう、ってか？

手が甘かったな。ぬるま湯につかりすぎてボケたか。

ここで追い討ちをかける。

「私は聞いていませんが？ 自己紹介するだけと聞いていたのですか？ それに警備については前に断ったでしょう？」

魔法関係者たちは一斉に学園長を見る。いい気味だ。驕っているからそんなことになるんだ。

「なぜ警備に参加しないのですか？立派な魔法使いを目指しているならば参加するべきです」

マギステル・マギ

若い女の声がする。俺には誰だかわからないがここにいる皆はわかるようだ。皆がそちらをみる。

「高音君かね」

爺が名前を言ったのは金髪の女子生徒だった。

お嬢様ってかんじだね。隣にいる赤髪の子はおろおろしてる。

あ、爺が勝ち誇った顔してやがる。銃剣と黒鍵で針鼠にしたい。

「聞かれておるがそここのところはどんなのじゃ？」

髭や眉で見えにくいけどにやにやしてやがる。ほんと苛つくな。人間相手にここまで苛ついたのは初めてだ。

「そうですね。ではガンドルフィーニ先生……でしたよね？」

「ああ、それであっている」

「では、ガンドルフィーニ先生。あなたは教師と警備員をしているのですよね？」

「確かに」

「その二つを両立するのは大変ではありませんか？」

「それは大変だがこの学園を守っているのだ。嫌ではない」

「はは、人として素晴らしいですね。まあ、今重要なのは両立が大変である、という点なのです」

「なにが言いたいのじゃ？」

ここまで言ってるのにわからないのかよ。本当にこの学園大丈夫か？

「急かさないでくださいよ。先ほどガンドルフィーニ先生は両立が大変と言われました。

おそらく教師歴も長いのでしょう。新入りの人は発言をひかえるでしょうから。

教師としての何年もやってきた人が大変と言ってるのに数ヶ月前にいきなり教師をやれと言われた人間が警備と仕事を両立出来るでしょうか」

爺を見て次に周りの関係者も見ていく。

大概の人は深くうなずいていた。

「出来るじゃろう。ここにいる魔法先生は全員がこなしておった」

「ならば周りの魔法先生に聞きます。新人のころ業務が遅れたり、寝不足で授業が上手くできなかつたりしませんでしたか？ または警備中に大怪我をしたような人はいませんか？」

また魔法先生を見る。苦い顔をしている人や悔しそうな人が多かった。昔の自分を思い出しているのだろう。

「それが警備することなんの関係がある！？ そんなこと問題ではないじゃろう！」

爺が前に出てきて口を挟んでくる。いちいち煩い爺だ。人を待てるのか？

はあ……と大きいため息をしてやる。

魔法先生の責めるような目が爺に集中する。

ほんと呆れてしまう。

「学園長、あなた大丈夫ですか？ あなたは教育を手抜きでやって問題ない、と言ってるようなものですよ。しかも最後の台詞は教育者としては失格の言葉ですし、組織の長としても最悪ですよ」

その言葉で気づいたのか、爺は後ろを向く。

魔法関係者の目に含まれているのは主に侮蔑に呆れ、怒りだった。駒扱いされれば誰でも怒るし、ここまで気づいてなかったならば呆れもするし馬鹿にもする。

データには昔の輝かしい栄光が書かれていたが……あり得ないな。馬鹿を相手にしていたのか、衰えたのか。きつと前者だろう。経験があるならば今日のような馬鹿な真似はしないだろう。

「私は人の将来に関わる仕事をするのです。やるならば全力でやりたいと思っています。ですので私は警備をやりたくありません。では、私はこれで失礼します。長々と聞いていただきありがとうございました」

頭を下げる。いままで麻帆良の防衛を頑張ってきた人達なのだ。尊敬している。爺は論外だが。

「まつ、待つん「君の考えはよくわかったよ。真面目で良いことだ。これから頑張ってくれ」」

「はい、精一杯全力で頑張らせていただきます。では」

もう一度お辞儀をする。頭を上げ懐から転移魔法符を取り出した。爺はなにか言いたそうだったが周りの空気のせいでも言えない。下に魔法陣が出てくる。そして魔法陣は光を発して発動した。

一瞬で家の寝室につく。

眠かった俺はカソックも脱がずベッドへ倒れ込む。面倒だった。だけど基本魔法使いが真面目で良かったよ。

言ったことはすべて本当で嘘ではなかったから簡単に信じてくれた
し。
あとは良好な関係を築いていきたいね。

17話（後書き）

いやー、大変でした。

先週は土曜日も出校だったし。

俺は休みの間に纏めて書いているのですがその休みが少なかつたから遅れてしまいました。

あと、100000pv突破時の閑話は原作に入れるところまで進んでからにします。

今回は魔法関係者を味方にする回ですね。

多量のご都合主義と隠し味に作者の都合が入っています。

次の投稿はいつになるかわかりませんが温かい目で見守りください。

感想、意見、評価。

お待ちしております。どしどしください。

閑話貳(前書き)

総合評価 400pt

お気に入り登録 165件

p v 120144

ユニーク 14300

突破記念です。

ゆっくり読んでいってね！

閑話貳

ワシとレオとの出逢いはワシが古巣である第13課イスカリオテに訪れたことから始まる。

「これは、これは法皇様ではありませんか。こんな殺戮者の家に何のようですかな」

当時機関長を始めて14年目のヴァン・マルクスが出迎えてくれる。ワシが法皇に選ばれた年になったからよく覚えていた。
……しかし殺戮者の家とは皮肉るのう。

「はじめから知っていたくせによく言うわい。それにワシが此処にいたことを知って殺戮者の家なんて言っておるのか？ ん？」

「まさか！ そんなことありませんよ。少しばかり法皇様が来られてはしゃぎすぎたようで口が変なことを言ってしまった。御無礼お許しを」

相変わらず嫌な奴じゃった。

「まあいいわい。アンデルセンはどこにおる？ 久しぶりに動こうと思ってきたのじゃが……」

辺りを見回す。いつもならアンデルセンも一緒に来ているはずなのだが姿は見えない。

さらに他の機関員も見当たらない。

「アンデルセンでしたら中庭で稽古をつけていますよ。暇な機関員は見物しに行っています」

「アンデルセンが稽古？ それは本当のことか？」

「ええ。嘘なんて吐いてどうします。嘘を吐く価値もない情報です」

自分には半ば信じられなかった。今までも聞いた情報だったが信じていなかったのだ。

大体アンデルセンが弟子にするほどの素質がある者が居なかったのだ。容易く信じられるわけがなかった。

情報の真偽を確かめるために行くことにした。

「まさかのう……」

目の前には異様な光景が見えていた。

銃剣を巧みに操り攻撃をいなしていく金髪の男　アンデルセン。

こちらはいつも通りだった。しかし相手をしている者が異様だったのだ。

アンデルセンと同じく銃剣を操り斬りかかり、投擲する。さらには拳銃まで使って戦っているのは綺麗な金髪の　五、六歳にしか見えない少年だった。

「　レオナルド・アンデルセン、5歳。旧名レオ・スプリングフィールド。魔法世界の英雄、ナギ・スプリングフィールドの長男ですな」

「　なっ……!」

歳だけでも異常なのにあの『ナギ・スプリングフィールド』の息子が第13課イスカリオテに居ることが異常であった。

それにそんな諸刃の剣をこのヴァン・マルクスが所持していることが一番の異常だった。

「機関員一年目の新人ですが、あの銃剣がパヨネット一から育て上げた銃剣のパヨネット後継です。

実戦経験も積ませましたし、人を殺すことにも慣れさせました。化物フリの弱点なども詰め込みました。現状では上の下と言ったところでしょうか」

「……………」

吃驚して物もいえなかった。先ほどヴァンが言った言葉にもだが少年の目が異常だった。

地獄の穴を覗いているような、そんな不気味な目だった。見ているだけでこちらの全てが見抜かれているような、そんな気持ち。

嫌悪感はわかかなかった。嫉妬もなかった。

ただ素晴らしい。

そんな気持ちしかわかかなかった。

全てが異常で出来ている正真正銘のバケモノ。

目を見るだけで読みとれる。

全てを一つに賭ける。一回で負けか勝ちが決まる生き方。異常としか言いようがない。

だがそれこそが強者に近づく一番近い道なのだ。

自分が成し遂げることの出来なかった道をこの少年はこの歳で成し遂げているのだ。

素晴らしいとしか思えなかった。

ちょうど稽古が終わったのを見てワシは歩き出した。途中で顔も取り繕う事もなくそのままの顔で進んでいく。

少年との距離が5mのところまで二人ともがこちらに気づく。がそんなこと関係ない。

少年の前に膝を突いて視線を合わせる。

「え、と。なんでしょうか」

少年は慌てているようだ。何故だろうか。

ああ、ワシは法皇だったか。

だがそんなことどうでもいい。

「少年よ。何故ここまで自らを磨き上げる。何故力を欲する」

「
」

いつの間にか静かになっていた中庭で少年に聞く。
誤魔化されることも嘘を吐かれることも考えつかなかった。

「俺は
」

「ふむ」

「石となった村人家族を助けたい。村人家族を石にした悪魔に復讐した
い」

「ほつ……」

似ていた。ワシとそっくりだった。

始まりは同じなのに此処まで違った。

才能もあるが気持ちの強さも違うのだろう。

ワシは逃避という生き方を知っていたが、この少年は知らない。故に愚直に進み続けることが出来る。

「ワシにも弟子入りせんか？ もっとほかの物も教えてやろう」

少年は逡巡なく頷いた。

「こんな感じじゃったかのう?」

「そんな感じでしたね。今思えば懐かしいです」

二人はヴァチカンにある小さなテラスで紅茶を飲んでいた。

「で、明日出発じゃったか?」

「ええ、今までお世話になりました。ちょっと停滞してきます」

「ふむ。一休憩入れることも必要じゃて」

「ははっ。その通りですね」

レオナルドが立ち上がる。

「では」

「また元気で会おう」

レオナルドは後ろを振り向くことなく進んでいった。

「レオはどこまで行くんじゃないかな……」

法皇の独り言は誰も聞くことなく空気にとけていった。

閑話弐（後書き）

こんな話が多い春秋です。

読んでいただきありがとうございます。

閑話はまた出します。

いつになるかはわかりませんが。

18話(前書き)

遅れてマジすいませんでした。

部活が忙しかったんです。あと学校も。中間テストがありましたね。

18話

学園長ロロリンのいる学園長室へ向かう。

昨日のあの後学園長は逃げたらしい。

朝、シスター・シャークティが教えてくれた。

麻帆良の魔法関係者からの評価が下がりがりまくってるって。

あの流れだったらどうしようもない気もするけどね。

学園長室のドアをノックする。

知ってるか？正式には四回ノックしなきゃいけないんだぜ。二回はトイレだそうさ。

……え？知ってる。あ、そう。良かったね。

「失礼します」

部屋の中から殺気が漏れてくる。

感じの違う殺気が二つ。この感じは高畑と爺だろう。

あれぐらいで怒るなよ。原因はお前だろ。

扉を開ける。遮るものが無くなって殺気が直接当たってきた。

二人は鬼の形相だ。気持ち悪い。

「よく来れたのう」

さらに殺気を強めてくる。

だが普通の魔法使いよりは上程度。親父に比べれば雲泥の差だ。

気にすることもない。

「来なければ仕事が出来ないでしょう？ 社会人ならばそのあたりはしっかりしないと。」

これで挨拶も済んだので行かせてもらえますか？」

「ふん、わかったわい。高畑君」

「はい」

爺の横にいた高畑が前に出てくる。

こいつからも殺気がでている。……なんでこんな怒ってるの？

「ところでレオナルド君」

「ん？ なんですか？」

「わしに呪いをかけたか？」

「あ、はい。かけましたね」

「「 なっ!?!? 」」

そのことで怒ってたのかよ。つまらんな。

むしろガキ相手に脅しにかかる爺の方に怒るべきだろ。

「学園長、早くしてくれませんか？ この程度のことです生徒待たせたりいけないでしょう」

「この程度、だと……！」

「この程度ですよ高畑先生。ただか一部のことを話せなくしただけでしょうが。解けないわけでもあるまいし。良い年した男がごちやごちやとつるさいですよ」

「貴様　！」

高畑が掴みかかってくる。本当にこいつ強いのか？ 隙だらけだ。思わず串刺しにしてしまいそうになるそのとき扉がノックされる。

「2-Aの神楽坂です。高畑先生は　」

開けながら言われる声にびっくりする。彼女に見られる前に銃剣をしまう。

「居られますか、って。え？」

彼女の動きが止まる。

そりゃ自分の担任が人に掴みかかってたら驚くよな。

「あ、いや、何でもないんだ、気にしないでくれ明日菜君」

「……はい」

俺のカソックから手を離し誤魔化す。

彼女は困惑している。高畑と俺に対して。

……あれえ？何かあったっけ？

高畑に関してはわかるけどさ。良い人の振りしてるらしいし。

何があったかな？

考える。考える。思いつく。

もしかしてまだ図書館島の事気にしてるのか？別にいいのに。

「神楽坂さん、先に行つといてくれませんか？

もうすぐ予鈴がなると思いますんで」

「そ、そうだね。行つといてほしいな」

「は、はい。私は先に……」

「また後で会いましょう」

逃げるように走り去っていく。

高畑から俺からかはわからない。俺ではないことを祈る。

「学園長、俺も行かせてもらいます」

「……行けば良からう」

「ええ、では」

用事もなくなったので2 - Aへ向かう。
出るときも殺気が当たっていたが気にしなかった。

「ここが、2 - Aですか」

扉の前にたつ。何か仕掛けてあるかと思っていたが何もなかった。
新田先生から聞いていて楽しみにしていたのに。

残念だが今度に期待することにして扉を開いた。
騒がしかったクラスが静かになる。
基本騒がしい方が好きだがこんな時なら静かな方がいい。

そのまま教卓へ進む。……何もなかった。罨のこと少しは期待してたのに。

何のアクシデントもないまま教卓へついてしまった。
困ったな。面白いこと考えてないや。
前に目を向けるとさよさんが手を振ってくる。
クラスにとけ込めてるかな。

「すみませんが……」

「なんですか？」

「あなたは誰ですか？」

金髪のお嬢様って感じの女の子が聞いてくる。
食後に紅茶でも飲んでるようなタイプ。
時計塔にいたあの子思い出すな。名前知らないけど。
貴族って思ってくれればいいよ。でも吸血姫とは違うね。うん。
おっと質問されてるんだった。

「私は今度から高畑先生の代わりにここの担任になった者です」

「高畑先生はどうしたんですか？」

再度静かになり後ろを向いていた生徒も前を向く。

「一時限目の歴史は俺の担当なんです……授業をするか俺と皆さんとの話し合いの場にするか、どちらが良いですか？」

「……………話し合いで……!」「……………」

「でも、話し合いにすると次から授業の早さが1・5倍くらいになりますかどうします?」

皆は話し合いを始めた。

話し合いの件だが前任の先生は少し教え方が下手だったようで遅れている。

他のクラスの場合は遅れていないようなのでこのクラスが例外なんだろう。

話通りうるさいし。

キーンコーンカーンコーン……

授業が始まった。

もともと休憩の時間にやってたしね。

「みなさん決まりましたか？」

「話し合いがいいです!」「わたしも!」「私は授業やってほし

いかな」「話し合いでしょ！」

「では話し合いにしますね」

「「「「「「はい」「」「」「」

「では、私に質問してください。ただし、代表者を決めてください
ね。聖徳太子のような真似は出来ませんから」

「じゃあ、私が代表やるよ！」

パイナップルみたいな頭の少女が出てくる。
たしか朝倉だったか。

「みんな集まって質問を決めてくださいね」

ほとんどの生徒が中央に集まり話し出した。

一部の生徒は集まってないな。

眼鏡の子とか刹那とかマナとかさよさんとか魔族とか幼女とか
さよさんは金曜に入ったからいまいちとけ込めてないのかな？

「じゃあ、レオナルド先生！ 質問始めるよ」

「あ、はい。いいですよ。どんどん質問してください！」

さよさんの心配してるうちにまとまったようだった。
よし、なるべく答えてやんよ！

「一つ目の質問は、なんで神父の服着てるの？
これはみんなからの質問だよ」

「着慣れてるからです。詳しくは兼業です」

「それって、いいの？」

「いけませんよ。だから皆さん真似しないでくださいね」

「ツッコミどころだけど次行くね。」

「二つ目は好きな人はいますか？」

「いますよ」

「それってどんな人！？」

触角の付いた少女が立ち上がる。答えようか、どうしようか。

困ったが俺の勘がいいことにはならないと叫んでいるので拒否することにする。

「言いたくないです」

「え、教えてほしいな」

「嫌だな」

「どうしても？」

「どうしてもです」

「絶対？」

「しつこいぞ、害虫もどき。その触角引きちぎってやるつか」

「ひどっ!？」

「うん。答えてくれないみたいだから聞きたいけど時間がないから次行くね。」

「趣味は？」

「ちよっ、朝倉」

「遺跡巡りと睡眠と読書ですね」

「無視？ 無視？」

「遺跡つてどのなの？」「どんな本読むんですか」

「どんなのもです。お勧めできない趣味ですが。本にしてみてもいいものあります。ファンタジーとか夢がありますよね」

「へえ。じゃあ次は」

「……もういいよ」

この話し合いの場は授業が終わるまで続いた。

害虫もどきの落ち込みはすぐに元に戻った。

途中で戦えるのか、なんて質問が出たけどなんでだろうか。一般人の振りしてるのに。

潜入捜査なんてこともするので必要なスキルでもある。

こんな感じの先生一日目でした。

18話（後書き）

漸く教師が始まりましたね。

17話もかかってしまった。流れが遅すぎるのだろうか？
とりあえずこれからもよろしくお願いします。

誤字、意見、感想お待ちしています。

是非感想を書いてください。

それが作者の活力となります。

19話(前書き)

どうも遅れました。

アニメが、アニメが悪いんだ！

珍しくちょっと長いです。

あとこんどから週1投稿になるかも。

「ふう……ようやく終わった」

朝やり残した仕事をやっていたレオナルドです。

ようやく仕事が終わった。

新田先生などの先生方の手を借りながらやったが13課の頃と比べてつらく感じる。

「ようやく終わったん？ 先生って大変なんやな」

「そうです。教職は大変なんです。わかったら新田先生にも迷惑かけないようにならばいいけませんよ」

「あはは。それはクラスのみんなに言ってほしいわ」

「無理って事わかってますから言いませんよ」

途中からずっと隣にいた木乃香さんと話す。

終礼後にやってきてずっと待っていた。

「じゃあ2・Aに行きましょうか。そのために待ってたんですよね」

「そつなんやけど行きながらでええからうちの話聞いてくれる？」

「いいですよ」

職員室を出て2 - Aへ向かう。少し遠回りをして時間を稼いだ。

木乃香さんの話を纏めると、刹那と俺が仲良く歩いているのを見失ってしまった。刹那とは昔仲が良かったのだが今は刹那から避けられている。

もしも仲がよいのならば仲直りの手伝いをしてほしい。

うん、理由知ってるから難しいな。

でも手伝おう。お節介が好きなんだよ。

「そんな簡単なことならいいですよ。私は刹那を説得したりすればいいんですよ」

「うん、ありがとな。ホントならうちだけでやるべきなんやろうけど……」

「自分に出来ないことは他人に頼った方がいいですよ。あ、そっだ。メアド交換しません？ 連絡取れた方がいいと思いますので」

「そっやね」

赤外線でメアド交換する。

俺の携帯はスマートフォンで自作である。

性能も機能も市販のものに勝ってる自信はある。

象が踏んでも壊れないし、セキュリティも絶対に破られない自信がある。

ただし制作費用がアホみたいに高いので元が取れないが。

話がついたので真っ直ぐに2 - Aの教室へ行く。

「着きましたね」

「そやね。ほらレオナルドさんドアを開けるんや」

勧められるままにドアを開く。

パン、パパン

クラッカーの音がなり上からは紙吹雪が降ってくる。

『ようこそ！ レオナルド先生ーッ！』

「これはまた……嬉しいですね」

「よかったわー。みんなで用意したんや」

「主役は中央へ行ってね！」

押されて中央をある席に座らせられる。

クラスには2 - Aの生徒が全員居るようだ。

俺が席に座ると主役とか関係なくみんなで騒ぎ始めた。

ときどき私に話しかけてくる生徒もいるがすぐに戻ってしまう。

俺の歓迎会のはずのにすごい場違いな感じだ。

一人で料理をつまんでいると木乃香さんが来た。

「楽しんどる？」

「そこそこですね」

「む、それはあかん。もっと楽しまんと」

「なんか場違いな気がするんですよ」

「それはレオナルドさんが悪いと思う。人を近づけん雰囲気かであるもん」

「そうですか？ そんな気はないんですが」

そんな雰囲気出してたのか。知らなかった。
やっぱりカソック着てると仕事の雰囲気出るのかな。

「なら、これから気をつけんといかんえ」

「はい。わかりました」

「ふふ……よく考えたらこれってうちがお母さんみたいになっとな」

「そうなんですか？ 母が居た覚えがないのでわからないんですよ」

村にいたおばあさんたちは母って感じじゃなかったし。……ってあれ？　なんかみんな静かになってるんだけど。

「えーと、どうかしました？」

「レオナルドさん」

「はい」

「そんな暗い話軽く話さんとして。反応に困るやん」

「わかりました。以後気をつけます」

返答がお気に召したようで笑顔になる。

中学生には見えなくらい可愛いと思う。本当に

「可愛いですね」

『え？』

「あれ？」

ヤバ、声に出してしまった。

「な、な、な、何言ってるん？」

「いや、あの……「話は聞いたわ！ 先生！ 木乃香のどこらへんを可愛いと思ったのかしら！」いやだから……「しっかり答えてね！ 調べてみたらこの前から木乃香と関係があるようだしね！ 教師と教え子の恋愛！」」「いける……！」「……はあ」

Gとパイナップルがすごい勢いでまくしたてる。

みよんみよん動いている触角がウザい。引きちぎってしまおうか。パイナップルは収穫で。捨てるけど。

どうしようか行動に困っているとパイナップルたちの後ろから黒いオーラがでていた。

「……パル、朝倉。少しお話ししよか」

「いや、ちよつ、木乃香キャラ違う！」「そうだよ。さつきも先生が木乃香の笑顔が可愛いって言ってたじゃん。だから笑顔に、ね。ほらスマイル、スマイル」

「ふうん。ならこうやればいいん？」

唇の両端が上がっていく。

うん、綺麗だね。二度と見たくないけど。

「ほな、行こか」

「み、みんな助けて！」「help me！」

木乃香さんが二人の襟を掴み引きずっていく。

二人は助けを求めろるが2・Aの皆は目をあわせようとはしなかった。クラスメイトが助けしてくれないことをわかつた二人は担任をみる。

「先生」

「美味しいな、この肉まん」

「先生ええええ！」

なんで助けなきやいけないんだよ。俺はお前らの被害者だぜ。助けるわけ無いじゃん。

最後の頼りにさえ見放された害虫と果物はすっかりおとなしくなり子牛のように連れて行かれた。

徐々に盛り上がっていく皆を見ながら肉まんをかじる。やっぱり1
4歳が作れる味じゃないよな。

騒ぎの中心は明石、釘宮、椎名、柿崎、鳴滝姉妹だろうか。
少ししか話していないが元気なのはすぐに分かった。

「面白いなあ。嫌いじゃない」

「あ、あのー……」

「ん？ なんですか？」

振り返ると前髪で顔の上半分が隠れている女の子がいた。たしか、
図書館で会った気がする。

「先日は、えーと、助けていただいて、あのー……」

女の子は凄く慌てていてなんだか小動物を見ている気分になる。

「お礼に、あの、おすすめの本を持ってきましたっ！」

女の子は何冊か本を渡してきた。俺が読書が趣味と言ったからだろ
うか？ どれもジャンルが違ったが昔少し有名だった本だった。

「えーと、宮崎さんですよ。ありがとうございます。今はちょっと忙しいので遅れるかもしれませんが必ず読ませていただきます」

「は、はい」

「あー！ 本屋ちゃんが先生にアタックしてる！」

「ホント！？」「え、どこどこ？」

「あ、アタックなんてしてないですー。それに私本屋じゃ……」

「ははは。まったく面白いですね」

スルリと人混みから抜け出す。厄介事以外ならば人混みも好きなんだが、面倒だからね。

抜け出すとまた違う視線を感じる。

偶々目に入った程度の視線の中に俺をはかるような視線がまじる。気にするのも面倒なので気づいていない振りをする。

ごく自然な動きで携帯を取り出す。かける相手は新田先生だ。電話番号は朝の内に教えていただいた。

「新田先生ですか？ レオナルドです。今日、宿直でしたよね？」

……良かった。間違ってたらどうしようかと思いましたが。それで用件なんです、今、2-Aでは俺の歓迎会してるんです。

あ、やっぱり知ってられましたか。それですね。7時ごろまでは居させてあげてほしいんです。もちろん注意はしておきますし、7時越えた後でも騒ごうとしていたらそれは対象外です。説教してあ

げてください。

だめですか？ そこを何とかしていただけませんか？

やっぱりだめ。うーん……責任は私がとります。それではだめですか？

お願いです。青春の1ページとして残させてあげたいんですよ。

……ありがとうございます。では、また明日」

そう言って電話を切る。洩られはしたが無事了解を得た。

あとはそのことを近衛さんにメールで送って……と。

「すみません」

「はい？」

今日はよく話しかけられる日だな。

「あの、前に街で私がナンパされてて助けしてくれた人ですよね？」

……誰だったか。記憶力は悪くなかった気がするんだが。……うーん、分からない。その、見覚えはあるんだよ。でも彼女の言ってるナンパ撃退の話が思い出せない。

「えっと、雪がまだあった頃で、ナンパしてた人は二人で……」

「……ああ！ あの時の女の子ですか。その後大丈夫でした？」

「はい。問題なかったです」

麻帆良に来た日のことだったっけ？ 八つ当たりだったからかな。あんま覚えてなかったんだよね。

「いやー、奇遇？ 一期一会？ なんて言えばいいんでしょうか？
まあ、人生どこで何があるか分かりませんね」

「そうですね。あ、あのメアドとか交換してもらっても良いですか？」

「良いですよ。どっちから先にします？」

「じゃあ、私から」

ケータイを近づけて交換する。ちゃんと交換できていることを確認して顔を上げる。

「成功ですね。機会があれば連絡させてもらいますね」

「こっちから送ってもいいですか？」

「当たり前じゃないですか。どんどん送ってきてください」

「分かりました。で今度の「あー！ 今度はアキラがアタックして
る！」え、ちが「ホントだ！ レオナルド先生め、モテるじゃない
か！」ちよつと話を……「……私もアタックしてみようかなー？」
「「「え？」「」「」

前回と同じくこっそり逃げ出す。

大河内さんには申し訳ないが巻き込まれるのはごめんだった。
そのまま後ろの扉から廊下へ出る。

「はあ……」

被っていた笑顔の仮面を取る。すぐに顔が痛みに歪んだ。いつもの
頭痛だった。結構痛い。座り込んで痛みがとれるのを待つ。

時に共に痛みは治まっていく。ある程度痛みがとれたところでポケ
ットに手紙が入っているのに気づいた。

「（痛みで気づかないとは……）」

まさかの失態に顔をしかめて手紙をひらく。

「…………！」

立ち上がり教室の中を覗き見る。

目的の生徒を探すが見つからない。

「まったくもって面倒な…………！」

手の中の手紙を握りつぶす。そのまま教室には入らずその場を立ち去った。

歓迎会は久しぶりにやったせいかもしれないも以上に盛り上がり暗くなるまで続いた。

「歓迎会、楽しかったわー。またやりたい」

「機会があればまたやるわよ。そんなクラスなんだし。ただ新田には見つからないようにしないとね」

「そやなあ。レオナルドさんのおかげで七時までに終わった人は怒られんで済んだになあ。大丈夫、なんて言っただけだからあんなに怒られるんや」

なんでもレオナルドさんが新田に連絡してくれてくれたおかげである時間まで居れたらしい。

そのおかげで木乃香に教えて貰った後、片付けをしていた面子は説教を免れたのだった。

「でも、レオナルドさん主役なのに途中で帰っちゃったのよね」

「そっすんなんや。何でやる？」

「わからないわよ。何かあったんじゃない？」

「そっすんなんかなあ」

「きつとそうなのよ。ところで木乃香今日は機嫌がいいわね。なんか良いことあった?」

このままだと長引きそうなので話を変える。

でも、気にはなっていたことだった。レオナルドさんと一緒に入ってきた時にはすでに機嫌はよかったから久しぶりの遊びで機嫌が良くなったわけではない……と思う。

「そうなんや! レオナルドさんのおかげで仲直りのきっかけが出来そうなんや!」

「仲直り? 誰と?」

「せつちゃん……やのうて桜咲さんのや」

「ああ、あつちで友達だったって言う桜咲さんのことね」

「そうなんや。でなでな……」

木乃香の話は日が変わるまで続いた。

……疲れたわ。木乃香にはこれから桜咲さんの話題を振るのは止めましょう。うん、その方が絶対に良いわ。

でも、レオナルドさん良い人なのね。

前のときも思ったけどホント良い人だわ。

レオナルドさんのせいで高畑先生が担任じゃ無くなったけどよかったのかも知れないわね。

良い人っぽいし信頼できるわ。

19話（後書き）

漸く歓迎会ですね。

フラグ状況がわかるな。

次回は戦闘です。

春秋は戦闘シーンは下手です。
あらかじめご了承ください。

意見、感想、評価お待ちしております。

閑話参(前書き)

本編進めなくてすみません。
推敲で書き直しにしまくってて……

取りあえず閑話をどうぞ。

今回の主役はさよさんだぜ！

オチはないけどな！

閑話参

神父の魔法球の中、純白の身体し、額から立派な角を生やした駿馬が野を駆けていた。

忘れられた方も多いと思います。

どうも、ユニコーンです。（カメラ目線で）

先ほどはすいませんでした。

まさかの出番に行きすぎた自己紹介をしてしまいました。

では現状の説明をしますと、

今私はさよさんの迎えに来ております。

さよさんの迎えはライバルであるペガサスと交代なのですが今回は私の番なのです。

ペガサスも悔しさのあまり地団駄を踏んでいるでしょう。

「あ、ユニコーンさんですね！ 待ってました！」

おっと、もう着いてしまったのですね。

この元気な声はみなさんご存じさよさんでございませう。

私のような若造にも名前を許されるほどの聖人でございます。

しかし、待たせてしまったのはいけませんね。
今度からもう少し早めに出ましようか。
ペガサスにも言っておきましょう。

さよさんに乗っていただき再び走り始めます。

「ひゃふー、風が気持ちいいですー」

喜んでいただき感激でございます。

ここでお読みの女性に私たちが住む魔法球内を説明したいと思いま
す。

え？ 野郎？ 野郎は死んでしまえばいいのです。

おっと、失礼。つつい本音が。

まあ、私が説明できるのは二つだけなのですがさせていだきたい
と思います。

では、魔法球へ入った者が現れる『リゾート地帯』。
ここでは四季が分かれています。春は桜、夏は海、秋は山、冬は雪
原、とあの神父の考えが反映されております。

随分と偏見ですがね。

続いて私たち幻想種と世界中の動物が住むのが『自然地域』でございます。

ここも、熱帯地域、砂漠地域、草原地域、などここにいる生き物すべてが暮らせる地域が造られております。様々な空間を収納するために他の魔法球より大きくなっているのが特徴でしょうか。

これはあの神父にしては良くやったものだと思いますがね。

さよさんが我々の住処『自然地域』に来て初めにすることは我々の頂点に存在する黒龍殿に会うことです。

「久しぶりですね。元気ですか？」

黒龍殿にこんな挨拶ができるさよさんは本当凄いなと思います。

《元気だとも。お前こそ元気なのか？》

相変わらず洪い声ですね。

人間にはガウ、とかの鳴き声に変わりますが。

「はい！ 私は元気いっぱいですよ」

時々さよさんが人間と思えないんですね。
なぜ、理解できているのか。

……まあ、理解できることは良いことなのですが。

黒龍殿との話が終わると中心にある草原へ行くことになっています。

ペガサスの場合はならないのですが私の場合は地面を行くのでさよさんのおいをかぎつけた生き物によって行列ができます。

まるで笛吹きのようにです。

草原の入り口には熊のゲンドウ殿がおられます。
幻想種でもないのにここで二番目に強い方です。

私？ 私は中の下と言ったところでしょうか。
移動手段ですし。仕方がないことなのです。

「わー。もふもふですう」

さよさんはうさぎをもふもふしていました。

「さよーならー」

帰りは黒龍殿が送られます。

神父に話があるんだとか。黒龍殿も大変ですね。

工房で素体を造っているとさよさんが扉を開けて入ってきた。

「レオナルドさん。トカゲさんがなにか話があるそうですよ」

「そうなんですか。わかりました、すぐ行きます」

「じゃあ私は外でご飯作ってますね」

さよさんはスキップして出て行く。

「さて、行くとしましょうか」

白衣を脱ぎハンガーにかけておく。

扉に手をかけたところで疑問が浮かんできた。

「なんで言葉分かってるんだ？」

解答はきつと得られない。

閑話参(後書き)

さよさんライダーでやれるんではなかるうか……
な話でしたね。

うちのマスコットキャラクターはさよさんでございます。
絶対ヒロインにはしない。
どちらかって言うと非戦闘員だし。

さよさんが聖杯戦争にでたら……

黒龍召喚によって大概の敵は殺せるね。
でも金ぴかとアチャ男は勘弁な！

黒龍君は若いけど龍樹に迫る勢いの強さだぜ。
大きさも龍樹よりは小さいがかなりデカいしな。

クマのゲンドウ君。
ネタだけどかなり強め。
アイアンクローが必殺技。
出番はないだろうな。

ところでヘラスの守護聖獣って龍樹以外にいるの？

20話 (前書き)

推敲が終わった物から投稿。

まだ問題はあると思うけどな！

20話

夜の帳が降り始めた逢魔ヶ時。

「面倒だよなあ……………」

人気がない通りを歩いていく。

空には円には少し足りない月が上がっている。

「本当面倒だよ」

レオナルドは右手で頭を押さえ痛みに耐えていた。

この麻帆良に来てから続いている痛みは今までよりも強くなっていた。

「誰がやってんだろうな……………」

—学園長（爺）ではない。

間接的な魔法では自慢の防壁は抜けられない。
薬や直接頭に魔法をかけられた覚えはないしかけられるほど弱くはない。

……確か昔にもあったような……

喉元まで上がってきているのに口まで来ない。
頭の片隅に在るのに引っ掛からない。

……もどかしいな。

「痛っ！」

頭がもつと痛くなってきた。気絶する予兆だ。
この後にはエヴァンジェリンとの戦いを控えている。

……止めるべきか？ だが……

今ならば答えが引き出せそうだった。

「……よしっ！」

近くにあったベンチに座る。

待ち合わせ場所はこの通りとしか書いてなかった。なら、この場でも良いだろう。

眼鏡を外す。

自分にとっての眼鏡は“思い出”と“鍵”である。

眼鏡を“倉庫”へしまい目を閉じ、

もう一人の俺と交代する。

……頼んだぞ、リオン。

誰一人いない通りを歩む。

ほぼ真上に上がった月を見て思わず頬が上がる。

いつもより高い視線、最盛期とまではいかないが体に満ちる魔力。隣を歩く古くからの従者。

久しぶりの感覚に胸が躍る。さらには呪いが解けるかもしれないのだ。機嫌が良くなっても良いではないか。

「ケケケ、ズイブントゴ機嫌ジャネエカ。御主人サマヨ」

右を歩くチャチャゼロが話しかけてくる。

「当たり前だ。おまえだってわかるだろう？」

「ワカルワケネーダロ」

やれやれといった風にチャチャゼロが肩をすくめる。

頬がひきつるのが分かる。ついつい拳を固めてしまった。

……何でこんなになったのやら。

作った頃はまだまともだったのに、と時間の流れを恨む。

「まったく……少しは茶々丸を見習え。なあ、そう思わんか?」

「……………」

左斜め後ろを歩いているはずの茶々丸に話しかける。
だがいつもなら即座に返ってくる返事が返ってこない。

「茶々丸?」

「……………っ、はい。何でしょうか」

いま初めて気づいたような反応をとる。普段では有り得ない。

「茶々丸」

「なんでしょうか」

「なにか言いたいことがあるか？」

「ありません」

「アンデルセンか？」

「！」

茶々丸は驚いたあと俯き立ち止まってしまっ。

……それもそうか。毎日楽しそうに話していたからな。

本人は気づいていないようだが話しているときの茶々丸は本当に楽しそうだったのだ。

以前と比べると表情も増えた。

「戦うのは嫌か？」

「……わかりません」

「なら戦いが始まる前に決める。やりたくないならやらなくてもいい。お前がいなくてもチャチャゼロと二人なら問題なくやれるだろうね」

「……はい」

また歩き出す。誰も喋らない。

エヴァンジェリンは冷たくしすぎたか、と後悔する。

暗い空気のまま通りを進んでいく。

そして通りも半ばまで来たところで立ち止まる。

通りの端に設置してあるベンチ。

そこに今宵の獲物が座っていた。

レオナルドはいつもかけている眼鏡を外し啜えた煙草から紫煙を漂わせながらそこにいた。

「ずいぶん遅かったじゃねえか。待ちくたびれたぜ」

レオナルドがこちらを見ることもなく話しかけてくる。

……これがあのレオナルドか？

教室で見たときとは何かが違っていた。

レオナルドが立ち上がりこちらを向く。

顔も体格も僧衣も昼と違うところはなく眼鏡を外した以外に違いは見えなかった。

茶々丸もなにかを感じ取ったのだろう。困惑した顔をしている。

「おいおい。反応しろよ」

虚しくなるじゃねえか、と前の男は言う。

「貴様……何者だ？」

「ん？ 俺は俺だよ。そんな見りゃわかるだろ？」

「俺とは誰だ？」

「無視かよ。まあ、いいや。俺はレオナルド。レオナルド・アンデルセン。わかりきったことだろ」

「……貴様があのレオナルドだと？」

「おいおい。どこからどう見てもレオナルド・アンデルセンだろ。そのくらいわかんねえの？ 分かんないんだったら莫迦だぜ？」

カカカ、とレオナルドの笑い声が聞こえる。

挑発なのか素なのかわからんが苛立たせるのが得意な奴だ。つい頬が上がってしまう。

……若造が言ってくれる。いいだろう。ちょっとばかり揉んでやるうではないか。

従者二人に念をつなぐ。

茶々丸、チャチャゼロ。手を出すなよ

ケケケ。独り占メハズルイゼ

うるさい。絶対に手を出すなよ。いいな、絶対だからな

フリカ？

違うわっ！

オー、コワイコワイ。ワカッタゼ。代ワリニ後デ暴レル時ハヤラ
ゼロヨナ

ああ、存分にやらせてやるさ

……大丈夫なのですか？

茶々丸か。心配するな。私は弱くない

「で、始めるのか？ こっちはいつでもOKだぜ」

「ならば、始めるとしようか。私を莫迦にしたことを後悔して死ね」

「俺が殺されることは確定かよ。皮算用も程が過ぎるぜ」

男は笑みを深める。

まるで悪戯が成功したガキのように。

「安心しろ出来損ない。死ぬのはお前だ」

その言葉を合図にエヴァンジェリンは前へ飛び出した。

「お、魔法使いが接近戦か。愚かしいけど嫌いじゃないぜ」

俺は笑みを崩さない。

……どうすっかな。

銃剣、黒鍵で串刺してもいいが少々面白味に欠ける。
一応銃剣を出しておきつつ方法を考える。

……あ、そっだ、あれでいこう。

幼い頃に迷子のお兄さんから教えてもらった技術。

口を開き世界へ告げる。

【お前「」には「」見えない】

声が世界に響いた。

途端に視界が真っ暗になる。

走っていた時に見えなくなったせいで足を引っかけてしまう。

……何が起こった!?

肩から地面に倒れる。

「え、これで終わりかよ………つまんねえ」

上から聞こえてくる声。

慌てて起きあがる体。

退くことは間に合わない。わかっている。だが諦めるわけにはいかなかった。

「 Amen 」

体は前傾している。後ろへ跳ぶのは無茶な体制だ。

だがこれ

でいい。

足を力を含め前へ跳んだ。背中をなにかが抉っていく。おそらくレオナルドの銃剣。

……痛い、が支障はない。まだ戦える。

獣のように四肢で地面を掴み、無理矢理体を後ろへ向ける。爪が剥がれたが気にする余裕はない。次の跳躍で茶々丸たちのところへ戻る。

レオナルドがこちらを向いていないだろう今がチャンスだった。

「　　悪いな。予測済みだ」

声と共に額に突きつけられる冷たい鉄。

真ん中には丸い穴があいていて、火薬の匂いがしていた。

知識が銃口だと教えてくれる。それなのに私は動けなかった。

闇夜に銃声が鳴り響く。

20話 (後書き)

21話まだ推敲終わってないんで待ってください。

始めのところは分かりづらいいと思います
が
散々伏線やってきたんで
書き込ませて貰いました。

詳しい説明は後の話で！

21話

鳴り響く二度の銃声。

一発目、飛び出した銃弾はエヴァンジェリンを穿たず、向かってきた銃剣を破砕した。

続けて二発目。

それは俺の投げた銃剣を拾い、俺へ投げてきた人形の腕を撃ち抜く。

「……ケケケ。御主人ノ嘔吐キメ。事前ノ情報ト全然違ウジャネエカ」

「……やられた。動かないもんだから警戒してなかったぜ」

後ろを振り返る。

「マスター、大丈夫ですか？」

「……茶々丸か？」

「はい。勝手ながら手助けさせていただきました。命令に背いてしまい申し訳ありません」

「あ、ああ。別にかまわん。助かった」

「はあ……」

後ろにも既にいた。これでエヴァンジェリンは殺しにくくなる。

「はあ……」

「敵カラ目ハナシテイイノカヨ」

後ろからチャチャゼロが切りかかってくる。

……こうなるとテンション下がるよなあ。面倒くさい。

……どうすっかな。面倒くさいし手っ取り早く片付けるか。

懐から一本のロングソードを取り出す。

「シネ」

「てめーがな」

剣を斜めに切り上げる。

剣はククリごとチャチャゼロを斬りおとした。

「イヤイヤ、アリエネーダロ」

「言うな、自覚してるから。っていうか、お前の方があり得ねえんだがな」

数百年前の人形をいままで動かしていたとか人形師を馬鹿にしていくとしか思えない。

斬られたチャチャゼロは地面に落ちた。

「ケケケ。悪ノ魔法使イトソノ従者ガナサケネーゼ」

「まだ一人残ってるじゃん」

「新入りダケナノガナサケネーダ」

「そう言うもんか？」

「ソウイウモンダ」

そういつて肩をすくめる。

チャチャゼロは首を横に向けた。

「オレモヤラレチマツタカラタノンダゼ、妹」

「了解しました。お任せください」

後ろから声がする。焦りも熱も感じられない落ち着いた声。

後ろをむく。居たはずのエヴァンジェリンは10mぐらい離れた桜の根本に座らされている。

そして向き合つはライトグリーンの髪をした人形。

「やる気?」

「有り余っています。どうぞお手柔らかに」

「逃げる気は?」

「ありません」

「どうしても?」

「マスターを守るためならば」

はあ、とため息をつく。

……あいつからはなるべく傷つけないでくれ、って言われてるしなあ。

……殺害特化の俺には面倒な話だ。

再び溜息をつく。

さて、どうやって倒そうか

茶々丸は目の前の男を見据える。

相手は戦闘経験豊富。対して私は戦闘経験なんて鬼相手が中心で人間との戦闘は無いに等しい。

……完全な負け戦ですね。彼方が戦うのを……いや、私と戦うことを嫌がっているのが幸いででしょうか。

行動予測をし始める。

考えれば考えるほど勝てないと思い知らされる。

……勢いで行きましょう。負けて元々です。……だったらちよつと話をしてみましようか。

「貴方は誰ですか？」

「ん？ 俺はレオナルドだよ」

「いいえ。貴方はレオナルドさんではありません」

今夜会ってからなにか違和感を感じていた。

そう、まるで本人では無いみたい。

それに調べた中にこんな噂があった。

“レオナルド・アンデルセンとは一個人の事ではない”

調べたときは噂話として処理していたが今ならば真実味がある。

証拠に目の前の男も驚いている。

「…………誰から聞いた？」

「私個人の判断です」

「…………はあ」

まさか分かるとはなあ、という呟きをセンサーが感知する。

「いいぜ。あいつのお気に入りだし教えてやるよ。 “リオン”
つてんだ。宜しくな」

「やはり別人でしたか」

「 いやいや。お前が知ってる“レオナルド”だよ。ただ裏か
表か。ちよつとした違いさ」

「つまり二重人格であると？」

「そんな高尚なもんじゃねえよ。被りすぎてそのまま顔になっちゃまった仮面つてのが正しいな。ま、仮面を顔にしたのは本人だがな。戦闘用の顔と生活用の顔とでも思っただらいいぜ」

あと、教えただから名前は“リオン”って呼んでくれ、と付け加えられた。

さて、知りたいことは知れたのですがこれからどうしましょうか。怒らせてみましょうか、でもどうやれば……。

とりあえず時間を稼ぎましょう。

「了解しました。リオン様と呼ばせていただきます」

「……その“様”つてのやめね？ 敵から呼ばれるのは苦手だ」

ちよつどいいですね。これを足がかりにしましょう。

「我慢してください、リオン様」

「だからやめてくれよ」

「嫌です、リオン様」

「お前、わざとだろ？」

「もちろんです」

「おいしい！ てめえそれはどういづことだこらあ！」

「嫌がらせに決まっています。今日は散々な目に遭わせられていますので」

「それは仕掛けてきた方の責任だろ。俺は悪くない」

「いいえ、何事も男が悪いのです。私はそう教えられました。と言っわけで謝りなさい」

「命令かよ!?!」

「うるさいですよ。音量を下げてください」

「何様だ、てめえ!」

「言葉遣いが汚いです。直すべきと言わせていただきます」

「人の言葉無視してんじゃねえぞ!」

「無視ではありません。雑音として処理しているだけです」

「……………っ！ 殴る！ お前ぜってえ殴る!」

「女の子を殴るうなんて男として恥ずかしくないのですか？ 恥を
知りなさい」

「本当お前調子に乗ってるな!」

「乗っていません。レオナルドさんに言われた“右の頬を殴られたら笑顔で相手をぶっ血k i i ー”を遂行しているだけです」

「まさかの自業自得！」

「………… オメラタノシソウダナ」

リオンが片膝を突いている。

外見的にはレオナルドがやっているようにしか見えないが。

あと姉さん、愉しくないですよ。たぶん。

「何をふざけているんですか。戦っているはずでは？ まったく戦闘中に不真面目な」

「てめえが始まりだ！」

「うるさいですよ。黙ることも出来ないのですか？」

「お前俺のこと嫌いだろ！」

「いいえ。大嫌いです」

「ぶっ殺す！」

リオンは両手で剣を持ち切っ先を地面に向け突っ込んできた。

……どうやって倒しましょうか。

装備はマシンガンが一丁。

それ以外はさつきまで迷っていたせいで持ってきていない。

それに“撃たれた後に銃弾を避けた”なんて情報も入手している。物量で攻めても駄目かも知れない。

さらにあの剣は姉さんのククリを軽々と斬っていた。防御は出来ない。

私は魔法使いの補助を中心に造られている。戦うこともできるがそれは戦士相手の場合だ。

……かなりヤバい状況ですね。

こう考えている間にもリオンは迫ってきている。

右に避ける！

マスターから念話で伝わる。

逡巡するが言葉の通りに右へ避けた。

すると先程まで立っていた位置を『闇の吹雪』が通り過ぎていく。爪先に少し当たってしまう。

振り返りマスターを見るとマスターはニヤリ、と笑っていた。

放たれた魔法は徐々に弱くなっていき消える。

魔法が通り過ぎていったことで凍った大気中の水分が視界を悪くし

ている。

サーモグラフィで生死を確認できない。
音も使えない。

……終わった？

呆気なさすぎる。『闇の吹雪』一発で死ぬのか？
頭の中を疑問が駆けめぐる。

「ははっ、目が見える。目が見えるぞ！」

マスターの嬉しそうな声が聞こえた。

死んでいないのなら今解くのは下策だ。
故にリオンがかけた何か効果がなくなったならばやられたのかも知れない。

……死んでしまいましたか。

少し残念だ、と思う自分がある。

なぜだろうか、と問いかけてみるがなかなか答えが見つからない。

……時間がある時に考えましょう。

たしか計画ではあのログハウスを回収しにいかなければならない。
動くのは早くて悪いことはないだろう。

「マスター」

「なんだ？」

「計画の変更はあります」

「あめえよ」

「か？」

再び響く銃声。

放たれた銃弾は四肢を刈り取っていく。

脚も腕もなくなり立つことが出来なくなった私は地面にたおれこむ。

「俺が魔法対策をしていないと思ったか？ してない訳がねえよその辺の対策は完璧だし、なによりあの程度の魔法一発で死ぬほど柔じゃない」

カツン、カツンと足音が聞こえる。

後ろから聞こえる音からは無傷であろう事が伺えた。

……生きていましたか。

確かめなかったことを後悔しつつ、反面良かったとも思っている。

「なぜ目を見えるようにした？」

「じゃねえと、そいつが油断しねえだろ。」

マスターは構えをとる。

戦うつもりだろうか。一対一で勝てるのだろうか。

……無理でしょうね。

勝てる予想が出来ない。逃げた方が良さだろう。

そう考えていると突然体を持ち上げられる。

「ちよいと失礼」

持ち上げたのはリオンらしい。そのまま端に持って行かれる。

「……どういっつもりだ？」

「折角これだけにおさめたのにこれからに巻き込まれて壊れたら俺が怒られちゃうからな。

それに気に入った。あいつも壊さないでくれ、と頼んでくるだけはある」

「馬鹿にしていただけで気に入られる要素は今のところ無かったと思うのですが わかりました。あなたはDMというものなので すね。さわらないでください。変態が移ります」

「ちげえよ!」

まったく……、と言いながら四肢と一緒に地面に置いていく。
そして並べ終わると、顎に手をやる。

これだけ見るとバラバラ死体……、と呟き

「ま、いつか」

……良いわけがないでしょう。

死体扱いされて怒らない人もいないと思う。

多少の憤りはあるが心配してくれたので言わないことにしておく。

「じゃ、やるか」

通りの中央に戻ったりリオンは自然体で言う。

対してマスターは何も言わない。

リオンが口を開く。

【お前」「には」「見　　】

「同じ手を通じるかぁ！」

瞬動でリオンへ向かう。

前回と同じく右手を突きだし心臓を狙っていた。

リオンの顔が見える。

その顔は笑みの形に変わっていた。

「バアカ。本命はこっちだよ」

「なっ！」

地面が輝きマスターの動きが止まる。

「捕縛結界！」

「そう。さらに言っとけば改良版だ」

大きさ、速度、使用条件とかな、と続ける。

リオンが剣を振り上げる。

死ぬ。

振り上げられたその剣は茶々丸には死神の持つ鎌のように見えた。

「じゃあな、吸血鬼」

剣は振り下ろされる。

21話（後書き）

推敲だけのくせに遅れました春秋です。

またも変なところで逃げる俺。

気にしないでください。これが俺です。

本当は一話で収めるつもりが長引きまくる。

この話での茶々丸との話なんて本当はなかったんです。

チャチャゼロなんて仕掛けてあった魔法で初期に壊れる予定だった。

やっちゃった、って感じ。うん、馬鹿ですいません。

ところで、俺のって上手いのかな？

評価はどちらも4で悪くはないと思うのだけれども。

感想でも悪いところ指摘して貰って直そうとしているんだ。

そついうとごどうなのか教えて貰いたいです。

感想、評価待ってます。ええ、待ってますとも。

22話(前書き)

1 2 / 6 少し変更。

1 2 / 1 3 後書き追加

22話

刃は振り下ろされる。

肉を斬る音は戦いの終わりを伝える。

オレンジ色の髪が舞い上がり、チリンと鈴の音が鳴る。

固まる三人。

倒れた者から血は流れ地面に赤く跡を残す。

闇夜の乱入者は動かない。

目の前にはオレンジ色の髪をした少女。

「かぐら……ぞか？」

頭が上手く働かない。

「おい、かぐらぞか」

しゃがみ込んで体を揺する。

反応はない。

うつ伏せだった体を仰向けに変える。体に力が入っていないくて動かしづらかった。

目の前には血まみれの知り合い。やったのは俺。誰が見てもそう判断するだろう。

「あ」

脚を切り落としている、血が流れすぎている。危険な状態だ。

頭の冷静な部分がそう伝えてくる。

けれど動けない。体が震えてくる。

昔見た光景と今がかぶる。

どしゃ降りの雨。

倒れている女性。

地面に広がっていく赤。

血に塗れた剣。

それを見ている俺。

色は違っても重なってしまっ。

「っ！」

急いでカソックから本を取り出す。 先日図書館島で拝借してきたものだ。

使うのは53頁と31頁。 治癒と転移の魔法。

応急処置に治癒をつかい血止めを行う。

「え、あ、おい！ 私に何か出来ることは……」

外野がうるさい。

魔法球への転移を中断。 茶々丸ともども住処へ送る。

「ちょ、まで。これは」

すぐに気配が消える。 これでいい。

再びへの転移を開始。 失敗。

原因の捜査。 爺が結界を張っている。 迎撃システムを作動。

爺の結界を壊すことに成功。

再度転移開始。 成功。

神楽坂の体と両脚を工房の台へ置く。

血で汚れて使えないであろう服を脱がせる。
続いて台に仕込んである魔法陣を起動。
効果は意識への介入。

魔法無効化能力。

敵意のある魔法は完全にシャットアウトし、善意の魔法（治癒など）は自動的に受け入れることができる。どちらかわからない場合は、本人が受け入れようと思わないとシャットアウトされる。

この法則が魔術に当てはまるかどうかは分からない。
だがレオナルドは魔術はどちらか分からないものだと推測していた。
故に無意識に干渉し本人が受け入れるようにすれば成功する確率は高かった。

だがここで爺の施した記憶の封印が邪魔になってくる。
彼女の記憶は幾重にもかけられた魔法で封じられていて、さらにその上から薬によって念押しをしている。

そして魔法の中に魔法による意識への介入を防ぐものがあつた。
魔法の解除の妨害のつもりだったのであるうこれがいまから行くことに邪魔になる。

これを解けば彼女は今までのように無邪気に中学生はやれない。
だが解かなければ彼女は死んでしまう。

俺は迷わず解いた。

そして下準備は終わる。

これから行うのは肉体の再構成。

治癒だけでなくそこまでしなければいけない理由は傷を与えた剣のせいである。

神楽坂を斬ってしまった剣は数年前に今は亡き武器職人とともに丹念に作り上げた魔剣である。

そして剣にはレオナルド達によって三つの効果が付与されていた。

『切断』と『不壊』そして問題の『阻害』である。

『阻害』は斬られた相手に関するあらゆる事象を阻害する。

例えばレオナルドのような自己再生能力リジェネレーションを使えたとしても阻害され完全な状態として機能はしない。

今回は脚の切断。

自然治癒力も治癒もうまく働かないため脚がくっつく可能性は0に近いし、

それ以前に出血多量で死ぬ可能性が高い。

解呪も出来無いわけではないが解呪出来るまでに死ぬかもしれない。

治癒を続けながら工房全体に描かれている魔法陣を始動させる。

工房はレオナルドから貪欲に魔力を吸収していき発動に必要な量を奪い取っていく。

魔力が抜けていく虚脱感に耐えながらこれからのことを思う。

いまからやることはきつと神楽坂には恨まれるかもしれない。

それでもやめる気は無かった。

必要量を吸収した魔法陣は動きを止める。

「
」

深呼吸をする。

吸い込む空気は鉄の匂いがする。

一際大きく空気を吸い込み

「
術式開始」

工房が白に包まれた。

外に出たのは何となくだった。

お風呂からの帰り道。

廊下からレオナルドさんが見えた気がしたから。

追いかけた方がいいかな、と思ったが同時にレオナルドさんも子供じゃないんだから、とも思う。

けどなんだか悪い予感がしたし、なんだかレオナルドさんは私と同じような匂いがしたから追いかけることにした。

まだお風呂に入っている木乃香に書き置きをして、歩きやすい格好に着替えて、少し化粧を使ってみる。

男の人に会うんだし綺麗に見せたいのは皆同じだと思つ。

部屋を出ると走って外へでる。

女子寮の管理人はいないから怒られることはない。

走って追いかけるが追いつけないどころか道に迷ってしまった。

道を走っていたはずなのに森の中に出てしまう。

愚痴を漏らしながら道へ戻ろうと木の間をすり抜けていくと血のに

おいがしたんだ。

なんだろう、とおいのする方向へ進む。

すると　　剣を振り上げたレオナルドさんがいた。

その前には同級生のエヴァンジェリンさん。

私の反対側にはバラバラになった絡繰さんがいた。

なにがなんだかわからない。

けどレオナルドさんの持つている剣からは悪い予感がした。

「じゃあな、吸血鬼」

その声がしたときには走り出していた。

目の前で人が殺されるのが嫌だった訳ではなく、
同級生が殺されるからでもなかった。

ただ、レオナルドさんに殺してほしくなかった。

ジャンプしてエヴァンジェリンさんを押す。

エヴァンジェリンさんに巻き付いていた光る何かは触ると壊れエヴァンジェリンさんを剣が斬ることはなくなった。

後は私だけだったんだけど、跳んでる人間が動けるわけもないよね。

走る激痛。

痛みに耐性のない女子中学生である私は痛みで気を失ってしまった。

次に目が覚めたときは暗い闇の中だった。

「どうよ、いい」

すると後ろで光がつく。

後ろを振り向くとライトアップされた私が出た。

「え……」

「はじめまして」

「……だれ？」

「アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア」

「アスナ……」

名前の一部が同じだけなのになぜだか懐かしい感じがした。

「懐かしいのはあたりまえ。だってあなたの名前だから」

「え……いや、私の名前は神楽坂明日菜で……」

「それもあなたの名前。今の名前。仮初めの人格につけられた名前」

「仮初め……？」

「そう、仮初め。でもあなたの名前。だって嘘も吐き続ければ本当になる。数年間のじかんはあなたを本物にするにはじゅうぶんなじかん」

「嘘とか本当とか……意味が分からないんだけど」

「わからなくてもいい。今からわかる」

わたしが近づいてくる。

一歩手前に立ち私に向けて手を伸ばす。

伸びた手は私の額を触る。

触れられた瞬間流れ込んでくるなにか。

『向こうの空見てみなアスナ』

砂漠のようなところ、見たこと無い男の人が笑顔で言う。

『姫様は今日も元気か?』

次は西洋風の街。海岸で空を見上げるわたし。
夕暮れ時。さっきのに加えて三人増えた。

『幸せになりな嬢ちゃん。あなたにはその権利がある』

森の中。胸から血を流したガトーさんが撫でてくれた記憶。

『幸せに暮らすのです。お姫様全てを忘れて…ね』

真っ白の雪原。若い頃の高畑先生と共に歩く。

「はっ！」

周りを見回す。

砂漠でも、海辺でも、森でも、雪原でもなかった。

「今のは抜き出した記憶」

わたしが後ろに下がる。

「何でもない平穩とちよつとした悲劇」

そして再び手を伸ばす。

「続きを望む？」

少し手を伸ばせば触れられる距離にある手。

この手に触ればさっきの続きがわかるらしい。

でも、触ったら何かが終わる気がした。

「いや……」

「いや？　なんで？」

「だって……」

「世界が広がるだけ。問題はない」

「い、いらない！」

「いらない？　なんで？　今まで分からなかった真実を知ることが出来るのに」

「真実……？」

わたしはこくん、と頷き

「アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアの記憶を知る」

「それはいままで知らなかった世界の裏を知ること」

「魔法や気。血塗られた幻想を知ること」

「世界の不思議を知ること」

「魔法……気……不思議」

「そう」

「……なら、私の知りたい事もわかる？」

「しりたいこと？」

「レオナルドさん」

なぜだろうか。壊れてしまう何かよりレオナルドさんの事が気になった。

「わからないことはない。でも全てを知ることにはできない。精々立ち位置を知るだけ」

「立ち位置？」

「彼はきつとナギの息子。わたしの血縁」

「どう言ひなさい?」

「知れば戻れない。それでも知りたい?」

少し迷い私は頷く。

それを見てわたしは笑う。

「詳しいことは彼に聞きなさい。あなたは彼が優しいことを知っている」

「起きたらそばに彼はいる。死にかけのあなたを生かしたのは彼」

「わかった。ありがとう」

「当然のこと。もう、一人は嫌だから」

「「またね」「」

私は伸ばされた手を強く握る。

「」

目に入ったのは見覚えのない天井。

「……どこ？」

背中にはひんやりとした感覚。起き上がり確かめると金属のような不思議な物だった。

横を見るとソファでレオナルドさんが寝ていた。起こすのも悪いので質問は後にすることにした。

体の動きを確かめる。

アスナからすれば懐かしい感覚だが明日菜からすると変わりはなく感じる。

不思議な感じだ。

ただ前よりも反応が良いような感じがする。

「……あれ？」

他のことを確認していたため気づかなかったが服が替わっている。

真っ白のワンピースみたいな服だ。

「もしかして……」

顔が赤くなる。

アスナの感覚からすればそこまで気にならないけど明日菜は男の人に裸を見られたことはかなり恥ずかしかった。

台から降りる。

そのままソファで寝ているレオナルドへ向かう。

そして感卦法を発動。

拳を握りしめ寝ているレオナルドの腹を全力で殴りつけた。

その後見事なりバーブローを喰らったレオナルドの呻き声が聞こえた。

22話（後書き）

いやー、まさかの終わり方でしたね（笑）
ヒロインにするために無茶をしていたいただきました。文句は受け付け
ます。

明日菜とアスナの対面。

これは入れるつもりはなかったのですが指が勝手に……
微妙かもしれませんが許してください。

あと、なぜあんなに焦っていたのかという問題の『阻害』につい
ては作中で説明しました。

それで斬られた明日菜は自然治癒を『阻害』されて傷が癒えないわ
けですが、それに生命活動まで『阻害』していたのでとっても危な
かったというわけです。

最後にリオンが使っていた剣のことですが名前を募集します。
能力の詳細は

『切断』ふれている物より硬度が上回っている場合それを斬る。

『不壊』壊れない。というか元々壊す気無い。

『阻害』斬られた相手に関するあらゆる事象を阻害する。

長さは120程度のロングソードです。

名前は要らないんじゃないか、という意見もOKです。

✕切は12/30までを予定しています。

感想、評価、批判、意見よろしくお願いいたします。待っています。

閑話 クリスマスバージョン

夢を見ている。

あの頃の村の様子。

病弱だったあの頃俺が外で遊んでいた。

まだ仲の良かった弟と赤い髪をした幼なじみ。

1歳年上だった幼なじみが家にいる時に二人で遊びに行ったのだ。

あの頃から幼なじみは弟が好きだったんだろう。

いつでも弟にくっついていたし。

確かああ言うのをツンデレと言うのだったか。

小さな自分たちを見ていて思わず頬がゆるむ。

元老院なんかに関わらなかつたら壊れなかつた日常。

自分たちは森へと走っていく。

追おつとしたときに頭へ音が響く。

音は聞き取れない。

二回目の音が響き世界が朧気になっていく。

『レオ』

呼ばれる名前。世界はもはや闇へと変わっていた。

『起きてレオ』

ああ、そう言えばこれは夢だったか。

目を開く。

目の前には感情の読めない顔をした彼女。
垂れてきている水色の髪が日差しをいい感じで遮ってくれている。

「……起きた？」

「ああ」

「何か言うこと無い？」

「おはよう」

顔を窓へ向ける。

髪の間隙から見える外は青空が広がっている。

今日は12月25日。クリスマスだ。

だが赤道付近にいるため雪はないし寒くない。
まだ半袖で居れるくらいだ。

「……………」

顔を戻すと不満げな彼女の顔がある。
責められているようで　いや責めているのだろう　少し不安になる。

けれど何のことだか分からない。
とりあえず動けないので動いて貰おう。

「……………退いてくれないか」

ついにはつきり顔で不満だと示してくる。

「他に言うことは？」

「……………？」

再度考えるが分からない。
はたしてなにがあっただろうか。

時間が経つにつれどんどん不機嫌になっていく彼女。

「……………はあ」

ついに溜息までつかれた。
諦めたようで彼女は右へ顔を向ける。
つられて目を向けるとそこにはカレンダー。
カレンダーの12月25日、つまり今日のところには赤い丸がしてあって誕生日と大きく書いてあった。

そう言えば昨日から何度も言われていた。
忘れるわけ無い、と思っていたがどうやら忘れていたようだ。

目の前には彼女の顔がある。

「誕生日おめでとうテレジア」

「うん……ありがとう」

控えめな笑顔。

以外と悪くないと感じる。

「テレジア、起こすのにどれだけ時間かけてるの」

開く扉。

テレジアは顔を向けるが俺にとっては予想内のことなので驚かない。

「……ってごめんなさいね。私は逃げるからゆっくりすると良いわ。
ゆっくりね」

そして今の状況はベットに寝ている俺にテレジアが馬乗りになって
さらに顔を近づけている状態だ。

そう言うことをすると勘違いされてもおかしくない。無理矢理と始
めに付くが。

シスターは何故か頑張っ、て、と言い残して扉を閉めた。

「……………」

「……………」

テレジアを觀察しているとテレジアの真っ白な肌 何故だか日焼けをしない が徐々に林檎のように朱くなっていく。

そして耳朶まで朱くなったところで跳ねるように俺の上から退く。

「あ、あの……えっと」

テレジアは混乱している。

なぜか頭に浮かんできた。

ついでにちっちゃい頃の夢を見たからか悪戯したくなったのでやることにした。

起き上がりテレジアの目を見て口を開く。

「 するか? 」

「 つつっ! 」

テレジアは顔を更に朱くして飛び出していった。

うん、今日もいい日だ。

ここは南米。

赤道付近にある教会が建てた孤児院　に見せかけた教会の拠点である。

ここを管理しているのは夫婦であるヴァレリアさんにリザさんだ。普段住んでいるのはその二人に娘のテレジアと孤児たち32名の合計35名である。

ついでに言うところには性格に難があるものや人見知りする代行者を矯正するための場所でもある。ここに一月住むと本人なのか疑われるくらいの変貌ぶりだそうだ。

「おはようレオナルド君」

笑顔で迎えてくれるリザさん。

その横にはテレジア。あつちを向いていて顔は見えない。

「おや、私が最後ですか」

後ろから声が聞こえてくる。

振り返るとヴァレリアさんがいた。

ヴァレリアさんは背は高いが背に対して細身なため人には頼りなく見えるようだ。

一部の人　うちの機関長やナルバレックなどは枯れ木のようだ、と言っ。

テレジアは二人の娘だ。

水色の髪はリザさんから、何故かやけない肌は二人から受け継いでいると思われる。

正直ヴァレリアさんの割合が少ない気がする。

ヴァレリアさんの金髪、そのほか身体的特徴が全くと言っていいほどテレジアには見られないのだ。

……いや、胸が控えめな辺りはヴァレリアさんだろう。リザさんは平均以上だし。

「遅かったわねヴァレリア。あなたが遅いなんて珍しいわ」

「ええ、ちよつとアンデルセンから連絡が来まして。レオナルド君、君のことも気にしていましたよ」

さつきまでの考えを止めて話を聞く。

「なんて言っていました？」

「鍛錬は続けてるか、とか健康なのかとかですね。私は驚いてますよ。あのアンデルセンがここまで親バカになるとはね」

きつと彼は否定するのですが、と続けた。

俺もそうだと思う。親父は俺への接し方が分かっていないようだから。^{5。}

「話は後にして朝食をいただきますしよ。冷めてしまいますからね」

ヴァレリアさんの言葉に従い席に着いた。

「レオナルド君はいつ頃帰ってこれますか？」

僧衣に着替えて出てきたレオナルド君に質問する。

「わかりません。夜には帰ってくる予定です」

彼の任務はナチの残党狩り。

二ヶ月交代で代行者が派遣され行われる。

ナチと共にいる魔術師、魔法使いは殺しても文句が来ないし治安の問題もあつて殺して燃やしとけば一般人相手の対策にもなるので成り立ての代行者がやる登竜門と言つてもいい。

普通は期間の間にナチの拠点を五つ潰せればいい方なのだが彼はすでに一月で七つも潰している。

正直言つて仕事をするのは良いことなので文句も言えなくて、必ず夕食の時間には帰ってくるので注意も出来ない。
しかも日曜日は休んでいるので手詰まりだった。

だが今日はテレジアの誕生日。

一週間前から言い続けていたし賢い子なのでテレジアが彼に好意を抱いていることも気づいているはず。
遠まわしに一緒にいてあげてほしいと言ってきたので今日は休むかと思えばまた出るらしい。

「そうですね……」

「？ なにかありますか？」

「いえいえ、なにもありませんよ。怪我しないように気をつけてください」

「？ 分かりました。行ってきます」

そうやって彼は外へ出て行く。

「……………はあ」

テレジアには悪いが今日を利用して休ませるつもりだったのだが失敗したらしい。

この任務ではナチはそこまで重要ではないのだ。本当は生きることの大切さを学ばせ、生への執着心を身につかせ、それにより代行者の生存率を高め代行者の人数を増やすことが目的なのだ。

信仰のためだとか怨恨だとかで死んでいく奴が多いため年中人材不足なのだ。

「ヴァレリア」

「なんですかりザ」

「また失敗したの？」

「ええ、今回は成功するかと思いましたが……………いやはや難敵ですね」

「ふふっ、そうね。もしかしたら初めての失敗に成るかも知れないわね」

「法皇さまもやってくれますねえ。百人目で失敗なんて悔しすぎますよ」

「そうよね。なんとしても成功させたいわ。仕も彼をテレジアの彼氏にするもね」

「おや？　なんだか変なものが混じってませんでした？　私は認めませんよ！　テレジアに彼氏なんてまだ早すぎます！　たとえレオナルド君でも認めることは出来ません！」

「あの子も16になったんだしそろそろ彼氏をつくったっておかしくないわ。それにテレジアも彼のことを気に入ってるんだから良いじゃない」

「いえ駄目です！　絶対に認めませんよ！」

「いままで男の子を友達にするとあなたが邪魔するから友達が女の子かこの子しかないのよ？」

「いい加減子離れするべきだわ。というかしなさい。いちいちテレジアにつきまとう貴方を処理するのも疲れてきたのよ」

「子離れしていない？　違いますよ。私はテレジアの為を思って」

「ねえ二人とも」

「！！？」

恐る恐る声のした方を向くと半目で責めるような目をしたテレジアが立っていた。

「ど、どうしましたテレジア」

「そ、そうねそんなところに立ってなにしてるの？」

「どうしたのじゃないよ。二人がこんなところで騒いでるから来たんだよ。」

で私言いたいことあるんだけどいいかな？」

「ええ、どうぞ」

「まずそう言うことは自分たちの部屋でやってほしいの。もしも人がやってきたらどうするの？ 私家の恥さらしたくないよ」

「恥とは、随分な言い方で……」

「次はお父さん」

「は、はい」

「お母さんの言つとおり子離れしてよ。お父さんがいるせいでクラスメイトの男子全員が近寄ってこないんだけど」

「それはテレジアの対人能力も関係してるのでは……」

「なに？」

「いえなんでも」

目をそらして嵐がすぎるのを待つ。

私に向けられていたテレジアの視線はリザへ向けられる。

「それで母さん」

「え？ 私？」

「うん、お母さん。」

お母さんはお父さんに子離れしろって言うけどお母さんも子離れしてよ。レオとくっつけようとしてくれるのは嬉しいんだけど朝みたいに様子うかがってるのはお父さんと変わらないよ」

「ヴァレリアと同じ……」

驚いた顔をした後両手で顔を隠しさっきの言葉を繰り返す。

「それちょっと傷つくんですが」

「お父さんうるさい」

「あ、すいません」

娘に屈する一父親（私）に娘の言葉に傷つく妻、

それを清々しそうな顔をしている娘。

そしてそれらを遠巻きに見ている子供たち。

カオスですね。レオナルド君早く帰ってきてください。

「…………？　　なんだか南米から助けを求められたような……………気のせいかな」

念話がヴァチカンの結界を抜けるはずないだろうと判断。気にせず前へ進む。

目指すのは教会所属の技術者のもと。

一週間前に頼んでおいたものを受け取りにきたのだ。

“リーシェ”と彫られた板の掛かっている扉を開く。

「ん？　　なんだ色男か。遅かったね」

「俺は色男ではない。いい加減名前を呼べ」

「はっ！　　青二才の名前を呼んでやるほど私は優しくくないよ」

「そうか。それで出来てるのか？」

「当たり前だね。時間厳守は当たり前だよ。でも良かったのかい？」

「なにがだ？」

「金はいくらでも使っていていいって言うからかなり使っちゃったけど……………」

「別にいい。人への贈り物ならいくらでも使える。それに俺はあまり使わないからな」

「はっ！　そういうところが色男って言われる理由だよ。……ほら持って行きな」

「ありがとう。ではまたな」

「二度と来なくていいよ！」

あのと少し知り合いと話してから孤児院へ戻りテレジアの誕生日会の手伝いをした。

そして誕生日会が始まると子供たちは大はしゃぎで纏めるのが面倒だった。

いつの間にか抜け出していたヴァレリアさんがサンタクロースの格好で出てきたり

それに興奮した子供たちがヴァレリアさんを引き倒したりと大騒ぎだった。

それが終わると子供たちは遊び疲れたのか眠り始めそれで会は終了した。

四人で片付けをしてそれぞれが部屋に戻った後。

俺はテレジアの部屋を訪ねていた。

扉をノック。

「だれ？」

扉が開かれ中からテレジアがでてくる。

「……………レオ？」

「中に入ってもいいか？」

「え、あ、ちょっと待って」

扉が閉められ中から「そごそ」と音が聞こえてくる。

「……………どうぞ」

五分くらいだったところで扉が開き中へ招き入れてくれた。

部屋は質素だがベッドに人形がおいてあったり、鏡があるなど所々に女の子らしいところがあった。

俺は机の椅子に座り、テレジアはベットに座る。

「えっと……………どうしたの？」

「渡したいものがあった。」

ポケットの中からもものを取り出す。

「ブレスレット？」

「ああ」

サファイアとターコイズを組み合わせたものだ。

その中に銀で造ったアルストロメリアが一つついている。

「ここに来たときテレジアが話しかけてくれたおかげで馴染めだし、他にもいろんなことを世話してくれたからそのお礼に」

「うん……ありがとう」

テレジアは手のひらに乗せられたらブレスレットを見ている。

「つけてみていいかな？」

「どうぞ」

目測のためサイズが合っていないかも知れないかったが問題ないようだ。

「じゃあ俺はこれで」

「ちょっと待って！」

立ち上がりノブに手をかけると後ろから声が掛かった。

「どうぞし」

振り向くと唇に柔らかい感触。

「
」

始めに感じたのは驚き。

だがそれが他のものに変わる前に柔らかな感触は無くなった。

「私からレオへの……その……クリスマスプレゼント」

「あ、ああ。ありがとう」

「……」

「……」

「じゃあ……」

「うん」

俺は扉を開き自分の部屋へ戻る。

その夜はすぐには眠れなかった。

扉が閉まり一人になった後私は混乱していた。

何故私はあんな行動をしたのかとかレオの唇意外と柔らかかったなとかプレゼント嬉しいとかいろんなことが混ざって頭の中で反響していた。

なんとか思考出来るくらいに回復するまで10分くらいかかった。

それでも顔は熱く、鏡で見るとトマトのように真っ赤だった。そしてそれを見てさらに混乱して元に戻ってを繰り返す。

何度目か分からないくらい繰り返したところにベッドへ横になる。

右手を挙げて手首にあるブレスレットを見る。

全体が青で造られたブレスレット。

たぶんついている宝石はターコイズとサファイア。

サファイアは分からないがターコイズは12月の誕生石。

そして銀の花。この花がなんなのかは分からないがたぶんなにか理由があつてこの形にしてあるのだと想像できる。

明日調べてみよう。

そう考えて明日が待ち遠しくなった。

私はその日ブレスレットを胸に抱いて寝た。

明日が待ち遠しすぎてあまり眠れなかったのは余談である。

閑話 クリスマスバージョン（後書き）

はい。本編進まなくせにこんなものは書けたりする春秋です。

ゲストとして怒りの日から先輩、神父、シスターの三人に出ていただきました。

再現できてるか怪しいところですが優しく見てください。

この続きで次の日の朝にテレジアがブレスレットをつけているのを見てその現場を見れなかったことを悔しがる夫婦の姿があった、とかレオの誕生日（仮）に指輪をプレゼントするテレジアとかあります。今のところ書く気ありませんが。

宝石とか花とかはインターネットで調べてきました。一応先輩のイメージに合ったものを選べたかと。ええ、自信あります。

あと、初めは全然クリスマス関係ないのはご容赦を。作風です。

しかしどこもかしこも雪が降ってホワイトクリスマスになっていますね。

彼女いない俺には関係ない話ですが。

じゃあここらへんで終わります。

感想、評価、意見たくさんください。

それが作者へのクリスマスプレゼントになります。

メリークリスマス！

お知らせ

今日からすこし作品の加筆修正を行います。

出来上がり次第入れ替えていくので話が合わないようになることも有るかもしれませんが。

そこの辺りを分かっていたら幸いです。

流れの不自然なところ（魔法使いの集会など）や作者が気になるところなどが対象です。

読んでくださっているみなさま。

この加筆修正、長くなるかもしれませんが
これからもこの作品をよろしくお願いいたします。

ここから字数稼ぎ

f f f f f f x x d d d d d d d d x d g t t t v t u t f j 7 g
r u r h f 5 t d 5 2 3 6 f e f

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7938v/>

理想を胸に

2012年1月2日06時49分発行